# 織田信長
## 一妻六妾伝

峰隆一郎

廣済堂文庫

## 廣済堂文庫絶賛発売中!

新・翔んでる警視1～8——胡桃沢耕史
翔んでる捜査官——胡桃沢耕史
殺しのインターチェンジ—西村京太郎
日本殺人ルート——西村京太郎
怖ろしい夜——西村京太郎
寝台特急「紀伊」殺人行—西村京太郎
目撃者を消せ——西村京太郎
消えたドライバー——西村京太郎
十和田南へ殺意の旅—西村京太郎
赤い雲伝説殺人事件——内田康夫
後鳥羽伝説殺人事件——内田康夫
平家伝説殺人事件——内田康夫
恐山殺人事件——内田康夫
王将たちの謝肉祭——内田康夫
餓鬼が斬る——峰隆一郎
孤狼が斬る——峰隆一郎
白狼の牙——峰隆一郎
修羅の爪——峰隆一郎
邪鬼が斬る——峰隆一郎
白蛇斬殺剣——峰隆一郎
青狼が斬る——峰隆一郎
魅鬼が斬る——峰隆一郎

カバーイラスト=柳澤達朗
カバーデザイン=宮　浩行

峰隆一郎

# 織田信長 一妻六妾伝

廣済堂文庫

430
み2-16
550

峰隆一郎　織田信長 一妻六妾伝

廣済堂文庫

特選時代小説

ISBN4-331-60431-4
C0193 P550E
9784331604311
1910193005500
定価550円(本体534円)

戦乱の世を力ずくで平定し、天下人となった織田信長。尾張統一、桶狭間の戦い、美濃攻略にはじまる激しい歴戦を経て、謀反によって本能寺で果てた信長の生涯を陰で支えた女たち。生娘を嫌い、性技に長けた若後家を好んだ信長は、吉乃・直子・お稲などの妖艶な熟女とのまぐわいに耽り、戦さに疲れた心を癒した。女を通して信長を描いた異色作！

特選時代小説
廣済堂文庫

## 廣済堂文庫絶賛発売中!

孤独な週末——赤川次郎
小指のいたみ——渡辺淳一
黒い龍——森　詠
クライマックスの女——高本公夫
情事の戦略——北沢拓也
誘惑未亡人——赤松光夫
東京ジョーコ生首殺人事件——和久峻三
熊本城秘愛殺人事件——斎藤　栄
夜の管理人——山口　香
孤剣 山陰道——八剣浩太郎
アルバイト探偵拷問遊園地——大沢在昌
偽造の太陽——森村誠一
魅鬼が斬る——峰隆一郎
野獣都市——大藪春彦
鏡の中の殺人者——和久峻三
真夜中に涙する太陽——笹沢左保
宝島殺人事件——斎藤　栄
企業合併——広瀬仁紀

織田信長　一妻六妾伝
定価550円(本体534円)
平成6年11月1日　初　版

著　者　峰　隆　一　郎
発行所　廣　済　堂　出　版

特選
時代小説

# 織田信長 一妻六妾伝

峰　隆一郎

廣済堂文庫

特選
時代小説

峰隆一郎　織田信長 一妻六妾伝

廣済堂文庫

特選
時代小説

2230①

# 廣済堂文庫

## 峰隆一郎小説群

**好評発売中!!**

**餓鬼が斬る**
泰平の江戸を揺るがす裏稼業の男たち……。江戸の町を殺気が奔る!!
470円

**孤狼が斬る**
追われる女を助けたはぐれ浪人が、襲い来る敵の刃を躱し秘剣を薙ぐ!!
470円

**邪鬼が斬る**
大奥上臈暗殺!? 刀根又四郎の殺人剣〝龍尾〟が鬼神の如く闇を舞う!!
500円

**青狼が斬る**
次々に襲い来る剣客。刀根又四郎の孤高の刀刃が縦横無尽に宙を舞う!
550円

**魅鬼が斬る**
江戸市中が脅える人斬り魔・魅鬼と刀根又四郎の剣が、闇を切り裂く!
550円

（定価は消費税込みです）

廣済堂文庫

特選時代小説

# 峰隆一郎

天下人・信長の激しい歴戦の勇と、
女たちとの艶めくまぐわいを描く!

**今月の新刊** 廣済堂文庫 特選時代小説

峰隆一郎 織田信長 妻六姜伝

特選
時代小説

# 織田信長 一妻六妾伝

峰 隆一郎

廣済堂文庫

# 織田信長 一妻六妾伝

目次

一章　まむしの娘　7
二章　生駒吉乃　29
三章　清洲城主　57
四章　側室直子　85
五章　美女お市　106
六章　お稲の方　138
七章　公卿の娘　151
八章　側妾お鍋　179
九章　女城主　204
十章　乳母お慈　225
十一章　遊女お遊　246
十二章　後家のお市　260
十三章　豪商の娘　278
解説　磯貝勝太郎　308

# 一章　まむしの娘

## 一

天文九年（一五四〇）六月――。

尾張国那古野城の城主は、織田備後守弾正忠信秀である。

信秀は荒々しい猛将であった。荒々しくなければ合戦などできない。合戦は常に死と隣り合わせである。ほんの少し気が弱くなっても負ける。

気弱な男は、この時代には生きていく資格がなかった。信秀はいつも自分の気持ちを高揚させていた。そうしなければ、城主ではいられなかった。

それを裏返してみれば、優しい気弱な男だったのだ。自分の弱さを見せまいとする。いつも肩を張っていなければならなかった。

弱々しくては部将たちがついて来ない。

それで横暴になり、残酷にもなる。おのれの本当の姿は誰にも見せられないのだ。

だから、世に猛将と言われることに満足していた。
だから、正室のるいも信秀の本性は知らなかった。女を抱いているときさえ、荒々しかった。だから女に甘えることもできなかった。
このころ、信長は吉法師と言った。奇妙なことに女の着物が好きだった。女の着物を引きずって歩く。着物に染み込んだ女の香り、化粧の匂いに憧れていたのかもしれない。
それで、おかしな子、とそのころから言われていた。
信秀の軍は三河の安祥城を攻め落とした。そして信秀は意気揚々と帰還する。
意気揚々であることを部将たちに見せつけなければならない。
「勝ったのじゃ、勝ったのじゃ」
信秀は、広間の高座に坐る。吉法師はそういう父を見ている。ほんとに強い父だった。
織田家はもともと神道派である。その祖父は、別所というところに閉じ込められた一族だった。つまり日本原住民系である。それが大和朝廷によって一カ所に押し込められた。
一族の中には荒々しい血が流れている。信秀はその荒々しさを表に出していた。そうしなければ一族は保たないのだ。
信秀の鎧には血がこびりついている。敵の返り血を浴びたのだ。乾いた血が剝げて落ちる。
重臣たちが居並ぶ。戦勝の酒宴である。



信秀は、尾張国の南半分を治める守護代、織田信友の三奉行の一人に過ぎなかった。信友が織田家の本家であった。信秀は治に乱をおこそうとしている。
武将たちは天下を狙っている。美濃の斎藤道三、駿河の今川義元、甲斐の武田信玄。これらの将たちは京をうかがっていた。まさに戦国時代である。
誰が天下を取るのか。このころ、織田家はまだ小物であった。天下どころか、尾張一国でさえ、まだ遠かった。
酒宴の席に、若い女を連れた鎧武者が現われた。
「このおなご、安祥城主、安祥家長の側女と思われまする」
女は突然、奇声をあげて信秀にとびかかる。手には懐剣があった。信秀は女の手首を摑み女を抱き寄せる。
「よいおなごじゃ」
女は必死に跼く。釣り上げられた若鮎のようだった。まだ、二十歳を過ぎたばかりだろう。
「今夜のわしの伽を申しつける」
敵の女を抱くというのも勝者のよろこびであった。
このころの女の名前は、特別なものを除いて名前は知られていない。女であり妾なのだ。もちろん名はあったのだろうが。

安祥家長の妾だった女は、鮎と名付けられた。それ以前の名は廃されたのである。鮎は湯殿で体を洗われ、湯帷子を着て、信秀の寝所にはべった。

信秀もまた戦場の汗を湯殿で洗い落とす。信秀は一人になったとき淋しい顔を作る。これが本当の顔なのだ。本当の顔は一人になったときにしか見せない。

安祥城は、側室の子信広に任せた。信広はこのとき十三歳である。嫡子は吉法師である。

信秀は、寝間に入った。そこに鮎が坐っている。戦国のころの美女たちは、城が落ちれば敵将のものになる。これは常識であった。女の宿命でもある。諦めなければならない。それとも死を選ぶかである。

信秀は、夜具の上に坐って鮎を抱き寄せた。わりに体の細い女だった。湯帷子の衿を開く。白い乳房があった。快い膨らみである。家長の手に揉まれた乳房なのだ。

乳房も丸く形をなしていた。その乳首を摑む。柔らかい乳房だった。信秀の手にわずかにふさがった。

それを揉み上げる。鮎は声を発しなかった。人形のように抱かれようと思ったのだ。だから男のするがままになっていた。

夜具の上に仰向けになり湯帷子を開かれ、肌をさらす。

「細いが、よい体をしている。家長はこの体をたのしんだか。家長は巧みであったか」



湯帷子を脱がせ、全裸になった。そして女の体をうつ伏せにして腰をもたげさせる。

信秀はその尻を摑んだ。そして尻の溝から手をのばして切れ込みに触れる。

そこは濡れてはいなかった。指を折ると壺に入る。湿ってはいるが、まだ露は出ていない。指で壺の中を掻きまわす。鮎はじっと耐えている。感じまいとしているのだ。

信秀は一物を摑み出した。怒張している。それを切れ込みに当てる。鮎は腰を振った。一物は外れて流れる。

「ここまで来て、わしを拒んでどうする」

また押しつける。濡れていないので容易に入らないのだ。押しつけると、また外れる。なかなか入らない。信秀はそれを面白がっている。

敵の女は、はじめは尻からしなければならぬ。そうでなければ征服感はないのだ。女ははじめに征服してしまわなければならない。

むりやりにねじ込もうとする。濡れていないので痛いのだ。それで尻を振る。

どうしても尻からは通らない。

信秀は、鮎の尻を抱き、手を前から回して切れ込みをせせる。だが、そこはなめらかにならない。

また、一物の尖端を壺口に当てた。尖端も乾いている。壺口も濡れていない。これでは滑り

込むわけはない。

「いたい」

と鮎が言った。信秀はおのれの唾を手にためて、切れ込みに塗り込んだ。

もう一度、唾をためておのれの一物を握った。

そしてしごいておいて、壺口に押しつける。

「あっ！」

と鮎が声をあげた。尖端が壺の中に滑り込んだのだ。それを押しつけて根元まで尽くす。

「ふふっ」

と信秀は笑った。ついに壺を貫いたのだ。鮎は、はじめは体を支えていたが、支えきれなくなって肘をつく。

そして両肘でも支えきれなくなって、両肩で体を支える。

腰だけが掲げられていた。尻が高くなると、一物が埋まっている壺が眼下に見えてくる。ゆっくりと一物を出入りさせる。紅い襞が見えてくる。

壺に一物を埋めておいて、改めて女の姿態を見る。白い背中がそこに拡がっている。白い尻を摑んでは揉む。

これで女を征服したことになる。



吉法師は、この光景を、板戸に少し隙間を作り、そこから覗いていた。もちろん吉法師には何のことやらわからない、が、妖しい光景だった。

信秀に抱かれた女の尻が美しかった。ゴクリと唾をのみ込んだ。もちろん子供が見てはならぬものである。

## 二

吉法師は、ポカポカと天気もいいところから城内の草むらの上で横たわっていた。そしていつの間にか眠ってしまう。

それを見つけた信秀は、吉法師の衿を摑んで引き起こすと、いきなり殴りつけた。吉法師はびっくりした。殴っておいては、地面に投げつけた。

「何ごとじゃ、そのざまは、土の上に寝るとは。誰かに殺されたらどうする。四辺は敵じゃ、おまえは織田家の嫡子であるぞ。おまえが殺されたら、織田家は滅びる」

と怒鳴りつける。吉法師はぽかんとしていた。

「油断はならぬ、隙を見せてはならぬ。将というものは常に用心していなければならんのじゃ、将殺されれば織田家は滅びる。滅びさしてはならんのじゃ」

信秀はまた叩く。城内に敵がいないとは言えないのだ。家臣になりすました敵がいるかもしれない。信秀は、猛々しいところがあるが、用心深くもあった。

「もっと、しっかりせい」

信秀は叱りつけておいて、去っていく。

彼は城内でも心に鎧を着ていた。寝ているときにも交代で宿直の者を置いていた。

それほどに用心しなければ、織田の大将としては生きていけないのだ。そう思い込んでいる。心配性の男でもあった。

吉法師は、いろんな父を見て育っていく。信秀はいつも片意地張って生きている。ゆったりとか、のんびりしている父を見たことがない。

守護代の織田信友から使者が来た。三河安祥城を落としたことを、なぜ報告せぬか、というお叱りである。

信秀はその使者を追い返した。守護代にも守護職・斯波義統にも従う気はなかった。むこうから頭を下げてやって来るのであれば、会ってやろう、という気なのだ。

信秀は、尾張国をおのれのものにする気でいる。尾張の守護職などこわくはなかった。領地は切り取っていかなければ、織田家は大きくならない。

現状で満足していれば、織田家など滅びてしまう。大きく膨らんでいかなければならない。



小さな城を次々と落として領地を拡げていく。そしてまた敵に挑まねばならないのだ。

常にいきり立っていなければならない。疲れることだが、仕方なかった。

尾張の国を征服し、尾張の守護職になりたかった。

武田、今川、斎藤、北条などと肩を並べるほどの大名にならなければ、織田家は安泰にはならないのだと考える。

あのようにキリキリしていて疲れようにと、子供の吉法師だって考える。城内にあってはもっとのんびりしていていい。出陣のときに緊張すればいいのだ。だが信秀はそうはいかないのだ。

この冬、吉法師は六歳で那古野城の城主になった。信秀は三河に近い古渡に城を築いて妻るい、吉法師の弟の勘十郎などと引き移っていった。

吉法師は一人になった。そのころから吉法師の奇行が見えてくる。赤い女の着物を引きずって歩く。そして女踊りを覚えた。

重臣たちは眉をひそめる。一人ぼっちだが信秀の支配を逃れたのだ。勝手きままにできた。

吉法師は、信秀が鮎を抱くのを見た。鮎は全裸になり尻から貫かれていた。

鮎は尻を高く掲げていた。淫らな光景ではなく妖しく美しい姿だった。

その光景が頭の中に焼きつけられている。

女の体を見たのはそのときがはじめてだった。世の中には美しいものがあるのだな、と思った。

美しくないものは女ではない。美しいものだけが女なのだ。鮎に憧れを抱いていた。大きくなったら、あのような女を自由にできるのだと。女の憧れのまま、成長した。

吉法師、十四歳、織田三郎信長である。

美濃の稲葉山城を織田の軍勢が攻めた。その中に三郎信長の武者姿があった。

この戦いは攻めた織田軍が敗れた。

稲葉山城の城主は、美濃国守護代、斎藤山城守道三であった。道三は勢いに乗じて、大垣城を攻める。信秀は、それと戦っていた。

道三の軍は、他の軍とは違っていた。猛将信秀もたじたじである。信長は信秀の城を守るために古渡城に走った。

城下に、清洲の織田信友の兵が火を放った。内なる敵である。もちろん信秀は信友を味方だとは思っていない。信友もまた信秀には怒りを覚えている。

母るいは無事であった。信秀が他国を攻めれば、背後を狙われるのだ。弟の勘十郎も無事だった。

信長は、弟の勘十郎が嫌いだった。母と父のもとでぬくぬくと育っている。信秀も信長に対



するように厳しくはなかった。

信秀が古渡城にもどって来た。そしてそこにいる信長を殴りつける。信長は大垣城に駆けつけなかった。信長は母の身が心配で古渡城にもどって来た。それを怒っているのだ。

母親など放っておけ、という考え方なのだろう。

「おまえは一体何を考えているのだ」

と信長を叩く。気絶するほどに。信秀は斎藤道三に負けた。そのことが口惜しかったのだ。

「この古渡城が攻められまする」

「おまえがそれを考えることはない。そのために部将を置いてある。おまえが駆けつけなくとも城は落ちぬ」

母のるいが信秀を止めるが、信秀はるいをも突きとばした。

「おまえのような男では、織田家は守れぬぞ」

「守りはいたしませぬ」

「なにっ」

「ただ、進むだけでございます」

ただ、信長はるいに会いたいだけにもどって来た。それを信秀に知られたくなかった。めめしいと思われたくなかった。

信秀はいつも猛々しいし荒々しい。そのように自分で自分を作りあげている。信長は自分はそうでないと思っている。信秀のようにはなりたくなかった。

武将というのは、おのれをそのように装わないと生きていけないようだ。

古渡城に、信長の祖父信定が来ていた。信秀の父である。信定は信秀を連れて密室に入った。

「清洲を攻めよ、守護と守護代を殺せ」

と激しく言う。清洲に行って信定は何かと言われたらしい。守護職は斯波義統、守護代は織田信友、信友は織田家の本家である。

二人とも信秀のやり方が気に食わない。それで古渡城下に火を放った。信友、義統にはそれほどの力はない。

「二人を殺して守護職になれば、斎藤道三も手が出せなくなる」

「清洲城を攻め落とすのは簡単なこと。だが、信友は本気です。信友の首を討てば、親戚筋がどう思うか、それでは尾張統一がむずかしくなります」

「いまのうちに清洲を討て、いずれ清洲は敵になる。いまでも敵じゃ。守護の命令で動く者も出てくる」

「斎藤道三とは和睦いたします」

「なんじゃと」



信定は目を剝いた。道三と戦って信秀はその強さを知ったのだ。敵にすれば今後面倒になる。信秀は、道三と手を握るべきだと考えた。そのほうが尾張統一は早い。

「道三が娘、信長の嫁に迎えます」

「なんじゃと」

信定は二度目を剝いた。

「道三はまむしじゃ。悪党じゃ。そのほうの手に負えるような男ではない」

「だから、和睦するのです。信友など、いつでも始末できます。当面は道三と手を結んだほうが、内より崩せます」

信秀は、諸国の状況を見ていた。今川や武田が立てば、織田家など踏みつぶされてしまう。武田、今川が京をめざせば、尾張を通ることになる。邪魔なものは踏みつぶすしかない。

いまは、今川、武田には相手にならない。黙って尾張を通せば、織田などなくなってしまう。今川や武田の属将になる気はなかった。

いまならば道三と対等に和睦ができるのだ。道三もまた、今川義元と武田信玄に尾張を通らせたくはなかった。

京に入って天下に命令しようというのは、いまは義元と信玄の二人である。この二人が京に上るのを防がなければならない。

信秀の部将、平手政秀が、稲葉山城に行って道三と会った。

「なに、わしの姫を信長の嫁にくれだと」

道三は目を剝いたが、しばらく考えて、

「それもよい考えかもしれんな」

道三には道三の考えがある。その考えは織田信秀と手を結ぶのも悪くはなかったのだ。道三は守護代の織田信友と手を握っていた。

信友と手を切って信秀と手を結んだほうが得だったのだ。信友に兵力はないし、合戦などする気はない。この戦国の世に守護代ということだけでのんびりとしている。

それに反して信秀は目を剝いてキリキリしている。戦力は道三のほうがある。だが、先のことはわからない。

信秀の子信長は、うつけ者と聞いている。ほんとうにうつけだったら、織田家も手中にできるのだ。道三はそこまで考えていた。

「よかろう、娘を信長にくれてやろう。だがこれは人質じゃ、わしの息子義竜に信長の姉をいただく」

このように話はまとまり、簡単に祝言は挙げられた。信長十五歳、濃姫十四歳だった。



## 三

信長は、まむしの娘というから怖ろしげな女だと思っていた。

新床に仰臥した姿は、ましな顔をしていた。絹の湯帷子姿もどことなく女だった。美濃の姫だから濃姫という。名は帰蝶だった。

帰蝶は仰向けになって動かない。人形のようにじっとしている。

「わしを嫌いか」

「好きも嫌いもありませぬ」

「そのとおりだ。わしもそなたが並の女で安心している。いや、安心するはまだ早いな。夜中に大蛇に化けるかもしれんな」

帰蝶は唇をゆがめて笑った。

夜具の一部分がわずかに膨らんでいる。手を夜具の下に入れると、そこに懐剣があった。

「わしを刺すつもりか」

「護身のためでございます。女の心得です」

「なるほど、まむしどのに、信長を刺せと言われたか」

「いいえ、いざとなれば胸を突いて死にます」
信長は懐剣を遠くへ投げた。紐を解いて前を開く。
白い肌だった。乳房の膨らみはあったが、乳首は小さい。
娘らしく細腰は細い。腰もまた細かった。下腹部には申しわけ程度には茂りがあった。十四歳だ、まだ少女の体だった。
だが、この時代には十四歳は女である。十二、三歳で男を知る。男たちが少女を求めたのではない。少女から男を求めることもあった。
白いなめらかな肌を撫でる。帰蝶はじっとしている。
「男はわしがはじめてか」
「はい」
という。帰蝶は目を閉じていた。
道三の娘では、手を出す男もいなかったのだろう。このころ十四歳にもなって男を知らないということは恥ずかしいことでもあったのだ。
乳房を摑むにも小さすぎた。肌を撫でまわす。股はしっかりと閉じられている。
「夫婦になったのだ。まぐわわなければならないな」
「はい」



と言う。覚悟はできているようだ。はざまに手を入れようとするが、股を開いてはくれない。どうしたらよいかわからぬ。もちろん信長はすでに女を知っていた。
女たちは男を誘う方法を知っている。女の言うなりにしていれば、一物は壺に収まるのだ。
帰蝶は生娘だ。どうあつかっていいかわからない。
信長は帰蝶の手を股間に誘った。一物を握らせようとしたが、手は引っ込められた。
膝頭を両手で摑んでこじ開けようとする。だが開かないのだ。女の股の力は強い。
信長は体を重ね合わせるまでにてこずった。
「股を開いてくれねば何もできぬ」
こういう女でも、信長の一物は怒張している。
何とか収めなければ目的は達せられない。膝を折り立たせた。そして股を開こうとする。
それも無駄だった。股を開かせるために悪戦苦闘、ようやく股を開かせたものの、切れ込みには潤みはない。
油断をしていると、また股を閉じられる。
潤みがないので、そこに唾をつけようとしたら、
「きたない」
と言った。濡れていないと一物が入りにくいことは知っている。

ついには体を重ねたが、手込め同然だった。覚悟はできていても、つい拒んでしまう。

「いやだ、痛い」

と声をあげていた。ようやく一物を没入させたのだ。信長もすぐに終わっていた。裂けたところから血が出ていた。女ははじめてのときは膜が裂けて血を出すということは知っていた。血を見るのは好きではない。父信秀は血を流せという。合戦の場である。だが同じ血に違いはないのだ。

信長はまだ家督を許されているわけではなかった。那古野城の城主ではあるが。だが、城主であれば、信長の噂は流れる。

うつけ者、であった。

だが、武芸は嫌いではなかった。馬を駆って野山を走り回る。家臣たちと競走をする。うつけ者でも十五歳に似合わず逞しくなっていた。

一生を合戦で過ごす覚悟はできていた。信秀の荒々しさも見てきている。猛々しくあるためには体力をつけねばならない。

一日中馬で走り回ることもあった。一日中若者たちと相撲をとる。一日中木刀を振り回している。合戦に出て頼りになるのはおのれの力だけである。

怖ろしい父もいない。優しい母もいない。だが孤独にも馴れてきた。武将は親の愛など必要



としない。

父信秀にはたびたび叩かれた。信長は父が怖ろしかった。いずれはあのような武将になるのだろうと思った。

合戦は血である。多くの血が流される。

信秀は飢えた狼のように、血を求めていた。戦場では狂ったように暴れ回る。

狂ったようにではなく、狂うのだ。おのれを狂わせなければ合戦には勝てぬ。織田勢が強いのは、まず大将が狂う。だから家臣たちも狂うことができるのだ。

信秀は、自分に合戦を好きだと思い込ませることができた。血を流し、人を殺す。

軍の後方で指揮を執るようなことはしない。おのれがまっ先に突き進んでいく。家来たちも負けまいと走る。

織田勢が強いわけである。いつでも死ねる覚悟はできている。だから狂えるのだ。

だが、狂えば勝てるというわけではなかった。

道三の軍に負けた。狂うてもどこかに限界がある。もちろん、その辺のことは知っている。

帰蝶は信長とのまぐわいにも少しずつ馴れていった。だが、信長のするとおりになるだけで、ウンともスウとも言わない。

ただ、じっと信長が放出するまで待っている。まぐわいとはそんなものだと思い込んでいる

ようだ。

十五歳の信長も女に巧みというわけではなかった。あつかいに困る。だが正室だからまぐわわねばならないのだと思う。

信長は、月に一度ほどは、帰蝶が父道三に対して手紙を書いていることは知っていた。知っていたが、知らないふりをしていた。

使いの者が美濃に走る。その者も吟味はしない。那古野城のことを、信長のことを書き送っている。

帰蝶にとって信長よりも道三のほうが大事なのだ。娘が父への手紙ではない。細作（密偵）が主君への手紙なのだ。細作のつもりでなくても、那古野城のことを書き送る。

信長は、帰蝶を抱いていても、ふと思いついたように部屋を出ていく。そしてしばらくするともどって来てまた抱く。

「夜中にどこにおいでになるのですか」

「ふむ、言うてはならぬことだが、夫婦に秘密があってはならんな。実は美濃に放った細作がもどって来て伝えるのだ。このことが人に知れてはならんので、夜中になる」

「美濃ですか」

「美濃にはわしに通じている者がおる。このごろは道三どの、ご子息と仲がよろしくないとか、



義竜どのは道三どののお子ではないという噂もある」

信長は切れ込みに口を当てる。そこに唾をためなければ一物が入らないのだ。帰蝶はそこを舐められるのが当たり前のように思っている。

そこをなめらかにして一物を没入させる。並の女ならば一物を入れて押しつけていると女のほうから腰を使ってくるものだ。だが、帰蝶はびくともしない。

「敵の情報は常に入れておかなければならぬ」

「父は敵ですか」

「敵ではないが知っておきたい。道三どのの重臣とは、つながりがある」

帰蝶は、そのことを道三に書き送った。

それから一カ月後、道三は重臣の中の二人の首を刎ねた、という情報が信長にもたらされた。

信長はニヤリと笑った。帰蝶に罠をかけたのが、まんまとはまった。

重臣が道三を裏切っているわけではなかった。信長の作り話である。

道三は、おのれの重臣のすべてを信用しているわけではなかったのだ。

帰蝶から手紙がくれば、そのほうを信用する。信長が仕掛けた罠とも知らずに、少し怪しい重臣を処罰する。

道三もこうなると怖ろしくない。重臣たちを信頼していない。道三も崩せるのだ。信じてい

るのは帰蝶だけだったのかもしれない。

もちろん帰蝶が裏切るわけはないからである。帰蝶が罠にかかるなどということは考えない。

信長は道三の弱点を知った思いがした。諜報というのは意外に役立つものである。年若い城主はそれを知ったのだ。



# 二章　生駒吉乃

## 一

信長は、湯帷子の袖をはずし、半袴に腰には火打石の袋や干飯（ほしいい）を入れた袋などをぶら下げ、髪は茶筅髷（ちゃせんまげ）にして鮮やかな布で巻き上げ、朱鞘の太刀を腰に差していた。

一城の主のみなりではなかった。父信秀に似て、おのれを荒々しく見せる術を心得ていた。

上品な公家のような城主では城は保たないのだ。

ちなみに、今川義元などは歯まで黒く染めて公家のようだった。もっとも今川は織田に比べると何倍も大きい。公家面でいてもよかったのだ。兵力も十倍以上はあった。

もちろん今川は織田など眼中になかった。誰一人として信長のことなど気にもかけていなかった。

信長は、馬を駆る。続くは家臣二騎だけである。

尾張の原を走って生駒の屋敷に駆け込む。生駒の当主八右衛門は、織田家の家臣ではない。

言わば郷士である。

生駒家では、すぐに湯をわかす。そして信長に湯に入ってもらうのだ。生駒家の娘吉乃が、信長の背中を流す。このとき、信長は十六歳、吉乃は二十二歳だった。

信長が吉乃になじんだのは二年ほど前からである。

吉乃は土田弥兵次の妻であったが、弥兵次が戦死して生駒家にもどって来た。

それに信長は手をつけたのだ。しっかりとした女らしい女だった。肌もなめらかで色白であった。

吉乃は湯帷子を着て、信長の背中を流す。そして前に回ると胸から股間まで洗う。

一物は怒張していた。恥らいながら一物を手にする。

信長は女の手の動きを見ていた。思いやりのある指の動きだった。信長は立ち上がって、

「咥えよ」

という。吉乃は一物を押しいただくようにして、唇を尖端に押しつけてくる。そして舌で舐めはじめる。

信長はそれをじっと見下ろしていた。吉乃は信長よりも六歳も年上だった。それに後家である。舌の動きはやさしかった。

はじめてのとき、吉乃は信長の前に茶を運んで来た。八右衛門が命じたのだ。



美しい女らしい女だった。信長は一目で吉乃が気に入った。

それ以来、信長はこの生駒屋敷に通って来るようになった。吉乃がいとしかったためでもある。

信長は吉乃の口の中にしたたかに放出する。それを口で受けて、唾液に絡めてのみ込むのだ。

吉乃以前にも、侍女の幸が信長の一物から口で受けている。それとはまた違った。女によって口や舌の使い方は異なる。

吉乃とのことは帰蝶には知られてはならなかった。吉乃とのことを帰蝶が道三に手紙で知らせれば、どんな難題をふっかけられるかわからない。

もっとも帰蝶は、信長に惚れているわけではない。だから信長の行動は気にかけないし、知ることもなかった。

生駒屋敷でもそれは気にかけていた。

信長は湯から上がる。そして部屋に入ると、そこに夜具がのべられていた。そこに坐るとしばらくして吉乃が湯を浴びて入って来る。

本来は、そこに酒膳がなければならないのだが、信長は酒を呑まない。一度、酒に酔って死にそうになったことがある。以来、酒は呑まないことにしていた。

吉乃を夜具の上に坐らせる。向かいに坐った信長は、湯帷子の衿を開く。そこには二つの乳

房が並んでいた。美しい乳房だった。乳首も赤く染まっている。

これが女の乳房だった。吉乃は恥ずかしそうにうつ向く。手をのばして手が乳房を支えるようにする。そして手を上下させる。乳房がゆたゆたと揺れる。

そのさまを眺める。これが女の乳房だと思う。吉乃が熱い吐息をついた。それだけで吉乃は感じているのだ。

信長は母るいに愛されなかった。母は弟の信行を愛した。信長は幼いころから奇行の多い餓鬼だった。弟信行はおとなしく、気品もあり、るいの気に入っていた。

信長は母と共に住んだことはない。信行はいつも母のそばだった。いまでも古渡城にるいと共にいる。

父信秀に叩かれたのは信長だけである。信行は一度も叩かれたことはない。

いまは信秀の情がわかる。叩かれ投げられ、信長は失神したこともある。

信秀はむしろ信長を突き放した。武将は強くなければ生き残れない。小領主は攻められすぐに滅ぼされてしまうのだ。信秀が攻め落とした安祥家長もその一人である。

荒々しく猛々しくなければ、滅ぼされてしまう。信秀は命賭けて織田家を守ってきた。これからは信長が守っていかなければならないのだ。

小領主は生き残るために、いつも合戦している。信長はいつも武田信玄に手紙を出していた。



信玄に敵と思われないためにである。それも生き残るための手段である。

父の情は必要だった。だが母の愛はいらなかった。軟弱では生き残れないのだ。

信長は吉乃の乳首を摘んだ。熱い息を吐いた。再び乳房を摑んで揉み上げる。

「お舘さま」

と声をあげる。

「そなたの乳はきれいだ」

「ありがとうございます。お舘さまのお気に召して、吉乃もうれしゅうございます」

吉乃を押し倒す。乳房を揉む。吉乃の腰がせつなそうに動く。乳首を咥えて吸う。吉乃はせつなげに信長に抱きついてくる。

信長は三人の乳母の乳首を咬み切っている。疳の強い赤ん坊だったのだ。その乳首が母親のものでないことを知っていたのだろう。

乳首を吸い、舌で転がす。優しく咬んでやる。吉乃は体をくねらせる。それがいかにも女らしかった。

手を肌に這わせる。湯帷子の紐を解いた。

細腰から腰、そして尻のあたりまで撫でまわす。腿を撫で下腹部を撫で、そしてはざまに手を通す。

「あーっ」

とせつない声をあげる。男の指が切れ込みを分ける。そこはすでにあふれるほどに潤んでいた。

吉乃は信長がいとしいのだ。だから、すぐ感じる。露は充分に出てくる。

切れ込みに指を遊ばせる。吉乃の腰がくねった。指に露をまみれさせておいて肉の芽に触れる。

「あーっ、狂いそうにございます」

腰をひねる。指の腹を芽に当てる。そして指をふるわせる。吉乃はたまらないというように腰を振る。

二指を壺の中に没入させる。また声をあげて、はざまを手に押しつけてくる。襞はしきりに指に絡みついてくる。

吉乃はためらいがちに、信長の股間に手をのばしてきた。そして怒張した一物を手にする。湯殿で一度放出した。だからいくらかは保つはずである。信長は若いだけに早い。吉乃も感じやすいために、すぐに気をやることができる。

はじめのうちは没入させると、すぐに放出していた。いまは女を楽しむ方法を知っている。吉乃も一物を手にしてもいきなりしごいたりはしない。そっと指を這わせる。



信長は体を起こす。吉乃は恥ずかしげに足を折り立て開く。このとき眼下に切れ込みが見えている。そこは濡れ光っていた。女が恥ずかしい瞬間である。

早く体を重ねて欲しい、と両手をのばす。尖端が壺口に当てられる。吉乃は息をのむ。尖端に力が加わる。それを迎えるように、彼女は夜具から尻を浮かす。

一物はつるんと滑り込んでくる。

「あーっ」

と声をあげ、信長に抱きつく。腰を回す。

信長の一物が壺の中にあるということはうれしいことだった。

両手で男の尻を引き寄せる。動かないでという意味である。

「お舘さま、気がいきます」

泣くような声をあげる。出し入れしなくても、襞は動いている。しっかりと捉えようとしている。

体が震える。あーっと声をあげる。気がいく。同時に信長は出し入れした。こらえきれないのだ。したたかに放出する。その瞬間に吉乃は気をやっていた。

壺の中で一物が萎えていく。それが妙に淋しい。でもこれだけではないのだ。信長は体を放す。吉乃は股間に紙をはさんで男の股間に顔を埋ずめる。

そして一物にまみれている露を舐め取る。そして力のない一物を口に咥える。一物を口に咥えているとき、女は倖せなのだ。ふぐりを手で包み込む。

信長は安心しきっている。吉乃だからこそふぐりまで与えることができるのだ。信長は仰向けになってゆったりと力を抜く。

父信秀はいつもキリキリしていた。キリキリしていては体は保たない。信秀もやはり女を抱いて力を抜いていたのか。

信長は、まだ信秀の疲れはわからない。若すぎた。いまは、おのれが年とったときのことはわからない。

一物が再び怒張するまで、それほど時間はかからない。吉乃の口の中でたちまち力を盛り返すのだ。

信長は若いだけあった。肌がなめらかで、体はしなやかなのだ。そして筋肉がついている。

吉乃は信長の体を抱くだけで震えてくるのだ。

一物を手にして信長の腰をまたいでくる。またぐ瞬間が恥ずかしい。だからすぐに一物を入れる。また一物が入ってくる。

「あーっ」

と声をあげる。



これも倖せな瞬間である。根元まで迎え込むと、男の胸にうつ伏せる。若いが厚い胸だった。しがみついて腰を回す。

信長は吉乃の柔らかい尻を抱き寄せていた。尻の肉を手で摑む。摑んだ尻が動く。快い手触りである。

一物は柔らかい肉に包み込まれている。

その肉がうねる。襞が一物を捉えようとしているように思える。尻を回してはしゃくりあげる。息が乱れていた。

吉乃は、信長の上に重なって尻を回していた。肥っているというのではないが肉付きのいい尻だった。

吉乃は大きく開いて男の腰を挟みつけていた腿を閉じた。信長は足を閉じることになる。一物はそれだけ締めつけられることになる。

それだけではなかった。締めつけながら、肉の芽が一物の胴に触れることになる。体を上下させる。芽がめくれ返るような気がする。吉乃は呻いた。わずかではあるが、一物も壺口を出入りする。

吉乃はうめいた。快いのだ。気をやるばかりがまぐわいではない。気をやる以外の快さがあるのだ。

「お舘さま、吉乃はうれしゅうございます」という。全身が浮き上がってしまいそうで、しっかりと男の体に抱きつく。これほどにいい気持ちになっていいものだろうかと思う。できることなら、このまま死んでしまいたいと思う。このまま死ねたら、どのように倖せだろうと。

このころ、死は日常茶飯事だった。誰もが簡単に死んでしまう。夫の土田弥兵次も、ある日、戦場に出て行って帰って来なかった。それを悲しむには、突然すぎた。もっとも日ごろから、夫が死ぬという覚悟はできていた。

やっとそのときが来たのだ、という思いで泣けなかった。夫が出陣する度に、今度は帰らないのかもしれないと思う。その思いに馴れていた。だから、やっぱり、と思っただけだった。

信長が下から突き上げてくる。その度に、ウッ、と声が出る。壺の底が突き上げられる。思わず壺口を締めつける。

全身が痺れるようだ。気をやりたいと思う。そう思うが、気がいかないのもまたよかった。いつまでも、こういう気持ちでいたいと思う。

信長は何の警戒もなかった。いま押し込む者がいれば易々と討たれてしまうだろう。自分で用心のなさに苦笑したりする。

吉乃は体をのけた。そこに這わせる。信長は尻のほうに回る。そして尻から没入するのだ。



尖端が外れた。

「あっ」

と声をあげる。壺口がよくわからないのだ。吉乃は下から手をのばしてきた。そして一物を摑む。そして壺口に誘導する。

一物はつるんと滑り込む。吉乃の尻を抱いた。なめらかな尻である。弾力があって柔らかい。ゆっくり出し入れをする。

吉乃は両手で体を支えきれなくなって、肘を折る。やがてはその肘も疲れて、両肩で体を支える。尻だけは高く掲げられていた。

そのために、信長には一物が壺に埋まっている部分が見える。引き抜けば雁が外にまくれ出てくる。そのままにしておくと、雁はゆっくりと中に消えていく。その光景も妙だった。

吉乃はその光景を見られているとは知らない。壺口がこのように見えるのは、この姿勢だけだろう。

出し入れする。その度に尻はくねる。

信長が一物を外す。すると吉乃は急いで仰向けになり、股を開く。そして手をのばして一物を摑み引き寄せる。

すぐには壺口には持っていかない。尖端を肉の芽に押しつける。そして手を震わせる。声を

あげ、腰をゆすり、声をあげる。

尖端で芽に触れられるのが快いのだ。そして尖端を入口に案内する。一物が壺の中に埋もれていく。

## 二

信長が生駒屋敷に来るのは、ただ吉乃だけが目的ではなかった。当主の生駒八右衛門は河内国生駒郷の出である。いつのころからか尾張へ移って来た。

信長は生駒屋敷のことは父信秀から聞いていた。それで家来十騎ほど連れて生駒屋敷にやって来た。当主の八右衛門は、うつけと言われていた信長を一目見て、ただ者ではないと感じた。

八右衛門はそれまで、尾張守護代の織田信友とつながっていたが、信長に乗り換えた。そのほうが生駒家にとっても安全であると。

まさか信長が天下を取るとまでは考えなかったにしろ、この戦国の世に生き残っていくだけの器量があると考えた。

それで吉乃をさし出したのだ。信長よりかなり年上だが美貌であることは認めていた。たしかに信長は一目で吉乃が気に入った。



生駒家は富裕な家だった。油で財を成したのだ。

屋敷の中はまるで城だった。この屋敷の一方には棟割り長屋が建っていて、そこには武芸者、牢人が住んでいた。

牢人たちの出入は多かった。生駒の名を聞いて諸国から集まってくる。必然的に諸国の情報が集まってくる。

この屋敷に行けば、領主たちの情況もわかるのだ。近隣の情報を入れるためにこの屋敷へ来る。

いかに吉乃が好きでも、信長は女にのめり込むような男ではなかった。

木下藤吉郎もこの屋敷にいた。そして蜂須賀小六に紹介されてその手下になっている。信長に仕える以前である。

この生駒屋敷から、武芸者も数多く出ている。大名が召し抱えに来ることもあるし、八右衛門が紹介することもある。

吉乃を抱いたあと、信長は庭へ出て来た。そして濡れ縁に腰を掛ける。

八右衛門が出て来て、縁に坐る。

八右衛門は、おのれの耳に入った諸国の情報を語る。美濃は道三が家督を嫡子の義竜にゆずったこともここで耳にした。

「道三も老いぼれたな」
と呟いた。
信長は義竜という男を信用してはいなかった。道三は人を見る目は持っているはずだった。わが子だから見る目が曇ったのか。
信長の前に、一人の若者が膝を折り両手をついた。
「何者だ」
「源五郎丸十蔵と申します。武芸者でございます」
「武芸者か、刀を使うか」
「はい、神道流をいささか」
「わしに仕えたいと申すか」
「はい、でも禄はいりません。役に立つと思っていただければ、そのときに禄をいただきます。いまはおそばに置いていただけば、それだけでけっこうでございます」
信長は八右衛門を見た。笑って頷いた。信用できる男、役に立つ男ということだろう。
「刀は合戦では役に立たん」
「槍も使いまする」
「わかった。考えておこう」



源五郎丸十蔵、あっさりと引き下がった。しつこくては嫌われると思ったのだろう。
「守護代にはご用心なされませ、動きが不穏でございます」
「なあに、守護代には何の力もない」
父信秀も、本家の織田信友を相手にしていなかった。

信長は、家来二人を連れ、三騎で尾張の野原を走っていた。生駒の屋敷に行くためである。吉乃の体が恋しかった。
もちろん、帰蝶は抱いてやっている。信長が月に一度か二度しか手を触れないと道三が知れば、他に女がいることを知るだろう。
そうすれば帰蝶の仲もおかしくなるし、道三もまた考えを変えるかもしれない。帰蝶の体に興味がなくても、五日に一度くらいは手を触れてやらなければならない。
吉乃のことを帰蝶に知られないためには、帰蝶を抱いてやらなければならない。相変わらず帰蝶は反応を見せなかった。
もしかしたら女ではないのかもしれない、と思うこともある。信長は抱けばその度に放出する。だが孕みもしない。
女は孕めば、男を感じるようになると言われている。ただ、人形のように仰向けになってい

るのに、一物を差し込み、そして放出するだけである。面白くも何ともない。

だんだん、帰蝶を抱くのがいやになってくる。その反動として吉乃を抱きたくなる。吉乃は過剰なほど女だった。

馬を駆る。前方に十数人の影が走り出て来た。野伏りがと思った。牢人のたぐいだ。刀を抜いた。

信長はその男たちの間を走り抜けよう、と馬の腹を蹴った。だが、野伏りの一人が馬の足を薙いだ。馬は前のめりになる。

信長は転げ落ちた。起き上がると刀を抜いた。一人が斬りかかってくる。

「殿」

と叫んで家来が敵の刀を受けた。刀がかち合って折れた。両方の刀がである。アッ、とあわてる曲者を、信長が斬った。あとの少数が集まってくる。

そのとき、向こうから走って来る黒い影があった。まるで黒い熊のように走って来る。

刀を折った家来は脇差しを抜いた。信長も剣術の稽古はしている。容易には斬られない。だが、十数人もいては無理だ。野伏りは信長と家来を囲む。

こんなところで死ぬわけにはいかん。何とかこの場を脱出しなければならない。

「おのれ」



と頭に血が昇った。

そのとき、黒い影が走り着いた。

「ギャーッ」

とわめいた。びっくりして野伏りが振りむく。それを上段から斬り下げた。二人目の胴を薙いだ。野伏りの体が二つに折れた。上半身が地面に這い、下半身は立ったままだった。胴を一刀両断にしたのだ。

腸がどろりと流れた。野伏りは、下半身を失ったのも知らずに、腸を引きずって這っている。

三人目は、首を刎ねられた。一呼吸あって首が転がり落ち、首根から血が噴き出した。その血を仲間が浴びる。

信長には、ようやく味方だとわかった。これで助かる可能性がでてきた。

「みんな斬るな、一人だけ残しておけ」

と怒鳴った。その声で野伏りたちは浮足立った。

影は四人目を斬った。右腕を肩から斬り放した。右手は刀柄をしっかり握っていた。

袖から滑り出てきて、腕のつけ根が地面を這った。

家来の二人は刀と脇差しを構えている。斬り込んでは来れない。

五人目は右腿を切断されて地に這った。

正確な太刀さばきだった。もちろん何者かわからない。八双から左肩へ斬り込んだ。首と右肩、右腕をつけた部分が、坂を滑り降りるように滑っていった。

まだ、生きていた地面に落ちた首が、おのれ、と叫んだ。まだ声帯が残っていたのだ。目を剝いたままである。

次の野伏りを斬り下げた。左の耳朶（みみたぶ）がとんだ。そのまま肩のつけ根を斬り裂く。刃が肩にズーンと入る。刃は心臓を裂いた。一瞬、血がほとばしり出る。

次の男に体を寄せると、柄頭で野伏りのこめかみのあたりを叩く。野伏りはストンと尻から落ちた。

そこで終わりだった。四、五人は逃げていった。

「一人は残しておけと言ったであろうが」

「この者は生きております」

こめかみを打たれた男は気絶している。

影はその男に活を入れた。男は目を開いてキョロキョロとする。

「わしを斬れと、誰に頼まれた」

男は信長を見ている。



「わしを見逃してくれるのか」

「助けてやる。狙わせた者に言いたいこともあるのでな。金もやろう」

腰に下げた袋の中から、金の粉を取り出して男の前に投げた。

「わしの命を狙ったのは誰だ」

「守護代だ。織田信長を討てと命じられた。それでここ十数日、狙っていた」

「わかった」

信長は、そう言って男の首筋に刀を叩き込んだ。

「おのれ、助けてくれると言うたではないか」

「おまえはわしを信じたのか。うつけだな」

手で首筋を押える。だが噴き出した血は止まるわけはなかった。

男は信長に抱きつこうとした。その前に家来が立った。そして向こう向きに、背中を叩いた。

男はよろめきながら歩いていく。そして十間ほど歩いたところでバタリと倒れた。

野伏りを斬った男は、刀を拭い鞘（さや）に収めて信長の前に片膝ついて坐っていた。

「そのほうは何者だ」

「源五郎丸十蔵にございます」

「何か聞いたことのあるような名だ」

「先日、生駒屋敷で、ごあいさつ申し上げました」
「そう言えば、聞いたことがあるような。だがどうしてここにおる。まさか、わしが襲われると知っておったわけではあるまい」
「はい、那古野城から走ってまいりました」
「なんだと、走って来た？　そのほうは馬なみに走れるのか」
「申しわけございません。少し遅れました」
ふむっ。と信長は唸った。人が馬なみに走れるとは思っていなかったのだ。
「それがしは運がようございました。お舘さまのお役に立てて」
「なるほど、運がよかったか。刀術というのも存外役に立つものだのう。そうか。それだけ足が早ければ、物見に出せるな。だが召し抱えるとは言わん」
「おそばに置いていただくだけでけっこうでございます」
「よかろう、橋田、この源五郎丸を城に入れよ」
「ありがたき倖せにございます」
と源五郎丸は頭を下げた。橋田七郎は頷いた。



## 三

古渡城から末盛城に移って父信秀が倒れた。疲れ果てたのである。荒々しく猛々しくふるまうことに疲れた。
猛々しくふるまっていなければ、織田の領主はつとまらなかった。猛将と言われただけに近隣の城主たちは信秀を攻めきれなかった。
たしかに信秀は合戦のときは先頭に立って狂ったように戦った。まさに猛将を演じきったのだ。
キリキリと神経だけ尖がらして、その疲れを癒す方法を知らなかった。信秀は女にのめり込むこともしなかった。疲れは体の中に貯えられたままだった。今日で言うストレスである。
そして信秀は死んだ。祖父の信定が来て怒った。
「親不孝者めが、尾張統一もしないで」
信長は、信秀が死ぬまで側にいたが、死ぬと同時に、那古野城に帰っていた。それを信定が怒る。
「あのうつけ者が、嫡男が枕もとに坐らずして誰が坐る。信長ふぬけとあれば、謀反、裏切

り、津波のように押し寄せてくるぞ」

四辺の一族の者たちも、信長を狙っている。うつけには尾張は守れぬと、織田一族もまた味方ではなかった。隙があれば奪い取ろうとする。

母るいは、荒々しいうつけの信長よりも弟信行を織田の当主にしたかった。信行がいとしかったのである。

弟信行、母るいさえも信長の敵だったのだ。信長の兵は一千、それに生駒一族、蜂須賀小六などの豪族がついているだけだった。

信秀の葬儀に、信定、るい、信行、そして重臣たちが居並んでいた。上座の喪主の席だけが空いていた。僧の読経の声が流れる。

そこに信長が現われた。半袴のうつけ者の姿である。太刀を片手に仏前に進む。

「父上、思い残されるな、尾張はわしがこの手で奪い取る」

抹香を摑むと、位牌に投げつけて、葬儀の室を去る。そのとき、信長は戦いをひかえていた。まず、今川義元に通じた鳴海城の山口教継（のりつぐ）である。

信長は軍の先頭に立って馬を走らせる。山口教継は裏切り者だった。裏切り者は討たねば、織田家はばらばらになってしまう。

信長が統一しなければ、すぐに裏切る者が多すぎる。父信秀の苦労がよくわかる。威を張っ



てないと、すぐに攻め込まれる。

信長は帰蝶の部屋へ行こうとしていた。帰蝶をないがしろにしては道三に疑われる。いまは味方でも、いつ敵に回るかもしれないのだ。

暗い廊下を歩いていた。突然、三つの黒い影が飛び出して来て斬りかかる。信長も刀を抜いた。一応の武芸の心得はある。

そこにもう一つの黒い影がとび出して来た。一人を雁金（かりがね）に斬り下げる。一人の胴を抜いた。そして返す刀で、首を刎ねた。刎ねておいて、庭に蹴転がした。

廊下で血を噴かれては汚れる。曲者（くせもの）は三人とも庭に落ちた。源五郎丸十蔵だった。刀を後ろに隠し、片膝ついている。

これで十蔵に助けられたのは三度目だった。

一度は野原で、一度は生駒屋敷での酒宴のときに。

敵はわかっていた。守護代の織田信友だった。

信長はまだ家督を相続してはいなかった。それでも信友は信長が気になったのだろう。

父信秀が死んでも、信長はまだ家督を継いでいなかった。

弟信行は、おのれこそ家督を継ぐべきだと思っている。祖父信定も母るいも、そして信秀の弟たちも、信長を信用していない。

そういう中で、信長はどうにか家督を継いだ。だが、弟信行は納得しない。

「兄者には、織田家の棟梁は無理です」

信長は信行を張りとばした。母るいが走って来て信行の楯になる。

「兄弟は仲良くしなければなりません。喧嘩させるために、わたしは二人を産んだのではありません」

母の愛は平等ではなかった。信行が棟梁となることを望んでいたのだ。それが信長にはわかっていた。

「わしが家督を継いだのは、織田家のためではない。わしのためだ」

と言い切った。

信長が家督を継いだことで、守護代の織田信友が動き出した。

「織田本家をないがしろにしやがって、信秀がおらぬ信長など、首を取るのは容易なことじゃ」

信秀は猛将として怖れられていたのだ。猛将たらんとして疲れ果てて死んだ。

守護代は、信秀の弟信次を深田城に攻めて、信次を捕えた。

信長はすぐに逆襲する。弟の信行、叔父の織田信光は、信長が織田家の棟梁とは認めていない。



だが、柴田勝家、滝川一益たちが働いて、信次を取りもどす。清洲の信友は孤立する。

戦勝の酒宴で、酒をのめない信長は奥へ引っ込む。叔父の信光は、信長の傅役であり、筆頭家老の平手政秀をののしる。

「大将が酒ものめなくてどうする。織田家は立ち行かぬぞ。平手、傅役であったそのほうの責任である」

このことで平手政秀は切腹することになる。信光はこのとき、はっきりと信長の敵になった。信長は許さなかった。いつかは信光を討つと。

四騎が、尾張の原を走る。一騎は信長である。一騎がふえた。源五郎丸十蔵であった。生駒屋敷へ向かう。

屋敷に着いた信長は、牢人や武芸者たちの話を聞く。これが楽しみの一つであった。四辺の様子が手に取るようにわかる。

一人、よく喋る若者がいた。語りがうまいし、よく知っていた。小柄でうだつの上がらない男である。この男が木下藤吉郎だった。

その間に屋敷では湯をわかす。このとき、吉乃は男児を産んでいた。奇妙と名づけられていた。のちの信忠である。

生駒八右衛門は、すでに信長の家臣と同じだった。牢人たちは細作（密偵）よりも確かなも

のを摑んでくる。

のちに信長は、この牢人たちを召抱えることになる。木下藤吉郎はもちろんである。信長は藤吉郎を認めてはいなかった。合戦の役には立たないと思っていた。それほどに合戦のことばかり考えていた。

斎藤道三から手紙が来た。会いたいという。切腹した平手の代わりに内藤勝介がいる。勝介が筆頭家老である。

「罠かもしれませぬ」

細作たちの知らせは入っている。生駒屋敷の牢人たちの情報もある。美濃に動きはない、道三に害意はなさそうだ。義父でありながら信長は道三に一度も会ったことはなかった。まむしの道三と言われている。どんな悪党か、一度は会ってみたいと思う。

「断われば道三どのに二度と会えまい。悪党面を見てみたい」

罠にはまることはない。会うとしても細作を放って道三の動きは見ている。兵を出すのがわかれば、そのときに中止すればいい。

四月二十四日、木曽川のほとり、尾張富田の聖徳寺で会うことにした。家臣は三十人ずつである。道三も細作を出している。兵は動かぬ。

源五郎丸十蔵は供の中に入っていた。いまは信長の近侍になっていた。禄も五十石もらって



いた。

十蔵は信長に仕えるのがうれしいのだ。

将来、信長がどのように生きるのかが十蔵の楽しみであった。

聖徳寺の近くの百姓家で、道三は信長が通るのを見ていた。湯帷子の肩袖脱いで、大たわけの姿だった。

聖徳寺にもどる。そして本堂で信長が入って来るのを待つ。嫡男の義竜や重臣の稲葉良通などは、今川の手を借りて、信長討つべしと言っていた。

道三にとって信長は討つ必要はなかった。とりあえず、和睦しているのだ。武将というのは周辺の大名のことを気にしていなければならない。娘を嫁にやってそれを討つとは人道に反する。大義名分がないのだ。

信長はさきほどの姿とは打って変わって、月代（さかやき）を剃り髷を結い上げ、正装で本堂に入って来た。

道三はそのことに驚きはしなかった。正装するのは道三への礼儀である。以前のうつけ者ではなかった。

道三は信長の顔と目を見た。顔は締まり、目は炯々（けいけい）としていた。力のある目だった。その目付に道三は満足した。彼の眼力はまだ衰えてはいなかった。

「なるほど、婿どのに会えてよかった」
「わたしも一度はお目にかかりたいと思うていました」
むかしはまむしだったのかもしれないが、道三は老いていた。まさに老人だった。目には気力も見えなかった。
美濃の守護代、それだけの男だった。もちろん、天下を取ろうと思うには、老いすぎていたのだ。
もう道三などこわくない。これから気にするのは子の義竜であろう。油売りから美濃を征服した。だが、もうその先はない。
道三は、信長の気力を見た。
「いずれは、義竜など、信長の城門に馬をつなぐことになろう」
と言っている。子の義竜とは人物が違っていたのだ。義竜は信長をよく知らないで、尾張を攻めようと言った。
「帰蝶は達者か」
「はい、元気でございます」
聖徳寺で二人は別れた。得したのは信長である。道三は好々爺(こうこうや)だった。老いて気力は失せていた。父信秀は道三を怖れていたが、いまは怖れるに足りなかった。



# 三章　清洲城主

## 一

尾張の守護職、斯波義統(しばよしむね)が、守護代、織田信友に背中を斬られた。
義統は守護職でありながら、おのれの兵というものを持たなかった。そして守護代の織田信友の清洲城に世話になっていたのだ。
世話になっていながら、義統は信友を家臣のようにあつかう。信友はそれにじっと耐えてきたのだ。それがこのところ、仲がおかしくなってきた。
義統が守護職風を吹かせるのが、信友にはたまらなくなっていた。何がきっかけだったのかわからない。
「義統どの、腹をめされよ」
と信友が言った。義統は逃げ出した。信友は義統の肩を後ろから斬った。彼は叫び声をあげて逃げ出す。それを追う信友。

刀を叩きつける。腰を斬り、背中を斬る。

義統は悲鳴を上げながら逃げ回る。城内である。城にいるのはみな信友の家臣である。もっとも家臣たちは手を出さない。

鬼ごっこである。血を流しながら逃げ回る。家臣たちがその血を拭いてまわる。

「おのれ、信友、守護職のわしを殺そうというのか」

とはじめのころは叫び、体に太刀を受けると、

「殺さないでくれ。わしは守護職を捨てる。信友にやろう。だから助けてくれ」

義統の少ない家臣たち、義統の子義銀、その妻縫など一族は城を抜け出した。家臣たちはそれを止めようとはしなかった。

「おのれ、わしは化けて出る。おまえを呪い殺してやる」

と言って、とうとう義統は信友に討たれた。義統は全身傷だらけだったという。一太刀では殺せなかった。斬り刻んだのだ。

義銀たち七、八人は信長の那古野城に、助けを求めて駆け込んで来た。

信長は義銀を上座に坐らせた。一応は守護職の子である。

「本家、守護代とは言え、守護職を殺すとは、主君殺しの逆臣じゃ。ここにおられる斯波義銀さまを旗印にして、清洲の織田信友、われらの手によって討つ」



信長はこれまでの本家であった信友は討てなかった。非道をしたくはなかったのだ。だが、今回は大義名分がある。親戚筋を気にしなくてよいのだ。

信長は目の前にいる義銀の妻縫に目をつけた。まだ二十歳前だろう。美しかった。吉乃とは違った美しさだ。

信長は美女が好きである。義銀は生きているから、まだ後家ではない。人妻なのだ。人妻もまたよい。うなじのあたりがゾクッとするほど美しい。

顔は丸く、首は長い、多少は細めである。同じ城の中では、帰蝶に知れる。だが、いまの信長は道三が怖ろしくなかった。帰蝶に知れればそれでもよい。そう考えると気楽なものである。

信長は、縫を部屋に呼んだ。

「わしは手込めにはしたくない。どうだ、わしの女にならぬか」

「はい、この城に逃げてまいりましたからには、その覚悟はできております。それよりも信長さまの女になれること、名誉なことにございます」

「わかっておるのう」

「義銀も、信長さまにお助けいただき、父の仇討っていただけるのですから、わたしのことなど、当然と思うておりましょう」

縫ははっきりと言った。

侍女たちに命じて、縫に湯を使わせた。信長は寝間の夜具の上に寝転んで待った。女とはそれぞれに異なるものだ。

清洲城の信友を思う。いま討ち取ることができるのだ。信友は織田本家である。父信秀はこの信友を相手にしなかった。

本来ならば信長は家来筋になる。信秀も祖父信定もである。信定はときどき清洲に出かけては臣の形をとっていた。信秀は無視していた。それに信友は怒ったのだ。だが信秀には手が出せない。

それで信長を殺そうと刺客を送った。その刺客もことごとく信長に殺された。

障子を開けてみると、庭に源五郎丸十蔵が坐っていた。いつも十蔵は信長のそばに影のように従っている。

「存外、役に立つ」

と呟いて笑った。それだけ信長は安心したときを過ごせるのだ。

縫が湯帷子姿で入って来た。匂うような女だ。湯上がりの女というのは特に色香がある。それに人妻である。

夜具のそばに坐るのを、抱き寄せて、そこに仰向けにした。アッ、と声をあげる。衿を開いた。そこには体に似合わぬ膨らみをもった乳房があった。



乳首は筒状になっていた。まだくびれがないのだ。義銀とはそれほど馴染んではいないのだ。

乳房を手で包み込み、揉み上げる。弾みが手に心地よかった。若いだけにまだ弾力がある。女の乳は膨らんでいなければならぬ。帰蝶の体は例外なのだ。やはり手に摑めるような乳房でなくてはならぬ。

揉みあげると、低く呻き声を発した。首が長い。美人である。帰蝶の首は短かった。腰紐を解いて前を拡げる。白い肌が足先まであらわになった。腰が細い。

肌を撫でまわす。縫は信長のするがままにまかせ、双眸を閉じていた。俎の上の鯉である。

信長は、湯帷子を脱がせて縫を全裸にし、うつ伏せにならせた。白い傷一つない背中である。腰である。女の体をたのしむことは、吉乃で知った。

尻が快く盛り上がっている。腰から腿にかけてはそれなりに肉をつけていた。体が細いのは骨が細いのだろう。尻はなめらかで、いくらか冷めたく手に快い。

それを摑んで揉む。

人妻である。持ち主がいる。その主はこの舘の中にいるのだ。妻が信長に弄ばれているのは知っている。どういう気持ちであろうと思う。

妻を連れて来たのは、信長に奉仕させるためか、父の仇を討ってもらうには仕方のないことと思うているのか。それとも悋気しているのか。

縫の体を仰向けにした。そして膝を折り立たせる。膝を押し開いてみる。切れ込みには毛がなくつるんとしていた。そこに手を上げて上下に撫でる。

ふむ、と小さく呻いた。

「恥ずかしゅうございます」

恥ずかしいのがいいのだ。股間を男に見られて恥ずかしくない女は女ではない。上下に撫でながら指を折る。切れ込みの中に指が沈んだ。すでになめらかになっていた。

指を切れ込みに遊ばせる。縫の白い腰が動いた。おのれの一物が更に膨らむのを覚えた。よい女というのは、どこもかしこも美しいものだ。

「お情けを」

と縫は小さな声をあげた。指を壺の中に入れる。壺の中も潤んでいた。縫は腰をゆっくりと回す。その趣(おもむき)は吉乃とは違っていた。女とはそれぞれに異なるものである。

「急ぐでない」

二指を壺に入れ、親指を肉の芽に当てる。あーっ、と声をあげて腰を回す。女の切れ込みがこれほど魅力あるものだとは、やはり吉乃によって教えられた。女の体をたのしむには、一物を没入することをできるだけ先にのばすことだ。

背中を反り返らせる。尻を浮かせて回す。どれも男の目をたのしませてくれる。壺の中で、



指で天井をなぞる。そこには数の子状のものがびっしりと詰まっていた。

女の壺とはただの肉の袋ではないのだ。数の子状のものを指でなぞる。数の子は吉乃よりも多い気がした。ざらりとしている。指を奥へのばすと、そこに子壺がある。その根元をゆさぶってやる。

襞が指に絡みついてくる。壺口がキューンと締まった。

「あーっ、お情けを」

とまた小さな声で言った。そこはぬめっていた。指を出し入れする。うおっと呻いて腰を回す。腰の動きが妖しく美しかった。いかに美しくても動かなければ美しいとは言えない。

信長は体を起こした。そして縫の股間に割り込む。尖端を壺口に押し当てる。指を入れたときにはゆっくりと入った。それなのに、いまは狭くなっている。

それを尖端で押しわける。尖端は弾力があって、形を変えることができる。形を変えながら、滑り込んだ。とたんに、アッと声をあげて縫はしがみついてきた。

信長は押しつけたままにしておく。出し入れすれば、早く果ててしまう。できるだけ放出は先にのばしたい。彼は女の尻を抱き込んだ。

女の尻が動き出す。

「あーっ」

と声をあげた。尻の動きが少しずつ早くなる。襞はしっかりと一物を握り締めようとしている。

「あーっ、気がいきます」

と声をあげ、尻を回ししゃくり上げる。そして、ヒーッと声をあげた。気をやったのだ。だが体から力は抜けなかった。信長はいきんでやった。壺の中で一物が動く。

縫はしがみついた腕に力を加えた。

「ああ、また、よくなってきます」

と口走り、ウーン、と呻いて背中をのけ反らした。

「こんなのはじめてです。二度も気をやるなんて」

信長は、ゆっくりと抜き差しする。縫はまた声をあげる。抜き差しが早くなる。それに合わせて腰をゆさぶる。

「また、また」

信長はしたたかに放出した。とたんに叫んだ。気をやったのだ。一物は壺の中で萎えていく。

縫は失神したようにぐったりとしていた。

「こんな気持ち、はじめてです」

と言う。そして、



「あ、あ、あ、抜ける」

と叫んだ。女の股間に紙を当ててやる。放出した精汁を吸いとってくれるのだ。

## 二

信長の軍は清洲城を囲んだ。

本陣には信長と斯波義銀がいた。この合戦は義銀の、父の仇討である。だから大将の座に据えたのだ。

織田本家の信友を討つには、義銀が必要だったのだ。このところ信長は縫を寵（ちょう）した。気に入ったのだ。そのことを義銀も知っている。

縫は言っていた。義銀は縫が一度気をやるとそれだけで安心して果ててしまう。もちろん二度求めることはない。縫はまぐわいとはそんなものだと思っていた。

それなのに信長に抱かれて三回気をやったのだ。放出した信長は再度挑んだのである。こんなのはじめて、と叫んで狂い悶えた。

義銀にそれだけ力がなかったというのではない。男というのは妻に対してはあまり教え込まないものである。

とことん教えると、あとで困ることになる。側女であれば、とことん楽しんでいいわけだが。縫はそれだけに、ぐんぐんと信長にのめり込んでくる。

「兄上、そろそろ、城攻めやりましょうぞ」

と弟の信行は張り切っている。信長は林通勝を呼んだ。

「清洲の城へ行き、城を明け渡すように申して参れ。城を明け渡せば命は助けてやるとな」

だが林通勝も承知しなかった。

「お舘さま、いまさら使者を立てることなどございますまい。城下町、城内にも火を放って城を落としましょうぞ」

「攻め込めば、わが手勢も失うことになる。城も汚したくない。清洲は尾張一美しい城だ。あの城、わしの居城にする」

合戦しないですむのならそのほうがよい。だが、信行と林通勝は、合戦をしたいのだ。城を奪い取りたい。その辺では信行と林は気が合っていた。

信長は、合戦をしないでも城を手に入れることができると思っている。無理に矛を交えたくなかった。

信友が討って城を出ればこれを討たなければならない。

「信友の本家面には恨みがござる。守護代の首、この信行があげまする」



「信行、戦わねばならないときには戦う。いまは戦わずに城はわが手に入る。無駄なことはせぬ。こちらから攻め込めば、敵兵も抵抗する。お互いに敵を殺してはつまらぬ」

信行は不服である。勝つ合戦をやりたいのだ。はじめから勝つ合戦などやることはないという信長の考えには不服なのだ。

信行は、信長をしのいで織田の棟梁になりたいのだ。うつけの信長にまかせておいたのでは、織田家は潰れてしまうと。それにはおのれの軍の強さを見せておかなければならない。

もう一人、織田家の棟梁になりたがっている男がいた。信秀の弟、信光である。信長には叔父になる。

信光によって信長の重臣、平手政秀が腹を切った。信長はそのことを忘れていない。いつかは、信行も信光も殺そうと思っている。それには時を待たなければならない。

信長にとっては、周りは敵ばかりである。弟、叔父が敵なのだ。だが、いまはじっと耐えるしかなかった。信行も信光もいずれは謀叛を起こす。

いま、二人を殺すには大義名分がなかった。他にも親類が多くいる。この者たちに対しても気を使わなければならない。信長討て、という口実を与えてはならない。

信長軍は清洲城を囲んだ。清洲城の城主は守護代の織田信友である。信友は守護職を殺した。信長は信友を攻める大義名分ができたのだ。

信友が討って出る気配はなかった。

信友は何度も信長に刺客を送った。ことごとく失敗した。

つまり信友には信長と合戦をする力はなかった。信友は自害し果てた。信長は無血入城することになる。

天文二十三年（一五五四）五月――。

信長は清洲城に入る。二十一歳。父信秀が死んでから二年である。尾張の下四郡を制したことになる。

港町、津島と熱田を父から受け継いで、経済的にも恵まれていた。武将が力を得るには金である。他の領主たちはしきりに金鉱を探し掘っていた。

信長は港で貿易して利を得る。

尾張の下四郡を手にしても、まだ上四郡がある。また、国境には今川の勢力があり、まだまだ多難であった。

城の中は家人たちが掃除をしていた。

信長はそれを見て回る。彼は以前からこの城に入りたかった。父信秀がそうであったように。以前から祖父信定はこの城を攻めよ、としきりに言っていた。だが、城には守護職と守護代がいる。力はないが、これを討っては逆賊になる。敵を多くすることになる。それで討てなか



ったのだ。

守護職、斯波義統の弟義銀は、兄の敵を討ってもらって数人の供とどこかに去っていった。

妻の縫は信長のもとに残された。縫は信長に献上したものである。

その間、生駒吉乃は次男の信雄（のぶかつ）を産んでいた。信長は吉乃を寵しながら縫も寵していた。美女とは何人いてもいいのだ。

縫は小さくて丸い顔の首の長い美女だった。体つきは細いが、女である部分は充分に発育していた。

女には趣（おもむき）というのがある。縫は趣のよい女だった。女らしくてたおやかで、それでいて淫らだった。

信長は縫を膝の上に抱き上げ、口を吸いながら、乳房をなぶっていた。くぐもった声をあげ尻を動かす。すぐ反応する体でもある。全く反応もしない帰蝶は女ではなかった。

いまは帰蝶には全く手をつけない。

面白くない彼女に手をつけることはなかった。まむしの道三もいまはこわくない。

乳房を揉みあげ、乳首を摘む。

「あーっ、お舘さま」

と体をくねらせる。そのさまが信長にはいかにも快い。女とはかくあらねばならぬ、と思う

ほどである。

裾をめくり上げる。白い足があらわになる。そして尻を撫でる。それから手をはざまに入れる。

股を開かれると羞恥する。羞恥もまたまぐわいの味つけになる。女はさまざまな味つけを持っている。

おのれの体を男にいかに美味に味わってもらうかが、女の務めでもある。

もっとも味つけは女が先天的にもっているものである。

内腿を撫でる。柔らかい感触だ。はざまを撫でる。指を折る。つるんと滑り込む。そこは充分に潤んでいた。

潤みの中に指を遊ばせる。

「あーっ、お舘さま、気持ちようございます」

と声をあげる。

腿を開いたり閉じたりしてせつながる。

信長はあぐらをかいていた。縫は手をのばして一物を手にし、指を這わせている。そして尖端に唇を押し当ててくる。舌を這わせ、尖端のなめらかで弾力のある部分に泳がせる。

鈴口から裏の縫目を舌をとがらせて舐めまわす。そして尖端を咥え、音をたてて吸う。



「ふぐりには手をのばすな、そこは男の急所である」

縫はうなずく。今までふぐりを自由にさせたのは吉乃だけだった。縫に敵意があるとは思えぬが、まだ得体の知れないところがある。

帰蝶は手を触れようとはしなかったし、信長も無理に一物を口に咥えさせようとは思わなかった。

信長はあぐらをかいたままである。だから根元まで咥えることはできない。それでも、できるだけ深く咥えようと、しきりに顔を押しつけてくる。

二十一歳で清洲城をおのれのものにした。これは力ではなく運である。合戦も運である。どこまでおのれに運があるのかわからない。

尾張全土をおのれの手にして、今川義元や武田信玄と対等にならなければならない。対等になれば、攻められて怯えることもない。

おのれの運命というのはわからぬものだ。どこで挫折するかわからない。父信秀のようにおのれを装うことはなかった。装うては疲れる。信秀は疲れ果てて死んでいった。父のようにはなりたくなかった。

「跨がれ」

と言った。縫は顔を上げて、信長の膝の上に跨がってくる。彼女は一物を手で支え、跨がっ

てくると尖端を肉の芽に押しつけて擦りつける。

芽には一物の尖端の感触が一番いいのだろう。吉乃もそうした。なめらかで弾力がある。最も深く触れるのだろう。それから壺口に当て腰に力を加えてくる。

一物は一気に滑り込んできた。あーっ、と声をあげてしがみついてくる。信長は両手で縫の尻を支えあげた。

手で尻を上下させる。縫はしきりに腰をくねらせる。一物は柔らかい襞に包み込まれて心地よげだ。一物も満足している。男はおのれの一物を満足させる力がなければならないのだ。

「あーっ、せつのうございます」

と喘ぐような声をあげる。女は壺口で快感を覚える。だから尻を動かすのだ。壺口が一物に擦りつけられる。壺口がキューンと締めつけられる。

両手で尻を抱き上げている。何気なく、つい指先が菊の花に触れた。

「そこは、いやでございます」

と尻を振る。信長がびっくりしたくらいである。いやだということは不快なのか、それともいままで触れられたことはないのか。

吉乃の菊の花に触れたことがある。花の中に指を埋めると、吉乃は悶えた。いつになくである。



「ここはいやなのか」

「いやでございます。指が汚れます」

「汚れるものは洗えばよい」

「お舘さまは、縫をお嫌いになられます」

「そんなことはあるまい」

指に力を加える。いやーっ、と叫んで身悶える。すると壺口はよけいに擦られる。

「あーっ、いやーっ、そこだけは」

力を加えると指が菊の花の中に埋もれた。縫は身を揉む。ほんとにいやなわけではないようだ。指を動かす。もちろん菊の花はよく締まる。

## 三

清洲城の大広間。

高座に信長が坐る。

その下に母るい、弟信行、妹のお市。庶兄の信広、弟の信時、秀孝などが居並ぶ。

一方に叔父の信光、家臣の林通勝、佐久間盛重、柴田権六、滝川一益、河尻秀隆などがいる。

信長の背後には小姓の池田恒興（つねおき）、そして近侍の源五郎丸十蔵がいる。

大広間では、信長以外の者は酒をのんでいた。酒宴である。とにかく清洲城は手に入ったのだ。

家臣たちは踊る。笛や太鼓が鳴らされる。

やがて、信長も座を立って踊りの中に入る。

叔父の信光は不興気（ふきょうげ）である。清洲開城には信光の力もあった。

信光は織田家の実権を握りたかったのだ。いま那古野を与えられている。たしかに信光に同意する者もあった。

一族の中にも、信長を狙う者がいた。弟の信行は、織田家の棟梁は自分だと思い込んでいる。母るいに寵愛され、織田家を継ぐのはそのほうじゃ、と言われて育った。

信長も油断はならなかった。信光と信行につく部将もいる。一座にいる者たちは味方ばかりではない。いつ合戦を仕掛けてくるか、暗殺の手をのばしてくるか。

信長は、つつましやかに坐っている妹お市を見ていた。輝くような美しさである。戦国時代、第一の美女はお市といわれていた。

だが、お市は妹ではなかった。従妹であった。

父信秀の弟の子である。この日、はじめて信長の前に現われた。



「止めよ、止めるのじゃ」

と叫んで立ち上がったのは叔父信光だった。

「このいくさ、勝に導いたのは誰じゃ、このわしじゃ」

たしかに、信光の力があって清洲城は落ちた。

「このわしが働かねば、この城はいまだ守護代のものであったはず」

信光は、信長が手にした下四郡のうちの二郡を要求している。もちろん信長にその気はなかった。信光は信長の部将の一人にすぎないのだ。

信光が席を立っていく。

信長は別室に前田利家と丹羽（にわ）長秀を呼ぶ。

「そなたたちに仕事を与える。信光を今宵のうちに斬れ。合戦で信光を討つわけにはいかん。わしが合戦すれば、今川が黙っていない。いまは合戦などできぬ。城内において信光を討つ」

「心得ました」

「この者を貸し与える」

後に坐った源五郎丸に目をやった。

信光は一人ではない。十人ほどの家来をつれて来ている。城の中には信光の兵たちもいる。

「そのうち二人は信光だけを狙え。あとはこの者にまかせよ」

信長には、平手政秀を信光のために切腹させられた恨みもある。織田家にとって邪魔な男でもある。

前田利家と丹羽長秀は廊下を行く。源五郎丸十蔵はそのあとから家臣のようについて行く。

信光は与えられた部屋にいた。十人の家来が守っている。

障子の外から声をかける。障子が開いて家来が顔を出す。

「信光さまにお目にかかりたい。内密の話がござる」

信長の部将でも寝返って信光につこうとする者がいてもおかしくない。

信光は、信長を裏切る部将二人かもしれんと思ったようだ。おのれが討たれるとは思っていない。

障子が再び開かれ、

「ご両人入られよ」

と言う。

前田利家と丹羽長秀が部屋の中に入れられる。十蔵が入ろうとすると、

「小者はそこで待て」

と押しやられた。目の前で障子が閉められた。源五郎丸十蔵は刀を抜いた。そして一呼吸、二呼吸待った。



障子に手をかけて開く。家臣たちの目が十蔵を見る。一人が立ったままだった。

その一人の胴を薙いだ。以下九人は坐っている。二人目は片膝ついて、上段から左肩を雁金に斬り下げる。

立って三人目の首を薙いだ。とっさのことであとの者は立てない。

「な、なにものだ」

信光が叫んだ。そのとき利家と長秀が信光にとびかかる。脇指を抜いて、そのまま信光を突き刺した。

立ち上がろうとした信光は、よろめいて倒れた。

「おのれ、信長」

と叫んだ。

三人目の首が畳の上に転がる。血を噴き上げる。四、五人が血を浴びた。八双から四人目を袈裟掛けに斬る。

返す刀で剣尖を車にして四人目の胸のあたりを薙ぐ。刃は肋骨に入った。肋骨に沿うて心臓を裂く。そこからも血が噴き出す。

信光に走り寄ろうとする五人目の足を薙いだ。左の足が袴から滑り出る。振り向きざまに六人目の両眼を薙いだ。

「ワッ」

と叫んで両手で顔をおおう。右に流れた刀を引きもどし、七人目の頭に叩きつけた。刃は左こめかみのあたりに入り、右顎の下に通った。

両眼をつけた頭半分がずり落ちる。ずり落ちた頭が畳に転がった。

残った三人が立ち上がる。刀を抜こうとするが抜けない。十蔵は刀を垂直に振り上げた。右腕のつけ根が斬り放された。そして袖から抜けて切断されたほうが畳を擦った。

抜きかけた刀はもとの鞘にもどった。

九人目の刀を抜きかけた侍の手首を斬り落とす。刀柄を握った右手首が刀と共に抜け落ちた。

十人目がようやく刀を抜いた。

十蔵が九人を斬るのは一瞬だった。おそらく一呼吸のうちだろう。左右に動いた。その度に斬っていた。

「どうする。信光どのはすでに亡くなっている。ただ一人逃げるわけにはいかないな」

利家と長秀は、十蔵の斬り方を見ていた。このころは、剣術なんてものははやらなかった。合戦の役には立たないからだ。刀で鎧は斬れぬ。刀はたちまち折れる。合戦の役に立たない者は召し抱えない。

だから、将たちはたかが武芸者。剣の芸を見せるもの、という考えしかなかった。



十人目が刀を構えた。そいつが、ギャーッ、とわめきながら、刀を振りかぶる。十蔵は刀を薙いだ。刀と共に両腕がとんだ。

生きている者たちは畳の上を這いまわり、あるいは坐り込んだままだった。

放っておけばいずれは死んでいく。十蔵は刀を拭っていた。

後日、守山城主の織田信次と林通勝を城に呼んだ。信次は先日殺した信光の弟になる。つまり父信秀の弟でもある。信長には叔父になるわけだ。

信次は信光のような野心は持っていなかった。それでも信光の死を疑っている。信光の野心を信次は知らなかった。

信次は、兄信光は前田利家と丹羽長秀に殺されたと思い込んでいる。

「信長、兄の那古野はどうする」

信光が死んで、那古野は空家になっている。

「林、那古野城は、そなたにまかせよう」

「有難きことにござります」

「兄は、どうして死んだのじゃ」

「この清洲を手に入れたとき、恩賞不足だったのであろうのう」

身内が多いということは疲れるものだ。あちこちに気を使わなければならない。

信光はいなくなった。だが弟信行がいる。信行には母るいがついている。信行は織田家の棟梁を狙っている。

信行だけならまだよい。母るいがいることが気に入らなかった。信長を除けようと思っている。信行だけが可愛いのだ。信長に比べ、信行は貴公子のような顔をしていた。

それが母るいは好きなのだ。どうしても信行に織田家を継いでもらいたいのだ。その心底を信長は知っていた。

「いずれは、信行を討たねばならぬ」

父信秀は、信長が幼いころから母るいを放した。るいは信行べったりになった。るいは信長を捨てていたのだ。うつけと言われた信長をむしろ敬遠していた。

信行は、叔父の信次と手を組めば、信長と合戦することができる。信長の重臣の中にも織田家の当主としては、信長よりも信行のほうがふさわしいと思っている者もいる。

いつ裏切るかわからないのだ。父信秀の苦しみがわかるような気がする。いつも猛々しく神経をキリキリ立てていないと、いつ裏切者が出て来るかもしれない。

信光を殺した。弟の信次がいつ反旗をひるがえすかわからない。信行が信次を誘えば、すぐに同意するだろう。二人が組んで戦いを挑み、重臣の中に裏切者が出れば、信長だって危ない。清洲城主として安心してはおられないのだ。これでは神経がキリキリ鋭くなるのも当たり前だろう。



外敵では、道三の息子義竜が尾張をうかがっている。義竜は尾張が欲しい。もっとも道三が生きている間はそれもなるまいが。

三河の今川義元も尾張が欲しいはずだ。義元は京に行って天下に覇をとなえたいのだ。義元が京に行くには尾張を通ることになる。義元は信長の十倍の兵力を持っている。

押し潰すのは簡単だ。簡単だから放っている。攻めて潰すまでのことはない。信長には抵抗などできるわけはない。すぐに白旗かかげて足下にひれ伏すに違いない。

信長は、弓を引く、鉄砲を射つ。木刀を振る。すでに筋はできていた。

「十蔵、わしの相手になれ」

源五郎丸十蔵が木刀を手にして前に出る。

「どうぞ、打ち込みなされ」

と木刀を正眼に構える。

前田利家と丹羽長秀が言っていた。十蔵が十人の信光の家臣を斬るのに一呼吸だったと。剣術があのように役に立つものだとはじめて知った、と言っていた。

十蔵はおのれの剣術を信長に売り込んできた男である。たしかにそれだけのことはあった。人を斬るのにためらいがなかった。

「お舘さまのためだからでございます」
と十蔵は言っていた。合戦の役には立たなくても身辺においておけば便利である。
信長が打ち込んでいく。それをことごとく受ける。払っては信長の木刀が手からとんでしまう。ただ受けるだけだ。
どのように打ち込んでも受けられるだけ。
「止めよ、このあたりでよい」
と木刀を引く。打ち込むだけで疲れてしまうわけだ。木刀を置いて縁に坐る。そして汗を拭う。
十蔵は片膝ついて、前に坐っている。汗ひとつかいていなかった。
「十蔵、馬を引け」
といって坐を立ち、朱鞘の刀を腰に差す。十蔵は二頭を引いて来た。
「近侍の方たちは」
「今日は、おまえ一人でよい」
「はっ」
「生駒屋敷へ行く」
信長は馬に乗って城門を出る。そして馬を走らせる。十蔵はそのあとを追う。信行の手の者



が襲いかかって来ぬかと思う。
生駒屋敷へ行けば、吉乃を抱くことになる。だが目的は吉乃ではなかった。屋敷の牢人たちを末盛城の城下町にやっている。細作（密偵）とは別にだ。中には信行の家臣になっている者もいる。
その結果を聞くためである。信行は殺さねばならない。だが、こちらから先に手を出すわけにはいかないのだ。理由もなく信行を討っては評判が悪くなる。
近隣の者に悪しざまに言われたくはなかった。そこが小領主のつらいところである。
いま、信長は、津島港と熱田港から上がる収益を貯えていた。合戦には金がいる。尾張には他国のように金鉱はなかった。港の収益だけである。
金があれば家臣も召抱えられる。銃器も買い求められるのだ。
「十蔵、なぜわしを選んだ」
「お舘さまは天下をお取りになります」
「何をたわけたことを」
「いいえ、わたしの目に狂いはありません」
「おまえの目はひが目じゃ。いまだ尾張半分しかわしの手にはない。尾張一国を手にするのがわしの望みじゃ」

「天下をお取りになります」
「そういう望みを持てということか」
と信長は笑った。
信長には勝てぬ相手がぞろぞろいるのだ。
「お舘さまはお若い。今川も武田も年をとっております」
「なるほど、そういうこともあるか」
生駒屋敷に着いた。屋敷の中は忙しくなる。庭にそのまま坐って牢人たちの話を聞く。まだ信行は立たぬようだ。誰か部将が末盛城に入った様子もない。



# 四章　側室直子

## 一

弘治三年（一五五七）――。
信長は、直子を抱いていた。直子は臣の原田直政の妹である。直子の亭主は合戦で死んだ。後家である。
このとき直子は、二十四歳、信長と同じ齢（よわい）である。後家の中から見目のよい女を選んで手をつける。手をつけられた女は倖せである。側室になれば、一族は暮らしに困ることはない。
信長はこの年に、上総介（かずさのすけ）と名乗った。はじめは上総守（かみ）と名乗った。朝廷から上総守の名乗りはないと言われた。
世に三介というのがある。上野介、常陸介、上総介である。この三介には絶対に守はつかないのだ。信長は上総介信長になった。
直子は美人でもない。みかけはただの女である。だが、女とは何か特徴を持っているものだ。

直子は信長の一物を口に咥えていた。一物を咥えさせると、女の体をいじり回さなくても、おのれから濡れてくるものであることを知ったのだ。

もちろん、経験の浅い女は一物を口にしても潤むことはない。女としてのよろこびを知っている女に限る。女が女になると、口の中も壺の中と同じように快感を覚えるようだ。

女は壺の中よりも入口で快感を覚える。だから一物を咥えて唇で感じるのかどうかは知らん。

直子は一物と遊んでいるように見える。一物を根元まで咥えてじっとしているのか、と思うと、一物を口から出して尖端を舐めまわす。そして、咥えては頭を上下に動かす。一物は唇の間を出入りする。一物を出入りさせるのは、唇で感じたいのかもしれない。

信長は直子の尻を引き寄せた。それほど美しい尻ではない。そのうちに直子は信長の子信正を産むことになる。だが多産系の尻ではなかった。

戦死した前夫との間には子はなかった。尻に手をのばし、そして指をのばす。切れ込みには、もうたっぷりと露が出ていた。

信長は労せずに、女の体に露を出させることができる。信長が後家を寵したのは、案外このあたりが原因かもしれない。つまり、女の体をいじり回してやらなくてもすむからである。

濡れているかどうかを確かめただけで、そこに指を使うつもりはなかった。直子のはざまには剛毛があった。彼女は線香でその毛を焼いている。だから毛がないように思える。



信長に寵されるには、それくらいの心掛けが必要なのだ。信長は女の陰毛というのが好きではなかった。陰毛に限らず、毛深い女は嫌いである。

それを知っていて直子はよく手入れをする。

「上になってよろしゅうございますか」

と言う。上となるにはそれを男に断わらなければならない。これも常識である。一物を手にして直子は信長の腰にまたがってくる。

直子は没する前に、尖端を肉の芽に押しつける。尖端のなめらかさが、芽には快いのだろう。

「うーっ」

と呻いて尻を振る。手をふるわせる。すると芽が刺激されるのだ。

「お舘さま」

と外で声がした。そこにはいつも剣士の源五郎丸十蔵がいる。信長を警護しているのだ。眠っていることもある。だが、剣士だけに人の気配には目をさます。

「何だ、申せ」

ようやく直子が重なってきた。一物を呑み込み、尻をくねらせる。

「細作（さいさく）の作兵衛が来ております」

「聞こう」

細作とは密偵のことである。作兵衛は、弟信行の末盛城に細作として入っていた。信行の身辺の侍の中にも信長の密偵が入っている。その侍が作兵衛に伝えてきた。

「弟君信行さまは、熱田の港をご所望とか。お舘さまには津島の港をお持ちです。熱田は自分にゆずっていただいてもよろしかろうと。ご母堂さまに、そう申されたよしにございます」

「それだけか」

「信行さまは林さまと、よく談合されているとのことでございます」

林通勝は、信長の重臣でいまは那古野城を預かっている。

信長は、津島、熱田の両港を持っているために軍費もまかなえる。豊かでもあった。信行はその一つ熱田の港をくれと言っている。

信行は母るいのそばで育っている。甘やかされて、織田家は自分が継ぐものと思い込んでいる。

信長が港を一人占めにしている。だから、信行はいつも貧乏だと言いたいのだ。その上に彼は、信長の部将林通勝と通じている。信行は自分一人では信長を討てない。それで部将たちを味方に引き入れようとしている。

いずれは謀叛しようというのだろう。

「わかった。続けて探ってくれ」



細作は去ったようだ。源五郎丸は闇の中にひっそりと坐っている。いつ眠るのかわからない。あるいは外に坐っていて眠っているのかもしれない。

いつ暗殺団が襲って来るかもしれないのだ。すでに三度襲われている。城内と言っても、技のある者たちには、城塀、石垣などは越えられるのだ。

信長は直子の尻を抱いていた。その尻がよく動く。下から突き上げてやる。その度に、アッ、アッ、と声をあげる。

一物は熱い襞に包み込まれている。その襞が動いていた。ミミズの塊を見たことがある。丸く固まっていて、それがぬるりぬるりと動いている。その中に一物をさし込んだような感触だった。もちろん、ミミズのように冷めたくはない。

襞が一物をなぞるのだ。他の女に比べると襞が長そうだった。俗にミミズ千匹という。女がよがらないとこのミミズは動かない。よがると、ぬるりぬるりと動くのだ。

「面白いものよ」

と呟く。女の壺は女によって異なるのだ。その辺が面白い。女の壺の変化がわかるようにもなっていた。若いころは、ただ入れて放出するだけだった。

いまは女の体をたのしむことができる。女とはよいものだ。男の気持ちをなごませることができる。

「きもちよいか」
「はい、でもこれでは」
「気がいかぬか。これでよい。気をやるだけが能ではない。こうしていることがよいのじゃ」
信長は、直子の上半身をもたげさせる。そこに二つの乳房があった。充分に豊かな乳房である。乳房を両手で摑む。それを揉みあげる。紅い乳首があった。
ぐみのようである。
乳首を摘んでひねる。
直子は肌は白くないが、なめらかで光沢があった。女の肌もさまざまだ。白いばかりがいい女ではない。
肌が白くないだけに壺の中が熱いような気がする。肌の白い女は壺の中が冷めたいのかなと思う。
信長は、あぐらをかいて坐り、その膝の上に直子をまたがせていた。女はしきりに尻をくねらせている。その尻を両手で支える。
柔らかくて熱い襞に一物が包み込まれている。それが快いのだ。信長は尻を抱いて立ち上がった。
「あーっ」



と直子は声をあげた。蟬がかりという。蟬は直子である。直子にしがみつかせておいて部屋の中を歩く。信長は体をゆする。直子の体が上下する。
「あーっ、お舘さま」
と声をあげる。まぐわいとは寝てするものばかりではない。さまざまにやってみたいのだ。一物と壺の重なり合った部分がぬめっていた。
いずれ、弟信行は殺さねばならぬ、と呟く。信長は、若いころ、うつけ者と呼ばれた。そのことは四辺の国々に知られていた。
うつけ者では織田家は守っていけない。だから、わしが織田家の棟梁になるのだと、信行は思っている。母るいの後楯もある。信長の部将たちを一人一人と切り崩していけば信長を倒せる。
「信行はおのれを知らぬ」
熱田の港をよこせなどとは、思い上がりもはなはだしい。津島と熱田の港は信長が父信秀から受け継いだものである。この二つの港で織田家は成り立っているのだ。
それを二つに分けては織田家は潰れる。その前に信行は信長を攻めるだろう。兄弟力を合わせなければならないのに、織田家は勢力争いをしている。
「うつけ者が、おのれにどれほどの力があると思うているのじゃ」

弟は弟でいればいいのだ。それなのに信長を押しのけて大将になろうと思っている。信行の後で糸を引いているのは、母るいかもしれぬ、と思う。母は信行に織田家を継がせたいのだ。

女は感情の生きものである。四辺の状況を見ずに、ただ信行に織田家を継がせたい。もしそうなれば織田家は潰れるということは考えていない。

信長は母が憎い。母の情けなどということは知らぬ。母の乳をのんだこともない。乳母の乳を吸った。だが、信長はその乳母の乳首を三度まで食い千切っている。

信行は生まれたときから、母の乳を吸って育ってきた。父信秀がそうさせた。

信秀は信長に激しい男になってもらいたかったのだ。そのために甘やかさなかった。

信秀にとって信行などどうでもよかったのだ。

信長に従っていればそれでいい。なのに信行は欲を出した。

「おとなしくしておればよいものを」

少なくとも血を分けた兄弟である。信長とて弟を討ちたくはなかった。

信長は直子の背中を布団の上に押しつけた。とたんに、わァ、と声を出し腰を振りながら悶える。

「気がいきます」



と叫ぶ。

信長ははざまを押しつけたまま、動かなかった。直子はしきりに腰を振り、しゃくり上げる。

## 二

斎藤道三は、美濃の稲葉山城を息子の義竜にゆずった。もちろん斎藤家の棟梁の座もである。その義竜がしきりに尾張を狙っている。そのことは細作の報告で信長も知っていた。道三はそれを止めている。

信長の力を知っているのは道三だけである。尾張を攻めるのは止めよ、必ず負けると。だが義竜は承知しない。

美濃は、北に越後の長尾景虎（上杉謙信）、東に甲斐の武田信玄。南に駿河の今川義元、この三武将に比べれば小さい。信長にしても同じだ。

義竜はこの三人に並びたかった。それには尾張を攻め取る必要がある。尾張と美濃を合わせれば、謙信、信玄、義元に肩を並べられると思っている。

だが、道三は信長に勝てぬと言う。そんなはずはない。信長がうつけ者と言われていたことは知っている。うつけ者に負けるわけはない。

斎藤義竜は、道三をおのれの父親とは思っていない。道三は美濃の守護、土岐頼芸を攻め亡ぼした。そのとき頼芸の側室を奪った。その側室が産んだのが義竜である。側室が道三の女になったときに孕んでいたという。

だから義竜は頼芸の子だと思っている。だから道三は父の仇だと考えている。もちろん道三は自分の子だと思わなければ家督はゆずっていない。

そう言いふくめた者がいるのだ。

子であるかないか、それを証明する方法はない。男は妻が産んだ子は自分の子と思って育てる。他人の子かもしれないのをである。

三日前に、るいは信長の清洲城に行って来た。熱田の港を信行にもらってやろうと思ったのだ。

「兄上は何もかも一人占めになさる。津島、熱田の二つの港がある。熱田くらいわしに呉れてもよさそうなもの」

るいは、そのとおりだと思った。信長が一人占めすることはない。半分は信行のものにしてもよい。

はじめは機嫌のよかった信長が、その話をすると、怖ろしい顔になった。

「信行を甘やかすために熱田の港を欲しいのでござるか。母上は織田家がどのような立場にあ



るかご存知か。今川義元が京に向かうときには、織田は押し潰されてしまうのですぞ。今川だけではない。武田信玄だって京に上る気だ。この尾張はその通り道にある。母上、織田家を何と心得られる」

るいは言葉が出なかった。それに斎藤義竜が尾張に挑もうとしている。もちろん、るいはそのようなことは知らぬ。ただ信行のためにと思っているだけだ。

こうなれば信行に挑ませるしかない。いまのままでは信行は満足していない。熱田を手に入れれば信行も豊かになるのだ。

信長を討つしかないのだ。もともとるいは信行に家督を継いで欲しかったのだ。信行に味方する部将もいた。

るいは、林通勝の一物を口にしていた。ただ通勝に体を与えるだけのつもりだった。信行の味方につけるために。

だが、結果は違った。通勝に狂うほどに悶えさせられてしまったのだ。通勝は信長の部将であり那古野城をまかされている。つまり城主でもあるのだ。通勝を味方にすれば、信長にも負けぬ。

るいは、母親として信行のことだけしか考えられないのだ。いわゆる母親である。尾張の四辺の状況はわからない。だが信行の言うことはもっともなのだ。信行の言うことが正しいと思

う。

末盛城にもどったるいは、信行を呼んで、

「信長を討つのも仕方がない」

と言った。

信長を討つには林通勝の力が必要と考えたのだ。通勝はむかしからおのれに気があることは知っていた。体を投げだせばなびくと。

だが、いまは通勝の一物を口にしている。母として信行のために、としたことが、いまは女になっているのだ。信行のことは忘れていた。

## 三

野原で、侍三人が遊び矢をしていた。矢がどこまで飛ぶかを競う遊びである。そこに向こうに馬が走るのを見た。

誰が乗っているのかはわからない。三人の一人が、

「あの馬を射てみよ」

と言った。遊びである。一人が射たが外れた。二人目も外れた。三人目が射た。馬上にいたものが落馬した。人に当てるとは思っていなかったのだ。

矢は胸に突き刺っていた。近寄ってみるとそれは信長の弟喜六郎だった。三人はびっくり仰天、青くなった。

「これは、ただではすまぬぞ」

この三人は、信長の叔父信次の家臣だった。信次の兄信光は、先日、清洲城の中で信長に暗殺されている。信光が織田家の棟梁の座を狙ったからだ。

話を聞いた信次もまたびっくり仰天、守山城主だった信次は、信長が怖ろしくて城を捨てて逃げてしまった。

清洲城――。

大広間では会議が行われていた。守山城主を誰にするかである。この席には信行も来ていた。

「信行、何か言いたいことがあるか」

と信長が聞いた。

「わが家臣、柴田勝家を推挙します」

柴田勝家は、信行の重臣だった。信長は笑った。打倒信長の計画を着々と進めていることを知っていた。

信長は、弟の信時に守山城の城代を命じた。信行は不満である。いよいよ、信長を打倒する

しかない。

その夜――。

信長は寝所で直子を抱いていた。

その寝所の庭で源五郎丸十蔵が眠っていた。その十蔵が、ハッと、目をさまして立ち上がった。そして刀を抜いた。

「部屋からお出になりませぬように」

と声をかけた。その声に闇に潜んでいた者たちが姿を見せた。六人である。忍装束である。

曲者たちは、まだ刀を抜いていなかった。

十蔵は走った。先頭の曲者が、あわてて刀を抜こうとする。その手首を斬って落とした。

「わあー」

と声をあげる。十蔵は右へ動いた。そこにいる曲者を雁金に斬り下げた。その者は直立不動になり、体を震わせた。

まず、開いたのは黒い装束の肩である。

肌がむき出しになった。左腕が重い、そのために左側に引っぱられ傷口が拡がる。暗い中で肉の白さが見えた。血が流れ出したのは一呼吸あってからだ。

三人目が寝所に向かって走ろうとする。十蔵は腰のあたりを裂いた。走る者の背中を斬って



も浅手で効果はない。腰のあたりを斬る。背骨を切断する。

曲者はくたくたと崩れた。

四人目は刀を上段に振りかぶった。十蔵は刀を薙いだ。刀柄を握った両腕が斬り放されて足もとに落ちた。

その曲者は、腕を斬り落とされたとは知らず、残った腕を振りもどす。曲者は十蔵を斬ったつもりだったのだろう。

ニヤリと笑った。十蔵はそれにはかまわずに五人目に向かっていた。四人目は、おやっ、という顔をした。斬ったつもりが相手が倒れない。おのれの腕がないのに気付いて、ギャッと声をあげるとよろめいた。

信長は寝所の灯りを消して、障子を開けた。

もちろん、手には刀を持っていた。信長だって、子供のときから木刀は振っている。一対一ならば斬り合える。

ちょうど四人目が斬られるところだった。五人目は刀を正眼に構えていた。

「ギャーッ」

と十蔵は絶叫した。五人目は体をぶるっと震わせ動かなくなった。十蔵の刀が頭上で舞った。何か皿のようなものが飛んだのを信長は見た。飛んだ皿が松の木にペタリと貼りついた。そ

のときになって、家臣たちが起き出し駆けつけて来る。
六人目が逃げ出した。十蔵はそれを追った。
「灯りを持て」
と信長が言う。二十人ほどの家臣が集まっていた。
灯りが運ばれて来る。その灯りが、五人の曲者を映し出した。まだ生きている者もいる。
はじめに右腕を切断された曲者である。
その曲者はあわてて左手で脇差を抜くと首筋を切った。一呼吸あって、血がブーッと噴き出した。
立っていた曲者がよろめいた。とたんに頭のてっぺんから白いものが流れ出した。白いものは赤い血に染まっていた。
「どこのものだ」
信長が言った。
「顔に見覚えはないか」
そこに、十蔵が六人目の曲者を連れて来た。
その男は顔を真っ赤にしていた。額を切られ、そこから流れ出す血が顔を染めていた。血が目に入れば何も見えなくなる。



曲者を信長の前に坐らせた。
「どこの者か聞いてみよ、頼んだ者の名をな」
十蔵は曲者のそばに立った。
「名を言え、どこのものだ。喋れば命は助け、黄金を与えられ追放になる」
曲者は黙っている。
「喋らずに黙って死んでいけばすむと思っているのか。必ず調べ出して、おまえの一族はみな殺されることになる。それを承知だな」
「お舘さま」
と家臣の一人が言った。
「死んだ者の中に顔を見知った者がおりまする」
「どこの者だ」
「平賀の里の者でございます」
「平賀か」
と信長が言った。
平賀とは、山中の村で、その村の者は、細作（密偵）に雇われる。その細作たちの稼ぎで村の者たちは生活している。

「細作は人は殺さぬと聞いている。そうであろう」
細作は金で雇われる。情報をもたらすが、人は殺さない。明日は敵将に雇われることになるかもしれないからだ。
「細作がわしの命を狙ったか」
「報酬次第では」
「わかった。平賀の者たちを女子供残らず殺せ。村を潰してしまえ」
信長が言った。
「拙者、平賀の者ではござらぬ」
「誰が頼んだかわかっている。首を刎ねよ」
言葉が終わらぬうちに、十蔵は刀を一閃させた。
首が血を噴きながら転がった。胴からは血が噴き上がり、流れが弱くなると、まるで煮えているように、両肩の間に、血が湧いていた。
「十蔵でかした。何か望みのものがあるか」
「刃欠けましてございます。刀一口(ひとふり)いただきとうございます」
「わかった。信盛、明日、兵をひきいて、平賀を焼き討ちにせよ。これで信行も肝(きも)を冷やすであろう」



そう言って信長は寝所に入った。家臣たちは死体を片づける。十蔵もそれを手伝う。もどって来て、縁の下に入って寝転ぶ。ここが十蔵のすみかでもあった。
信盛とは佐久間信盛のことである。はじめは弟信時の臣であった。信長の重臣の一人である。
灯りをつけ、信長は直子を抱き寄せた。
「どうした。震えておるではないか」
「怖ろしゅうございます」
見てはいない。だが、気配でわかるのだ。
「将というものは、いつ死ぬかわからぬものだ。百姓も商人も合戦に巻き込まれて死ぬこともある。いずれは誰もが死ぬ。怖れていては何もできぬ」
信長は直子の乳房をなぶる。股間に手をやるとそこも冷えていた。体も心も冷えているのだ。
武将というのは、激しく残酷でなければならない。それを教えてくれたのは父信秀だった。
優しく思いやりのある武将というのはあり得ない。そのような将はつぶれていく。
直子の体はもとにもどらないようだ。乳房を揉みしだく。
平賀の庄を焼き払う。女子供も殺せと命じた。恨みを残してはならないのだ。優しくしては、裏切り者が出る。武将が生きぬくには残酷にならなければならないのだ。生きるためである。
直子をうつ伏せにして尻をむき出しにさせ、それを撫でまわす。

二つの尻こぶらを摑む。そして押し開く。そこに小さな菊の花があった。そこに指を突き刺した。

「アッ、そこは、そこは」

と尻を振る。その指に唾液をためる。指を回し、菊の花を拡げる。そこに信長は一物をさし込んだ。きしんだ。だが少しずつ入っていく。そして根元までつくした。

締まる筋が強い。だが中は空洞だった。出し入れをする。直子は呻いた。菊の花に一物を迎えるのははじめてだろう。

信長は妙にむごくなっていた。十蔵がいなければ、六人の曲者に討たれていたかもしれない。そのことが妙に気分を高ぶらせていた。直子の体が冷えているのも気に入らなかった。

直子は尻を弾ませはじめた。感じているのかどうかはわからない。ゆっくりと出し入れさせる。からみついてくる襞もない。

一物を引き抜いた。直子は、アッと声をあげ、体をひるがえすようにして、一物を手にし、呑み込んだ。信長に臭いを嗅がしてはならないのだ。

一物を舐めまわす。尖端と胴の間に舌を這わせる。怯えていては信長への務めは果たせないのだ。けんめいにしゃぶる。

菊の座はかつて指でされたことはあるが、一物を受け入れたのははじめて。そこに奇妙な感



覚が残った。それが快感であるのかどうかはわからない。

一物を口にしていて、ようやく体が熱くなってきた。はざまも潤みはじめているようだ。直子は信長の腰にまたがった。そして、一物を手にして尖端を肉の芽に当てた。尖端をこすりつけて、アーッ、と声をあげた。

# 五章　美女お市

## 一

信長にとって、池田恒興（つねおき）、前田利家、丹羽長秀の三人は最も信頼できる部将だった。恒興とは乳兄弟である。恒興の母は信長の乳母だった。この乳母だけは乳首を咬みきらなかった。

弘治二年（一五五六）四月、斎藤道三は、美濃国を信長に与えるという遺言状を末子に託す。このとき道三は、おのれの死を覚悟していた。

この翌日に、子の義竜と長良川に戦い、敗死する。まむしの道三もこの世を去った。それを最も悲しんだのは帰蝶だった。帰蝶は父道三のために信長に嫁いで来た。だから、信長に抱かれても体を動かしたことはない。

その後、帰蝶は清洲城を出て行方不明になった。

道三がいなければ、信長の室でいる必要はなかった。兄義竜は父の仇となってしまった。あるいは帰蝶は道三だけを愛していたのかもしれない。自分で道三の密偵の役を引き受けていたのだ。



同年八月、弟信行が動いた。信長も兵を出す用意はしていた。

清洲と那古野の間にある於多井川（庄内川）を挟んで合戦となった。敵に那古野城主の林通勝がついていた。つまり裏切りである。もちろん通勝は死を覚悟していたろう。

合戦をいくらもしないで、信行は末盛城に逃げ込んだ。

合戦はあっさり終わったのだ。信行にそれだけの力はなかったし、討死の覚悟もなかった。

宿将（しゅくしょう）、柴田勝家も、大将が逃げては戦う気もない。あっさりと引き揚げていった。信行の部将たちは、このとき信行を見放した。甘やかされて育った信行には、信長に勝てる強さはなかった。

逃げもどった信行は、母るいに頼んだ。信長に詫びてくれと。

林通勝は、信長の家老主座にあった。それが信長を裏切った。当然、首はないものと思った。

「詫びに行きなされ。るいさまの頼みなら、お舘さまも、信行さまの命はお許しになりましょう」

と通勝は言った。おのれは腹を切るつもりなのだ。

「通勝どの」

るいは目を曇らせた。信長を倒すために企んでみたが、勝てなかった。だが信行の命だけは

助けなければならなかった。わが子でありながら、るいには信長がわかっていなかった。るいは急いで清洲城に駆けつけた。そして涙ながらに、信行の命助けてくれ、と頼んだ。信行の首を刎ねるのは簡単だった。

だが、信行の首を刎ねれば、林通勝と柴田勝家に切腹させなければならない。二人の命は失いたくなくて信行を許した。

信長は、平伏している母るいを冷めたく見下ろしていた。すでに母ではなかった。信行をそそのかしているのはるいであることは知っていたのだ。

信行を殺してしまえば、この母はどういう顔をするだろう。生きてはいられぬかもしれない。血のつながりとは何だろう、と思う。るいの子は信行だけなのだ。信長を討てなかったので、るいは信長に母子の情で迫る。

母の頼みじゃ、信行を許せ、と言う。

通勝と勝家はまだ使いたかった。そのために信行は助かったのだ。

廊下ですれ違った従妹のお市がハッとなるほど美しかった。まだ十歳に満たない子供である。だが、目はキラキラとして肌は透き通っていた。いずれは美女になる少女である。お市は父信秀の弟の子である。



座敷に入る。そこに柴田勝家が坐っていた。

勝家の前には将棋盤があった。将棋の相手をするために呼ばれたのだ。

勝家は父信秀の臣だった。信行に付くように命じられたものだ。信行が謀叛して一年が経っていた。

勝家は、報告にやって来たのだ。また信行の様子がおかしくなっている。

信行はどうしても信長を討たなければ承知しないのだ。子供が甘えて菓子をねだるように。

将棋の駒が動く。

尾張の上四郡の守護代、岩倉城の織田信賢（のぶかた）と手を結んだという。そして清洲城を攻めるのだろう。

「おのれの首がとばなかったのを何と思うているのだ」

信長は、林通勝と目の前にいる勝家を助けたくて、母るいの願いを聞き入れた。信行の首をはねれば、通勝、勝家にも腹を切らせなければならない。

それでおのれの首がつながったと思っていない。母るいの願いだと思い込んでいる。再び謀叛して、もし失敗しても、母を信長の前に出せば、首を刎ねられることはないと思っている。

「どこまで甘ったれなのだ」

信長は合戦はしたくなかった。多くの者の首を刎ねなければならない。味方の将兵も多く死

ぬことになる。

そういう損失をしたくない。外敵との合戦はいくらもある。

「勝家、そのほうはどうしてここへ来た」

勝家は後へ退いて両手をついた。

「昨年の合戦、いまだ悔んでおります。命助けていただき、お舘さまのおんために、尖兵となって働きとうございます」

「わかっているのだな。勝家と通勝を助けるために信行の首を刎ねなかった」

「ありがたき、倖せにございます」

と頭を下げる。

「死なすにはもったいなかった。わしは敵が多い。身内で合戦しておまえのような男を死なせたくない。死に場所はいくらもある」

勝家は額を畳にこすりつけた。「もうよい。顔を上げよ。林はどうしている」

「信行さまに、あやまちはくり返してはならない、と申し上げておりますが、信行さまはご承知なさいませぬ」

「このようなことで争っている時ではない」

信長は居間にもどった。そしてお市を呼んだ。お市がちょこんと前に坐った。



「そなたは美しい女になる。おのれの美しさがわかっておるのか」

お市は首を振った。

織田家は美男美女の血統である。その中でも特にお市は美しく生まれついた。

輝くような美少女である。

「よいか、醜い女になるでない。そのまま育て。子供のときに美しくても、長ずるに及んで、人なみになる者が多い。そのまま美しく育て」

「誰のためにでございますか」

「この信長のためじゃ。醜くなると許さん」

「美しくなりまする」

とお市は答えた。

るいは、林通勝の胸に抱かれていた。衿の間から手を入れられる。そして手で乳房を包み込まれると、

「あーっ」

と溜息に似た声をあげる。るいは通勝によって、はじめて女になったような気がしていた。はじめは信行の味方になってもらうために、体を与えた。だが、いまは体が通勝を恋しがるよ

うになっていた。

母親と女の間をさまよっている。

「謀叛はおやめなされませ、一度失敗されておられます」

通勝も、信長がどうして許してくれたかは知っている。許されたとき、通勝は涙を流した。

信長は、そのほうの命が惜しかったからだと言った。

身内の争いで、部将を失いたくなかった。その信長の考えが痛いほどわかった。

「今度は負けぬ、と信行が言うておる。二度も負けることはあるまい。今度は前とは違う。守護代の織田信賢さまがお味方じゃ、それに通勝どのと勝家がいる。負けるわけがない」

るいの息が次第に荒くなる。通勝も乳首を摘んでいた。るいの腰が動く、もうきざしているのだ。

「信行はそう申しておる。母が子の言うことを信じないでどうする」

「信行さまには敵が多うございます。兄弟で争うている場合ではございますまい」

「信行が織田家の棟梁となったとき、それらの外敵は信行が引き受けましょう」

信行では無理だとは言えない。

「あーっ」

とるいは熱い息を吐いた。通勝は乳首を口にくわえた。るいは背中を反り返す。湯帷子の裾



をはねた。そして膝頭から男の手で撫であげていく。

「信長は、わが子ではない」

と言いきった。

「平賀の里のものたち、みな殺しにされました。お舘さまは、信行さまご謀叛のこと、すでにご存知かもしれませぬ」

内腿を撫であげた。手がはざまにたどりついた。

切れ込みを分けなくても、そこは熱く潤んでいた。

柴田勝家も通勝も、すでに信長に寝返っていることを、るいは知らないのだ。

通勝は、信長に信行を斬れと言われれば、城内でも信行を斬るつもりでいる。

るいは、人の心がまるでわかっていないのだ。信行のことだけ考えている憐れな女なのだ。

だが、最も母親らしい母親かもしれない。

信長はわが子ではない、と言いきるほど信行を愛しているのだ。

末盛城に噂が流れて来た。もちろん信行も細作を清洲城下に放っている。信長が病床に倒れたという噂である。

もちろん、噂は末盛城にだけ届いたわけではない。近隣の諸国にも届いたであろう。まず立って攻めて来るのは斎藤義竜だろう。

「噂はまことですか」
るいのそばには林通勝がいた。
「まことのようにございまする」
このところ、るいは通勝をそばから放そうとはしない。通勝もるいへの奉仕はいま少しと思っている。
いまのるいは母親と女をごちゃまぜにしている。
「信長が、そのような噂を流しているのではあるまいな」
「そうかもしれませぬ」
「どうしてそのようなことをするのです」
「さあ、わたしにはそのようなこと、わかりかねます。たしかにお疑いになったほうがよろしゅうございます。お舘さまの罠かもしれませぬ」
るいの手は、通勝の腿を撫でていた。
「いや、噂はまことであろう。もしかしたら合戦に持ちこまずとも、信長は病で死んでくれるかもしれぬ。すれば、織田家は信行のものになります」
手は男の股間を探っていた。このところ、るいは狂っていた。男に狂っていた。
この年になって男に狂うとは思ってもいなかった。だが、体が男を求めるのだ。



二人がちちくり合っているうちに、清洲から情報が入ってくる。信長の病はだんだん重くなってくるという。
るいは見舞いに清洲城に出かけて行った。たしかに信長は暗い部屋に寝ていた。
額に手をやると、異様に熱かった。熱があるのだ。
信長は寝床の中に湯タンポをいくつも抱いていた。汗を流す。
「信長、苦しいかえ」
と声をかける。信長は呻き声をあげる。
「大事にしやれ」
と言ってるいは部屋を出ていく。
るいは末盛城にもどる。
「信長の病、まことであった。あの様子では助からぬかもしれぬ」
「信行、一度見舞いに行っておいたほうがよい。棟梁になるためにも、みんなに顔を見せておいたほうがよい。信長には奇妙という男の子がいる。まだ幼いが、奇妙に棟梁になられてはかなわぬ」
るいにとって奇妙は孫である。孫でもいとしくはなかった。信長の子だからだ。
弟信行は、母るいに言われて清洲城に信長を見舞いに来た。信長は重病だという。再起不能

と伝えられた。信長が死ねば、織田家はおのれのものになる。

信長にしてみれば、信行の軍とは戦いたくなかった。同士討ちのようなものである。信行さえいなければ、信行の軍は信長のものになる。

同士討ちをして兵を失いたくなかったのだ。敵は周りにいくらもいる。信長の軍が痩せ細っては、たちまちにして潰される。そうしないためには信行一人を除くしかなかった。

信長は暗い部屋に寝ていた。信行が覗き込む。

信長はすでに死んでいるようにさえ見えた。

「兄上、兄上」

と声をかけた。返事がない。信行はニヤリと笑った。

「兄上、さらばじゃ」

信行が体をのけようとしたとき、信長の左手が彼の衿首を摑んだ。びっくり仰天して、その手首を振り払おうとしたが、手は放れない。信長はゆっくり起き上がった。

「二度までも謀叛するとは」

信長は信行を睨みつけた。双眸が鈍く光った。

信行が逃れようと身を揉む。信長の右手には、短刀が握られていた。暗い中に刃が光った。その短刀が信行の左胸に刺った。



「分をわきまえていればいいものを」

信行を睨みつけた。短刀は深々と信行の胸に刺った。叫んだ。短刀の柄を胸につっ立てたまま、信行はどうと倒れた。

部屋の外には五人の信行の供侍がいた。そのそばにいたのは源五郎丸十蔵だった。部屋の異変に気付き、五人が立ち上がろうとしたとき、十蔵は刀を抜いて五人の前に立っていた。

「動くな、動けば斬る」

「おのれ、たばかったな」

と叫んで一人が刀柄を摑んで立ち上がろうとする。十蔵は刀を薙いだ。一呼吸あって首が傾いた。その首根から血が噴き出した。首が廊下に転がり落ちる。四人の侍は降りかかる血から逃れた。

四人には、すでに刀を抜く気力はなかった。

「あんたらには、信行さまのご遺体を運んでいってもらわねば困る」

そのころ信長は湯殿にいた。この一カ月あまり、信長は湯に入らなかった。

汗にまみれていた。母るいと信行を欺すためである。汗の臭いを嗅ぐ。すると病人と思い込む。

信長は侍女二人に体を洗わせ、髪を洗わせ髭も剃らせた。信行はこの手で殺した。

この手で殺してやるのが、せめてもの思いやりであった。家臣にまかせたくはなかった。

信行は母るいに甘えていた。甘えていれば織田家はおのれのものになると思い込んでいた。その甘えも信長の気に入らなかった。

男はおのれにさえ甘えてはならない。甘えれば踏ん張りが利かなくなる。母に甘えるなど論外だった。

信行の遺体は末盛城に運び込まれた。るいが嘆き悲しむのは当然だった。るいは信行を頼りにしていたのだ。

当然、るいは信長を恨んだ。頼りにしていた信行を殺されたのだ。これも当然だった。おのれの非は認めなかった。すべてが信長が悪かったのだ。

るいは信長を討とうと思っていた。そのことは忘れ、信行が殺されたことだけを恨んだ。

## 二

永禄二年（一五五九）――。

信長は五百の兵を連れて、はじめて上洛する。そして将軍・足利義輝に謁見する。京からもどって、岩倉城を落として、尾張統一は成った。この年、信長は二十六歳になっていた。



尾張統一で満足したわけではない。斎藤道三のたのみもある。道三を討った子の義竜を討たなければならない。義竜を討って美濃も手に入れる。だが、簡単には義竜を討てそうにもない。

翌、永禄三年五月、駿河の今川義元が動き出した。義元は二万の兵をもって、上洛しようとする。天下に号令しようというのだ。

京に行くには尾張を通らなければならない。義元は尾張の織田など押し潰して通るつもりである。

押し潰すのは簡単なことだ。信長には二千の兵しかない。だが、信長は白旗を掲げるつもりはない。今川の属将などにはなりたくなかった。

国境に布陣しても勝算はない。城にこもってみても潰される。援軍があるわけではないのだ。ただでは、尾張織田は消えてしまう。どうしたらよいのか、城内では会議が続く。だが新しい意見が出るわけではない。

だいたい、兵力が十分の一では戦いようがない。義元の軍門に下るくらいなら、戦って死んだほうがよい。

義元は、まともに織田軍と戦う気はない。ただ尾張を通るだけだ。義元の目的は京である。だが、尾張を通らなければ京へは行けない。

義元は信長は降参するものと思っていた。降参しなければ押し潰して通るだけだ。義元は悠

然とし、織田方はあたふたとしていた。方法などあるわけはない。戦って死ぬだけと思えば気も軽い。

だが、それほど気軽くなるわけはない。あと数日の命かと思う。寝間に入っても眠れるわけはない。

女が一人寝所に入って来た。従妹のお市だった。湯帷子を着ていた。お市は信長のそばに坐った。

「お市、どうした」

「抱いて下さいませ」

と言う。信長はお市をじっとみつめた。美しくなっていた。肌も透明感があって白い。双眸は大きくて黒目がち、鼻筋が通って唇は小さい。

「お舘さまは、市に美しくなれと申されました。お言葉どおりに、わたしは美しくなりました。褒美に抱いて下さいませ」

信長は、うむ、と唸った。

お市の思いはわかっていた。今川と合戦すれば、十中八九は、信長は生きてはもどらないだろう。その思いがある。いまでないと永遠の別れになってしまう。

「市は、ずっとお慕いしておりました」



「知らなかったな」

お市が女だとは思いもしなかった。妹として見ていたのだ。世にも妹として伝わっている。まだ男の手は入っていない。信長の妹に手をつける者はいない。

そうであったか、と思う。いまは女にはなっている。美しい女だ。これほど美しい女はいないだろうと思える。お市が慕っていたとは思わなかった。

今川義元と戦えば、生還は期しがたい。すればこれほどの美女に触れられなくなる。もったいないことである。

思いがけないことだった。お市は矜りの高い女だった。手をつけようとすれば舌を咬んで死ぬたぐいの女だと思うていた。

「そうか、わしに抱かれたいか」

と呟いた。

抱く機会は今夜しかなかったのかもしれない。明日はおそらく出陣になるだろう。

「こちらへ来い」

と言った。お市は夜具に上がってくる。それを抱き寄せた。髪によい香りがした。お市が持っている香りなのだろう。

背中を撫でた。頤に手を当て顔を仰向けにする。お市は目を閉じた。可愛い小さな唇に触れ

る。とけそうに柔らかい唇だった。うっ、と呻いた。はじめて男に唇を触れられたのだ。

背中から腰、そして尻を撫でる。湯帷子の上から乳房を押えた。立派に膨らんでいた。それを揉んでみる。あーっ、と声をあげた。もちろん快感を覚えるはずはない。

衿から手を入れて乳房を手に包み込んだ。なめらかな弾力のある乳房である。大きすぎるということはない。手にぴったりとする大きさである。肉は薄い。だが骨を感じさせないくらいは肉がついていた。

乳房を揉みあげる。もちろん乳首は小さい。乳首が立ち上がることもない。まだ女になっていない体である。

お市の体をそこに横たえた。布の上から体を撫でまわし、そして腰紐を解く。湯帷子の前を左右にめくる。白い肌が目にさらされる。

多くの美女たちを抱いてきた。だが、お市とは趣が違っていた。少女のころから可愛いというのではなく美しかった。

肌を撫でまわす。透明感のある肌である。手になめらかだ。細腰、腰、そして太腿を撫でる。下腹部には申しわけ程度に茂りがあった。

お市はじっと目を閉じていた。おそらく、肌を男の目にさらすのははじめてだろう。恥ずかしいだろう。それをじっとこらえていた。



お市の体の湯帷子を脱がせて裸にした。そして腹這いにさせる。背中から腿まで、傷一つない白い肌である。腰も左右には広がらない。その尻がぷっくり膨らんでいた。丸い尻である。その尻の肉を摑む。撫でながら揉む。

白い体を眺める。よくここまで成長したものだ。足は長くて調和がとれていた。尻を堪能して、仰向けにした。裸にしておくのはもったいないような気がして、湯帷子を再び着せる。

もったいないのではない。女の肌は全裸よりも布から出ている肌のほうがきれいに思えるときもある。女もまた、特に生娘ならば、着ているほうが安心でもある。

湯帷子を着せておいて、前をめくる。膝を折り立たせた。そして膝頭を開かせようとする。さすがに羞恥が腿を開くのをためらわせる。

膝を開かせておいて奥のはざまを見る。切れ込みはぴたりと合わせて一直線になっていた。はざまに手を当てて上下に撫でる。そこはつるりとしていた。

撫でながら、合戦のことを考えていた。信長もまだ二十七歳である。尾張を征服した。一応の目的は達したことになる。だが、死ぬには早すぎる。

だが、今回はどうにもなりそうもない。相手は二万だ。わがほうは二千しかない。いかに合戦に強い信長軍でも、どうにもならない。だが、どうにもならないですますわけにはいかないのだ。

お市の体を抱き寄せた。お市もまた抱きついてくる。湯帷子の中に手を通し、尻を引き寄せる。膝を押しつけると、腿が開いて男の腿を挟み込んだ。

「一物を握ってみよ」

と言った。お市は手を股間に入れ、そこに怒張している一物を手にした。

「恥ずかしくないか」

「いいえ、お舘さまのものです」

男を知っている後家でも、はじめはためらうものである。

「まぐわいとは、どうすることか知っているのか」

「いくらかは。でもお舘さまにされるままになっていればいいと思っています」

信長ははざまに手を入れた。はざまを撫でまわし、切れ込みを指で割った。そこは湿ってはいたが、潤んではいなかった。潤めというほうが無理なのだ。

肉の芽に指を触れた。お市の体がピクリと動いた。

「気持ちよいのか」

「わかりませぬ。いいような悪いような」

「無理もないな」

壺口に指を入れようとしたが入らない。指を舐めて壺口に当てた。指一本がどうにか通った。



その指をゆっくり動かす。

二万の軍勢が、と呟く。今川義元の軍が尾張に迫っている。これを討つにはどうしたらいいのか。不可能と諦めてしまうわけにはいかない。それを可能にしなければならないのだ。

愚将であれば、不可能と諦めてしまって、今川の軍門に下るかもしれない。信長はそうはいかないのだ。

壺口に指を使っても潤んでこない。すると指がなめらかに動かない。もう一度舐めた。その指を壺口に通す。その壺口をゆるめるように指を使う。

二万の大軍である。どう動くのか。この尾張のどこを通ろうというのか。不可能を可能にするのが武将の能力である。

「その手にしている一物、口にすることができるか」

お市は、ハイ、と言った。一物を手にしたのがはじめてである。それを口に咥えよとは無理である。だが、お市は体を起こした。そして股間に顔を埋める。

お市は、男に体を与えるという気持ちではなかった。信長に抱いてもらうのだという思いである。だから、信長がせよということなら何でもできると思ったのだ。

慕っている男の一物である。きたないわけはなかった。もちろん、お市も信長に、抱いて下さい、と言うには、さまざまなことを考えたのだろう。迷いもした。だが、今宵抱かれなけれ

ば、信長は戦死してしまうかもしれない。

それで勇気を出した。勇気を出してみれば一物を口にすることなど、何でもないことだったのだ。

尖端に唇を押しつけた。つるんとして弾力がある。一物がこういうものであることは、もちろん知らなかった。

胴のほうは固い、これが体に入ってくることは知っている。こんな大きなものが、という思いはある。

尖端は乾いていた。舌を出してそれを舐めまわす。するとなめらかになる。尖端の丸い部分を口に咥えた。それをもっと深くのみ込みたくなる。

ゆっくりと口の中に入れていく。尖端が咽に達した。

男を知らないから、何もできないというのではなかった。奥の女たちは猥雑なことを喋る。それは耳に入ってくる。

お市も女である。男に抱かれるとはどういうことなのかを知っている。どこに一物が入ってくるかも。もう十七歳である。

当時の女たちは、たいてい十二、三歳で男を知ることになる。十七歳まで、男を知らなかったというのは不思議なくらいだ。手を出す男がいなかった、ということだ。



信長の頭の中には、二万の大軍がある。これをどうにかしたい。どうにかできないことはないのだ。ただ、いまは何かがわからない。何かがある。二万の大軍を打ち破るには、打ち破ることはない。今川義元の首さえとればいいのだ。義元を失えば、今川軍はバラバラになる。すでに軍隊ではない。

二万の軍も霧散する。そうだ義元の首なのだ。二万の軍と考えたから不可能だった。義元の首と考えれば、可能性が出てくる。

本陣を狙って突っ込む。だが、義元の前には軍が立ちはだかる。その軍と戦っていれば左右の軍が押し寄せて信長の軍は押し包まれ、押し潰される。

「これも駄目か」

と呟く。いや、はじめに比べると可能性は出てきた。何とかなる。何か方法はあるはずだ。二万の軍と戦おうと思えばこれは不可能なことだ。だが、義元の首をとるだけ、と思えば可能性が出てくる。それだけ進歩したのだ。

もう一つ進歩すれば、義元の首はとれる。もう一つ、とは一体何なのか。

信長は、お市の頭を上げさせ、そして夜具の上に仰向けにさせた。そして股間に顔を埋めた。

お市は、アッ、と声をあげた。指で切れ込みを拡げた。そこに舌を這わせる。

壺口に唾液をためる。そして壺口に指を入れ、そこを拡げるように指を使う。壺口は前より

もゆるくなったような気がする。

できるだけゆるめてやらないと、一物を入れるときに痛がるだろうと思う。もっとも薄い膜である。それを突き破るには、できるだけゆるくしておいてやりたい。

信長が生娘とまぐわうのは、生涯帰蝶とお市だけである。献上される美女がいても、生娘と聞くと首を振った。女は楽しみに抱くのだ。生娘では楽しめないのだ。

豊臣秀吉は生娘を好んだ。その女にとって自分がはじめての男になりたかったのだという。徳川家康は後家好みだった。その点では信長と似ている。だが後家でも年齢が違う。信長は若後家だが、家康は三十、四十のまぐわいに馴れた後家である。

信長は壺口を充分に濡らしておいて、おのれの一物も唾液でなめらかにした。そして一物を壺口に当てる。

「力むな、力を抜け」

と言った。腰を押しつける。尖端が滑り込んだ。そこから押しつける。お市は、小さく、いたっ、と言った。そこで急に抵抗がなくなり一物はゆっくりと滑り込んでいく。膜が裂けたのだ。根元までつくした。

「痛かったか」

「いいえ、チクリとしただけです。でも、そのまま動かないで下さい」



と信長の腰を両手で引き寄せた。痛みがひどくなくてよかったと思う。

壺の中の襞は一物によって押し開かれている。その襞はもとにはもどらないのだ。

## 三

軍議の場で、信長はじっと地図を見ていた。二万の今川義元軍はどこをどのように通るのか。二万は横に広がって前進するわけではない。行列という、縦に長く連なって進む。

信長はそのことを考えていた。義元をめざして突撃する。だが、義元に届く前に前後の隊が押し寄せてくる。前後の隊が動けないようにする方法はないのか。

もちろん、義元に近づけない方法はとっている。地図を穴があくほどみつめる。

その地図の上にお市の裸身が浮いた。美しい姿のいい裸身だった。信長はお市の股間に顔を埋めて舐めた。

そのせいもあって、膜はたいした痛みもなくて裂けた。

そして壺は一物を根元までも迎え入れたのだ。

信長は、首を振った。そんなことを思っている暇はないのだ。生死を賭けて戦わなければならない。生死というが、生の部分は少なくほとんどが死である。

いま死ぬのは未練がある。せっかく尾張を統一したのだ。もちろん、武将というのは、いつでも死と隣り合わせだ。

物見は出している。いつもの二倍だ。

その物見たちが刻々と義元の動きを知らしてくる。

松平元康の手勢に丸根砦を攻められ、落ちた。そのときに佐久間盛重が討死した。

信長は夜明け前に清洲城を出た。そして途中、熱田神社に寄った。神にたのむつもりはなかった。

物見が来て、義元は桶狭間に着陣するらしいとわかった。

「桶狭間か」

と呟く。空は曇っている。西の空の雲が黒い。

「雨になりますな」

と部将の一人が言った。

「雨か」

と呟いた。何か可能性が出て来たような気がする。雨がポツリポツリと降ってきた。物見が走って来て片膝ついた。

「今川義元は、桶狭間に着陣いたしました。義元は百姓家に入ったようです。向こうは激しい雨でございます」

「みなのもの、義元めざして突っ込め、めざすは義元の首一つじゃ」

叫んで信長は馬を走らせた。そばには源五郎丸十蔵がついていた。

「十蔵、わしのそばを離れるな」

「わかっております」

もちろん、十蔵も馬である。十蔵は短槍を手にしていた。合戦では、刀は通用しないのだ。一閃で刀は折れてしまう。槍ならば鎧も通してしまう。

剣法者が武将に軽く見られたのは、刀は合戦に通用しないからである。

雨は激しくなる。この雨では、義元の本陣に突っ込んでも、前後の軍は気付かないかもしれない。狭間というからには、そこは狭い。狭いから、兵たちは左右に散って戦うことはできない。

「天運である」

天は信長に味方した。

桶狭間は、豪雨の上に雷まで、閃光と轟音を発していた。

義元は床几に坐って雨を見ていた。鎧を着ていては暑い。日ごろ着なれない鎧である。鎧を脱ぎ、扇子を使っている。

すぐそこまで、信長が来ているとは思いもしなかった。将兵も雨をよけて休んでいる。

義元の耳に乱れた馬の蹄の音が聞こえた。

「あれは何じゃ、この雨の中を何いたしておる」

兵が走って来た。

「織田軍にございます」

「何じゃと」

義元は仰天した。そして青くなった。急いで鎧を着る。

「駕籠じゃ、駕籠じゃ」

と叫ぶ、侍臣たちが鎧をつけてやる。鎧を着ていれば逃げられたかもしれぬ。駕籠が運ばれて来た。閃光が光った。義元の姿を浮かび上がらせた。

駕籠が目につくとは思ってもいなかった。裸足で逃げ出していれば逃げられていた。だが習慣である。

義元は、駕籠に乗った。持ち上げられた。

「早く逃げよ、早く」

と叫ぶ。それでも二十人ばかりの近侍がついた。信長はこの駕籠をみつけた。信長の将兵が押しよせてくる。



十蔵はその駕籠めざして走った。義元の近侍たちを突きまくる。十蔵は馬を降りた。侍を突く。その侍が崩れるところを刀を抜いた。

おのれの刀では折れるか刃こぼれするか。それで敵の刀を借りた。近侍が刀を抜いて向かってくる。

躱しもしない。勝手に鎧を打たせる。音をたてて刀が折れる。そこを、股間を突き上げた。侍は目を剝き、体をくねらせた。股間にだけ鎧はないのだ。

十蔵は槍で突きまくり、股間を斬り上げる。さすが義元の軍である。駕籠に近づけない。十蔵は槍を投げた。駕籠をかついでいる侍の脇腹を貫いた。

駕籠が傾いた。動きが止まった。信長軍は斬りかかる。これが雷雨でなければ、前後の軍が駆けつけるのだろうが、その兵たちは、のんびりと雨やどりしていた。

駕籠の侍が一人二人と討たれていく。駕籠は止まった。動けなくなったのだ。

「義元の首を討て」

と馬上の信長が吠える。駕籠の中から顔の白い公卿のような男が出て来た。歯を黒く染め、眉を剃っていた。もちろん化粧している。

これが義元だった。何かを叫んでいる。信長の近侍が、この首を引き切った。そして、それを槍の穂先に突き刺した。

「義元の首をとったぞ。引き揚げじゃ」

十蔵も再び馬に乗った。そして清洲城をめざす。このときもまだ、敵の将兵は義元の首を取られたことを知らなかった。

「これで、やっと生きのびた」

信長は馬上で呟いた。九死に一生だった。途中で雨はやんだ。もちろん敵は追ってくるかもしれない。その用心はしていた。

もちろん、義元の本陣はそれどころではなかった。大将の首が討たれたのでは、将兵も動きようがないのだ。駿河に引き揚げるしかなかった。

清洲へ凱旋したのは、その日の夕刻だった。先に知らせを受けた城内は大騒ぎだった。広座敷では酒宴になる。

誰が手柄ということはない。みんなが義元の首を討ったのだ。

「義元の首を討ったのは、そのほうたちの働きじゃ。今夜は呑め、唄え、踊れ」

酒が運ばれてくる。酒がのめない信長は湯殿に入る。侍女が汗を流す。信じられないほど簡単に義元の首をとれた。

まだ、実感が湧いてこない。

信長は、湯を浴びて、大広間に出た。そして家臣たちの祝福の言葉を受ける。大敵、今川を



倒したのだ。いや、軍は残っている。だが、大将義元の首をとった。

信長は天が味方したとは思っていない。だがおのれの運というものがある。信長は運が強いのだ。

「今宵は酔いつぶれるまで呑め」

と言って座を立った。寝所に入ると、そこにお市が坐っていた。

「お舘さま、おめでとうございます」

「そちを抱いたおかげかもしれんな」

「うれしゅうございます」

お市の体を抱き寄せた。二度とお市を抱けるとは思っていなかった。もちろん、義元の本陣を襲うときには、頭の中は真っ白だった。何も考えていなかったのだ。夢見心地だった。体から力が抜けていた。

抱き寄せて、腰から尻を撫でた。

「勝ったのだ」

と呟く。昨日の今ごろは、死ぬことだけを考えていた。今川に勝つ方法はなかったのだ。それが義元の首を討てた。

信長は、お市の衿をめくって、乳房を摑んだ。乳房は手に心地よかった。男の気持ちを慰さ

める。

乳房に口を押しつける。そして舐めまわす。青白い肌である。咥えるほどに乳首は大きくない。

「市も生き返ったような気がいたします」

「わしも生き返った。昨日までのわしではなくなった」

まだ興奮していた。

お市の裾をめくり、白い腿を撫でた。そこから尻に手をのばす。内腿に手をやった。なめらかな柔らかい肌である。内腿の肉をたのしみながら、手ははざまにたどり着く。はざまを上下に撫でる。なめらかな手触りである。

「どうであった。昨夜から」

「まだ、信長さまの半分が、そこに残っているようでございます」

お舘さまと言わず、信長さまと言った。

「そうか、忘れものをしたのかな」

信長はお市の手を股間に誘った。お市の細い指が一物を握った。そして手を上下させる。誰かに教えられたのではないだろう。女というのはそのような技を自然に覚えるものらしい。はざまを撫で回し、指で切れ込みを割る。だが、潤んではいなかった。昨日の今日である。



潤むはずはなかった。指先を舐めて、その指の腹を、肉の芽に押し当てた。小さく、アッ、と声をあげた。

まだ快くはないはずだ。指を舐めて、切れ込みの中に指を遊ばせる。だが、すぐに乾いて来る。

お市は男の股間に顔を埋めてきた。信長は仰向けになった。尖端に舌を這わせはじめる。尖端をなめらかにして、咥える。そしてゆっくりと呑み込む。

その唇のあたりを見ていた。小さな唇の間を一物が出入りしている。

お市を仰向けにし、切れ込みを舐めた。

一物にも唾液をつけて没入させる。何の抵抗もなく、すんなりと入った。入っただけである。壺の中は何の反応もない。

ゆっくりと出し入れをする。声を出して悶えよと言うのは無理である。

お市の腰が動きはじめた。何も感じないが、男が入ってきたら、腰をくねらせるものと思い込んでいるのか。

# 六章　お稲の方

## 一

永禄四年（一五六一）――。

前年に今川義元を討って、義元の部将であった松平元康（のちの徳川家康）と和睦した。

これより二十一年間を元康とつき合うことになる。

次に信長がやることは美濃の斎藤義竜を破ることだった。

三月十三日、木曽・長良川を渡り西美濃に侵入し勝村に陣を張る。翌十四日に墨俣砦から出撃した義竜の兵と森部で戦い撃破する。

合戦に勝ちはしたものの義竜は強かった。もちろん義竜は死んだわけではない。ただ引いたわけでもない。

信長は義竜の墨俣城を落とし、城に入った。

永禄五年（一五六二）――。



一月十五日に、松平元康が清洲城を訪れた。元康は今川の属将だった。今川義元が討たれて、信長と手を組みたかった。

永禄六年三月二日――。

信長の娘五徳と元康の嫡子竹千代（信康）が婚約する。

前年に斎藤義竜は病死した。あとをついだのは嫡子の竜興である。

信長は、美濃稲葉山を攻めて敗退した。

家臣の岡本次郎右衛門が戦死した。もちろん嫡子にあとを継がせる。同時に妻のお稲を召し出した。

以前から美女と聞いていた。お稲は後家になった。子供を三人産んでいても、まだ二十一歳だった。次郎右衛門と夫婦になったのは十三歳のときだった。

若後家ではある。だが、八年間は次郎右衛門の妻だったわけである。まぐわいには馴れている。

湯上がりの体を夜具の上に横たえた。

「次郎右衛門はよく働いてくれた。よってそのほうを召し出した。わしに抱かれるのがいやであれば、家に帰してやる」

「お舘さまに召されるのは、身に余る光栄にございます」

「夫婦の仲はむつまじかったと聞く」
「はい、よいお方でございました」
信長はいやがる女を手込めにしたくはない。だから前もって了解をとる。お稲が信長に抱かれることを喜んでいるかどうかは別である。
湯帷子の衿を開いた。大きな乳房だった。乳首も大きかった。三人の子供に与えた乳房であり、乳首なのだ。
二十一歳、体は若い。だが三人の子を成している。乳房は膨らむものである。乳房を摑んだ。手に余った。乳房を下から揉み上げる。量感があった。
だが乳房は指がめり込みそうに柔らかだった。
「わたしのようなものをお召しになって」
「そなたは美しい」
女は二十歳を過ぎると年増である。まさにお稲は年増であった。揉み上げる。あーっ、と声をあげた。腰のあたりが動いた。
「うれしゅうございます。お舘さまの枕席にはべることができるなど、思ってもいませんでした」
乳首はしこっていた。それを口に咥える。



お稲はまた声をあげ、更に強く腰をゆすった。吸いがいのある乳首だった。裾をめくって、手を内腿に入れた。
乳房が大きくても体つきは細く見える。だが快く肉をつけていた。内腿を撫であげる。はざまにたどり着いた。はざまはぷっくりと膨らんでいる。
その切れ込みを指で開くと、そこはすでに潤んでいたのだ。そこが潤んでいるということは、男にとってうれしいものである。女の体が男の愛撫で反応しているという証拠である。
いまごろ帰蝶はどうしているのだろうか、と思う。彼女は自分で体を潤ませることなど一度もなかった。
体が潤んでいるということは、身も心も男にゆだねている、ということでもある。
「わたしのようなものが」
とお稲はまた言った。たしかにお稲にしてみれば、信長は雲上人でもあったのだ。
切れ込みに指を遊ばせる。潤んでいる切れ込みを指で感じるのは、男として至福であった。
潤みは肉の芽にも及んでいた。
道三は、美濃は信長にくれると言った。美濃もおのれのものになったと思ったが、そうは甘くなかった。
斎藤義竜も強かった。その子の竜興も強い。もっとも将兵は義竜の残したものである。竜興

の稲葉山城を攻めたが、失敗して退いた。多くの将兵が死んだ。

岡本次郎右衛門もその一人だった。その妻お稲は美人の噂の高かった女である。そのお稲を召し出した。

信長は、今川義元の首をとってから、天下をうかがうようになっていた。だが、まだ大敵武田信玄がいる。信玄が京をめざせば、また尾張を通ることになる。

当然、合戦になる。武田の騎馬武者というのは強い。天下一だろう。この騎馬隊をどのように迎え討つかにある。まだ、信長には勝算はなかった。

義元の首を討ったときのように、奇襲作戦で勝てるとは思っていない。義元の首が信長によって討たれたのは誰でも知っていることである。

奇襲が二度通用するとは思っていない。もっとも、信玄にはずっと以前から書状を送りつづけている。自分は信玄の敵ではないと。

信玄が都に上るのであれば、どうぞお通り下さい、というわけにはいかない。信玄の軍門に下れば、信玄の属将となり、信玄のために兵を出さなければならない。

信長は天下を狙っている。信玄に負けるわけにはいかない。その前に、美濃の斎藤竜興できえまだ攻めきれないでいる。

お稲が手を股間にのばしてきた。信長は仰向けになった。お稲は一物を手にした。そしてそ



れをじっと眺めている。それから唇を押しつけてきた。

唇の間から舌を出して舐める。夫であった次郎右衛門の一物と比べているのだろうか。尖端をなめらかにし、その部分だけを咥えた。そして音をたてて吸う。首と胴のつなぎ目に舌を這わせる。

また出しては舐めまわす。そして、乳首を尖端に押しつけてくる。鈴口に乳首を押し込もうとする。

お稲に一物をまかせておいて、信長は天井を見ていた。合戦はいつまで続くのか。父信秀は、一生を戦い続けて死んでいった。一生が合戦であったのだ。

合戦がいやになったら信長もおしまいである。気力を保っていかなければならない。男は死ぬまで戦いである。

「上になってよろしゅうございますか」

お稲は妙に潤んだ声で言った。信長は頷いた。一物を手にして腰にまたがってくる。濡れて光る切れ込みを見ていた。

切れ込みに尖端を当てた。そのまま壺に迎えるのではなく尖端を肉の芽に当てたのだ。

尖端を押しつけ手を動かす。声をあげて、腰を回す。あーっ、と声をあげる。尖端の感触がいいのだろう。

目の前で乳房が揺れていた。女とは奇妙な生きものだ、と思うことがある。女は自分の歓び方を知っているのだ。

尖端を壺口に当てた。一物は一気に滑り込んでいく。声をあげて腰を振る。回してはしゃくり上げる。

そしてお稲は腿を閉じたのである。そして体を上下させる。一物の胴に肉の芽を擦りつけているのだ。そのほうが快感があるのか。体を上下させれば、壺口も刺激される。ついでに芽でも快感を得るのだ。

お稲は、信長の体の上に重なり腿を閉じて、体を上下にゆすって呻き声をあげていた。信長は両足を開き、お稲の尻を押えていた。

一物の胴が肉の芽に当たっている。その芽を刺激しているのだ。

「あーっ、お舘さま、稲は倖せでございます」

と、とぎれとぎれの声をあげる。信長は尻を引き寄せ、尻を摑んで揉んでいた。尻の感触というのは快いものだ。尻だけどうして冷めたいのだろうと思う。その冷めたくて柔らかいのが気持ちよい。

女は男に抱かれると夢中になって何もかも忘れてしまう。だが男はそうはいかない。女の体にのめり込めればどんなによかろうと思う。



斎藤竜興は意外に強かった。なかなか稲葉山城が抜けない。信長は越後の上杉輝虎謙信によしみを通じる。近江の浅井長政も気になる。

お稲はようやく股を開いた。信長が股を閉じる。お稲の腰が回る。しゃくり上げる。信長は下から突き上げてやる。

「くたくたになります」

と声をあげた。途中で休むことなく、尻を回している。壺の中では襞が一物に絡みついてくる。壺口を強く締める。

それでも上になったままでは気がいかないのだ。気をやりたくてもいかない。ただ身悶えるだけだ。そのさまはむしろ苦しげにさえ見える。

お稲を押しのける。夜具の上に仰向けになった。そして腿を拡げる。そのさまは淫らであった。もちろん女は男に抱かれるときは淫らにならなければならない。

顔が紅潮している。それを美しいと思う。信長は股の間に入った。眼下に濡れた切れ込みが見えていた。切れ込みを指で開いてみる。壺口がしきりに伸縮していた。動く度に露がにじみ出てくる。

「早くお情けを」

と泣きそうな声で言った。一物を手にして尖端を肉の芽に押しつけてやる。お稲の手がのび

てきて、一物を摘むと、自分で尖端を芽に押しつけ手を震わせる。
腰を弾ませる。お稲の顔がゆがんでいた。背中を反り返らせ、そして泣くような声をあげる。
「このようなこと、はじめてでございます」
尖端を壺口に当てる。壺口は狭くなっている。それを尖端が押し拡げるのだ。一物が根元まで滑り込んでいく。
お稲は声をあげてしがみついてくる。そして尻を回し腰を弾ませる。
「いくう」
と声をあげた。襞はしきりに一物を締め上げている。強く締めているから壺口の刺激は大きくなる。
体が痙攣した。ヒーッと声をあげて、ぐったりとなった。手足から力が抜けていく。そして大きく息をついた。
「こんなの、はじめてでございます」
「次郎右衛門はしてくれたのであろう。仲むつまじかったと聞いていた」
「はい、でも、亭主は自分で満足するとそこまでした。お舘さまほどやさしくはありませんでした」
「女というのは大事にあつかわねばならん」



お稲は、ヒッ、と声をあげてまたしがみついてきた。そして声をあげる。
「またです。またでございます。気がいきまする」

## 二

足利将軍義輝は、松永弾正に襲われる。このときの話が残っている。義輝は塚原卜伝の弟子で免許をもらっていた。
それで自分が持っている名刀をみな抜いて砂に突き刺し、刃がこぼれたり折れたりすると、次の刀を抜いて斬り合った。
だが、刀術というのは二、三人を相手に斬り合うときには有効であっても、相手が軍勢となるとほとんど役に立たない。義輝も討死してしまった。
合戦の役に立たない剣術というものを、武将たちが認めなかったのは、この辺にある。剣術家は武芸者とさげすまれた。刀を振り回す芸者である。
いかに達人・名人となっても、合戦にはたいして役に立たないのだ。武芸というのは、大名が遊興のために見るものになる。大名が見ている前で、相手と打ち合ってみせる。
「みごとじゃ」

と大名はよろこぶ。同じ芸者ならばまだ女芸者のほうがよい、と考える大名もいた。武芸とはその程度のものであった。

義輝の死は、大名たちに、武芸がいかにつまらないものであるかを悟らせた。

永禄七年（一五六四）、信長は清洲城から小牧山城に移る。七月二日、美濃の国枝古泰に、越前の朝倉義景との連絡をたのむ。

東美濃の鴨沼、猿啄（さるたく）の両城を陥落させる。また、美濃の北伊勢を攻略し、尾張犬山城を手に入れた。

合戦に次ぐ合戦である。その間に、信長は息子を上杉輝虎の養子にした。信長は子が多い。息子であり娘である。これを政略に使うのだ。

息子を養子にやったり、娘を嫁にやってもそれで味方になったわけではない。いつ裏切られるかわからないのだ。

息子、娘がいないと、結婚による政略もできないことになる。上杉輝虎には子供がいなかった。輝虎はお虎という女であったとも言われている。

永禄九年（一五六六）――。

信長は、斎藤竜興と和睦する。それなのにこの年の八月には、信長は竜興と戦って敗れている。どちらが悪いのかわからない。だが、信長は美濃をおのれのものにしたかった。仕掛けたのは信長だったのだろう。



竜興とは何度も戦っている。だが、その度に攻めあぐねて敗走しているのだ。

信長は、軍勢をひきいて近江矢島に陣を張り、足利義秋（のちの義昭）を奉じて上洛しようとしたが、三好党や近江の六角に妨害されて果たし得なかった。

義秋は前将軍義輝の弟で興福寺一乗院門跡覚慶だった。その覚慶が義秋と称して足利将軍になった。

永禄十年、この年、信長は三十四歳になっていた。美濃三人衆が信長に人質を出して内通した。そして伊勢長島の一向一揆攻めに出陣する。

そのあと、稲葉山城を急襲して、どうにか城を抜く。斎藤竜興は伊勢長島に逃れる。これでやっと美濃を平定したことになる。このころに、信長は岐阜城に移った。

織田家乗っ取りを考えた信光は、清洲城で信長に殺された。信光は信長の叔父だった。その信光の娘がお市である。

以来、お市は信長と共に城に住んでいた。お市は信長の従妹ということになる。その裏では、信長は父の仇ということになるわけだ。そのことは信長もお市も知っていた。だが、お市はずっと信長を慕っていた。

そのこともあって信長はお市を妻にはできなかった。

永禄十年のこの年に、信長は近江の浅井長政と同盟を結ぶ。このときお市を妹として、長政に嫁がせる。

天下平定の道はまだ遠い。少しずつ追い込んでいかなければならない。合戦に飽きてはならない。

近江の六角の臣永原重康を裏切らせて味方にする。少しずつ切り取っていくのだ。

永禄十一年九月――。

尾張、美濃、伊勢、三河の軍勢六万をひきいて美濃平尾に着く。むかし、大軍だった今川義元の二万に比べると三倍である。これだけの軍をいまは動かせるのだ。

箕作城を陥し、六角承禎父子は、観音寺城を捨て伊賀に敗走した。

将軍義秋は名を変えて義昭となる。

義昭を奉じて京に向かう。義昭はその恩に報いようと、信長に副将軍と管領職を与えようとするが信長は辞退する。信長の目的は副将軍ではなかった。

その上をめざすには、将軍義昭を追わなければならない。義昭には軍などというものはない。いつまでも将軍の座に坐らしておくわけにはいかない。

兵を持たない将軍などというものは、ただの人形にすぎないのだ。義昭の兄義輝は松永弾正に討たれた。



# 七章　公卿の娘

## 一

信長の居城、岐阜城は、斎藤道三、義竜の稲葉山城である。

永禄十一年のころ、信長は岐阜城と京の間を行ったり来たりしていた。京にいる期間も長かったりする。

ある日、老婆が美しい娘を連れてやって来た。公卿の娘で尚子という体つきが細かったが美しかった。このとき二十歳だという。老婆は尚子を売りに来たのだ。いつの時代もそうだが公卿は格式ばかり高くて、貧乏だった。

信長は尚子と対面した。ひどく若そうに見えたが、二十歳だという。一度、公卿の息子と祝言をあげて夫婦になったが、あまりの貧乏にいやになって、別れて実家に帰ったと聞いて、信長も納得した。どうかしたときの表情は十五、六に見えた。生娘はいやだったのだ。生娘は帰蝶とお市だけでたくさんだった。

顔が小さくて丸く、首が長い、美人の条件である。体つきも細いが、後家と聞いて、その気になった。肌も白くてなめらかそうだ。

「もう、貧乏な暮らしはいやです」

と言った。そのとおりだ。美女は豊かに暮らす権利がある。だが、信長はこの尚子を十日ばかり放っておいた。

信長は堺に目をつけた。堺は貿易の町である。豊かな町でもある。それで一万貫の軍資金を要求した。

堺の町ではこれを拒否したばかりでなく、浪人を集めて防備を固めた。それに対して信長は、

「堺の町を一軒残らず焼き払い、一人残らず殺せ」

と命じた。一万や二万の浪人を集めてみたって信長に勝てるわけはない。みな殺しにするというのも嘘ではないだろう。信長ならやりかねない。女子供だって殺してしまう。

堺の人たちは震え上がった。堺の代表として薬種商の今井宗久が高槻芥川城に入った信長を訪れた。宗久は茶器を持って来た。このころ信長の茶道好みは世に知られていた。

「礼を失しましたること、お詫び申しあげます」

と両手をつき、頭を下げた。信長の目の光、尋常ではなかった。信長に抗していたら堺の町はなくなっていただろう。



「そなた、鉄砲を作りおるとはまことか」

「いま、試しております」

「煙硝（えんしょう）の手当てはどうしておる」

「薬種を商いおりますれば、南蛮に道はあります」

鉄砲には煙硝が必要である。この煙硝は日本では取れない。マカオあたりから輸入することになる。宗久は薬種を輸入している。だから煙硝とのつながりもあるのだ。

「そのすべて、信長が使うものと心得よ」

これからの合戦には鉄砲が必要である。鉄砲があれば武田の騎馬隊もこわくはない。だから堺の鉄砲を一手に引き受けた。他の武将たちには一丁も売ってはならぬ、と命じた。

芥川城から京にもどった。公卿の娘尚子には、家を一軒、買い与えてあった。そこに通うことになる。女二人が尚子の世話をするためについている。

信長はその家に行く。五人の近侍がついていた。別に剣士の源五郎丸十蔵がついている。湯に入って尚子を迎える。ひっそりとした姿がよかった。

公卿の娘だけに、品性もあった。

「ありがとうございました」

と手をつく。尚子の実家には相当の金を渡しておいたのである。

信長は湯に入って体を洗った。女を抱く前に入る湯というのは悪くない。それもはじめて抱く女である。

尚子は公卿の娘で品位もあった。祝言を挙げた男がいた、ということだから、まぐわいには馴れている。どの程度にまで淫らになれるかである。

湯から上がって部屋に入る。湯上がりで体が熱かった。衿を開いて団扇で胸に空気を入れる。尚子と一緒に風呂に入ればよかったな、と思う。もっとも湯場はそれほど広くなかった。

尚子が湯上がりの姿で入って来た。体は細いが、姿はよかった。信長が酒をのまないことは知っている。酒をのまない男は、女にしてはあつかいにくいことだろう。

抱き寄せて、いきなり、尻を撫でた。アッ、と声をあげた。そして布の上から尻を摑み揉む。小さいが女の尻である。肉はついている。

尚子の体をうつ伏せにして湯帷子の裾をめくり上げて、尻をむき出しにした。また、アッ、と声をあげた。その尻を撫で回し、そして摑む。肉はいくらか冷めたく柔らかだった。

京の女だけに肌は白い。

そのむかし、足利尊氏が朝鮮の兵を十万ほど連れて来た。その兵たちが京に住みついた。男たちばかりだったが、その兵たちが京の女たちと夫婦になった。その生まれた娘たちはたいてい美しかった。その娘たちが京の男と夫婦になる。



それが何代か続き、京の町には美女がふえてきた。女も種次第ということかもしれない。もっとも公卿の女たちは品位があって美しかった。公卿が手をつける女もいたのだ。

信長は尻を両手で摑んで溝を分けた。そこに茶色い小さな菊の花が咲いていた。その菊の花をなぞる。

「いやー」

と声をあげて仰向けになった。

「いやか、別れた亭主はこのようなことはしていなかったか」

と信長は笑った。

衿を開いた。乳房は膨らんでいた。それほど大きくなかったが、体に似合った大きさだった。肌は白いし、柔らかくもある。二十歳にしては乳房は柔らかだった。

乳首は紅い。後家だからだ。はじめのころのお市の乳首は桜色をして小さかった。

白い肌に紅い乳首は似合った。くびれもちゃんとある。男に揉まれた乳首だろう。

乳房も同じだ。体もまたよくなれているのに違いない。

乳首を摘んでひねると、あー、と声をあげた。感度も充分なのだろう。乳首を指の股に挟んで乳房を揉む。乳首が堅くなってきた。色も鮮やかになる。

「わしは忙しい」

「存じております」

忙しい体というのか、そこは聞かなかった。忙しいという言い方にはいろいろと意味がある。

湯帷子の腰紐を解いた。前を開いて肌をさらす。そのときも、アッ、と声をあげた。

細腰から腰の線もなだらかで美しかった。腿にも肉はたっぷりとついていた。女は腰と腿には肉をつけるものらしい。

恥骨をおおう茂りは薄かった。申しわけ程度に生えている。特にこの部分を土堤という。土堤は高かった。腿を撫で内腿に手をやる。

尚子は、手を男の股間に入れてきた。そして一物を手にした。ふふっと笑った。一物は怒張していた。それを笑ったのか。

「内裏も公方も、気にすることはない。みんなわしの支配下にある」

と広言した。

正親町天皇は、信長に副将軍の職を受けよと申された。義昭もそう言った。だが、信長はそれを無視した。

義昭の下につくのがいやだったというのではない。義昭を無視していた。

副将軍になれば義昭が主人ということになり、義昭の命令もきかなければならない。

何の力もない将軍の下につくことはなかった。その代わりに将軍はわしの支配下にあるとい



い、義昭の上に立った。そのうち義昭が怒り出すだろう。

将軍だからだ。信長は怒り出すのを待っていた。

義昭は名ばかりでも将軍である。信長のほうから手を出すわけにはいかない。義昭が手を出すのを待っていたのだ。

尚子は信長の一物を握った。手を上下させる。一物を握るのは抵抗なかったようだ。もちろん別れた亭主によってこれくらいのことは馴れていたのだ。

まぐわいのときには男への奉仕というのではなく、一物を手にし口にするのは、その経過として当然のことだった。一物を壺に迎えるのと同じ気持ちだった。

尚子は、股間に顔を埋めてきた。尖端に舌を這わせる。ちろちろと舐める。舌はよく動いた。そして尖端を口に咥える。そして丸い尖端を引っぱるようにする。手でふぐりを包み込む。一物を根元まで呑み込む。ふぐりを包んだ手の指をのばして蟻の戸渡りに這わせる。

一物を愛撫するのには馴れていた。一物を口にしたまま、男の内腿を撫でまわす。なるほどと思った。男には馴れている。信長にとってもこのほうがよい。

信長は尚子の腰を引き寄せた。そして裾をめくり上げる。白い尻があらわになった。尻も見る角度によって違うものだ。いやーっと言って尻を振る。女としては一番恥ずかしい角度かもしれぬ。

尻が逃げようとしたが許さなかった。上品な公卿の世界では、このような下卑たことはしないのか。

溝の奥に鈍く光ったものが見える。

切れ込みが濡れているのだ。そこへ手をのばし、指をのばした。

「いやーっ」

と言って尻を振った。男と女はどれだけ淫らになれるかである。それによって、つまるかつまらないかが決まる。

指を切れ込みの中に入れた。そこに指を遊ばせる。尚子だってこのようなことが嫌いなわけではないのだ。

指をのばすと肉の芽に触れる。アッ、と声をあげ、尻をくねらせる。くねらせるから淫らなのだ。女がこれで尻をくねらせなければ、抱く価値のない女である。

尻をくねらせるさまが、いかにも淫らであった。淫らであることが女の魅力である。指を折ると壺の中に入った。

その中も熱く潤んでいた。

あるいは尚子は別れた亭主にはこのようなこと、されたことがないのかもしれない。指で壺口をなぞる。壺口が強く締まっているのがよくわかる。



女というのは表だけではそのよさはわからない。裏からも眺めてみるべきだろう。よく濡れる体なのか。露が指に絡みついてくる。粘りも充分だった。

将軍義昭の不満が高まっているという噂は、信長の耳にも入っていた。将軍という矜りもあるのだろう。

義昭は、信長が副将軍になってくれていたら、何もかもうまくいっていたのに、と思ったのだろう。だが、義昭には信長に挑戦する力はない。各地の武将を集めて、反信長勢を作るつもりなのか。反信長勢にどのような武将が集まるのか楽しみである。

尚子は顔を上げた。そして信長の腰にまたがってくる。またがっておいて、一物を手にし尖端を自分の肉の芽に押しつけてくる。

「この女もか」

と思った。男に馴れた女はたいていこれをやる。一物を口にしたとき、尖端に乳首を押しつけてくる女もいる。尖端は丸くつるんとしていて弾力がある。その感触がいいのだろう。

尖端を押しつけ手を震わせながら、のけ反り、尻を回す。それからおもむろに尖端を壺口に移動させる。そして一物を呑み込み、腰を振る。

しがみついてきて腰だけを回し、しゃくり上げる。しきりに声をあげていた。下から突き上げてやる。その度に声をあげる。女の尻を両手で摑んでいた。手の中でしきりに尻が動いてい

る。

尖端に襞が絡みついてくる。信長は体を起こした。座位である。そこから本馬に入る。尚子の背中を夜具に押しつける。とたんにしがみついて、悲鳴をあげた。

「気がいきます」

と声をあげ、激しく腰をゆさぶり、気をやった。休みを与えずにゆっくり抜き差ししてやる。尚子はまたしがみついてきて、体をゆする。そして次々に気をやる。その辺が男とは全く異なるところである。

「どうしてこんなにいくのやろ」

と泣きそうな声で言う。こんなに気をやったのははじめてなのか。信長はゆっくりと抜き差しを早めていく。

「腰の骨が外れる」

と声をあげ、

「いつまでいくのやろ」

と泣き声で言う。

信長はしたたかに放出した。そのとたんにも、ヒーッと叫んで気をやった。ぐったりと体をのばした。壺の中で一物は小さくなっていく。



それが抜けようとすると、いやーっ、出ないで、と声をあげる。体を放すと尚子は股間にさらしのようなものを当てた。壺の中の液を吸い取らせるためだろう。

尚子は、萎えた一物を舐めた。ぬめりを舐め取った。そして胸に顔を埋めてきた。

「こんなによかったの、はじめてです」

と言った。亭主はこれほどにはしなかったのだろう。あるいは尚子が亭主と別れたのは貧乏だったからだけではなく、亭主は尚子を満足させられなかったのかもしれない。

満足させてくれれば、女は亭主のもとを逃げ出すようなことはしないものだと思う。

「信長さまはお上手なんですね」

「上手か、女をたのしむには、これくらいはしなければな」

「わたし、信長さまから離れられなくなります」

「さっき言うた。わしは忙しい体だ。いつも抱いてやれるというわけにはいかない」

尚子は一物に手をのばした。力のないものを指先でもて遊ぶ。

## 二

信長の態度に、実権のない将軍義昭は怒る。副将軍を信長は拒んだ。そればかりか、義昭は

自分の支配下にあるという。

義昭の将軍としての矜りは傷つけられる。だが、自分に力はない。だが反信長勢というのはいる。その者たちに密書を送った。

その要求に応えたのが、甲斐の武田信玄、越前の朝倉義景、近江の浅井長政、三好長逸ら三好三人衆、大坂の石山本願寺の顕如が連合した。

信長は目を細めた。細い目の中で目玉が光っている。みんないざとなれば裏切る。武田信玄もそうだが、何よりも浅井長政が憎い。お市を嫁にやったのだ。

この中で大敵は武田信玄である。もちろん将軍義昭の命令だが、信玄は義昭のために立ち上がったのではない。天下を取るためだ。

信玄が、信長と徳川家康を討って上洛すれば、義昭は将軍の座を追われることになる。どっちにしても義昭は安泰ではなかった。

だが、とりあえずは信長を討ちたかった。信玄に将軍の座を奪われるにしてもだ。

「おのれ、信長」

と義昭は顔を赤くしたり青くしたり。将軍とは名ばかりである。兄の義輝は松永弾正に討たれている。義昭だって誰に討たれるかわからないのだ。

信長をおのれの下につかせる人徳もなかった。地方の武将を動かせるだけの威力はあると思



っていた。

どちらにしても、義昭は何もしないわけにはいかなかったのだ。どっちに転んでも得することはなかった。

元亀元年（一五七〇）――。

六月二十八日、江北の姉川を挟んで、織田・徳川軍二万九千と、朝倉・浅井連合軍一万八千が対峙した。

これを姉川の合戦という。激戦であった。五、六時間を戦い朝倉・浅井軍は敗走する。この合戦を、信長は義昭に報告した。ざまあみろという気持ちだったろう。

この秋、信長は石山本願寺の顕如に多額の軍資金を要求した。その上に本願寺の明け渡しと焼却を命じた。顕如はこのために、各地の一向宗門徒に挙兵を命じた。

のちのことだが、徳川家康は、本願寺の勢力を怖れ、西本願寺と東本願寺に分けた。勢力を削ごうとしたのだ。

いま、京都で西本願寺と東本願寺は隣り合わせにある。奇妙なことである。幕末には新撰組が、西本願寺を屯所にしている。

当時は、本願寺が一大勢力だった。信長はこれが気にいらなかった。これまでは、誰も本願寺には手をつけられなかった。そのために僧兵たちは横暴で傲慢だった。

それに加えて、信長は別所から出て来た神道派である。そのために仏教徒を憎んでいた。足利家も、尊氏から二、三代目までは、源氏の系で神道派だったのが、そのうち仏教徒に変わってしまった。

信長が、義昭を認めないのも、その辺に理由があった。義昭が石山本願寺に頼めたのも、事情はその辺にあった。

元亀二年九月十二日――。

信長は、延暦寺の僧徒が、朝倉・浅井軍を助けたということで、比叡山の焼き討ちを命じた。

比叡山の僧兵たちは、堕落しきっていた。

女はさらってくる。食糧は奪ってくる。そして威張っていた。

信長は、以前から仏教徒に怒りを覚えていた。

仏教の信者としておとなしくしていればいいものを、僧侶をつのり、威を張った。たしかに一大勢力になるのだ。

略奪は平気で行うし、女たちをさらって来る。そしてごろつきのような暮らしをしている。

それでいて石山本願寺とつながっている。

信長軍は、比叡山に向かって攻め上る。たちまち激戦になる。山の上から迎え討つのが有利のように思えるが、実際には下から攻め上るほうが有利である。



僧侶たちは次々に殺されていく。この比叡山焼き討ちを好まない者が信長軍の中に一人いた。羽柴秀吉である。秀吉は百姓の出で仏教徒だった。

だが、秀吉はそのようなことは顔にも出さない。

たちまち、根本中堂をはじめ、全山の堂塔伽藍、仏像、経巻のほとんどが焼けて灰になった。

殺された僧侶や信者たちは数千人にも達し、死骸が谷に埋まり、山をおおった。

そのために、信長は仏教の信者たちに〝仏敵〟とよばれ〝天魔〟と憎悪される。だが、信長には罪悪感などなかった。

仏徒は神徒の敵である。

ただ、敵を討っただけのことだ。信長にはふつうの合戦とたいして変わりはなかったのだ。

今回の合戦には憎しみがあった。仏教徒に対する憎悪である。信長が僧侶を殺すわけではないが、部将たちへの命令は激しかった。

信長が気にしているのは武田信玄の動きである。信玄は大敵である。これまでにはしきりに手紙を出して慰撫してきた。

いざとなれば、そんなものは効果がない。お市を嫁にやった浅井長政でさえ、信長を裏切る

のだ。

武田勢が押し寄せて来れば、それを防ぎきれるかどうか。今川義元が押し寄せて来たときも同じだった。

信玄は、京をめざしている。義元も同じだった。義元は桶狭間で首をとった。あのときのようにはいかない。

信玄の騎馬武者は、天下に並ぶ者なしと言われている。

もちろん、細作（さいさく）は甲府に送り込んである。信玄が動き出せば、すぐに知らせが来る。もちろん、将軍義昭の要請である。

要請ではあるが、信玄は義昭など相手にしていない。天下を握るために京にやって来るのだ。目的は今川義元と同じである。信玄としても、信長を倒さなければ天下は取れない。信長さえ殺せば、他の武将たちは抵抗ができなくなる。

信玄の膝下につくしかなくなる。いまは信長にとって信玄は最も怖ろしい相手だった。それに加えて、信長が神道派であるのに対して信玄は仏教徒である。僧の位ももっている。

法衣の下から鎧がちらり、という言い方は信玄のことを言う。信長は若いころから、信玄だけにはかなわない、と思っていた。

ついで言っておけば、信玄の敵である上杉謙信は神道派である。信長とは同盟していた。謙



信の力も借りなければならない。

信長があてにしている武将に徳川家康がいる。家康もまた神道派である。神道派と仏教徒はあい入れないものがある。

戦国時代というのは仏教徒と神道派の戦いでもあったのだ。だから、信長は一向宗徒をけんめいに殺すことになる。

## 三

二条衣棚（ころもだな）の妙覚寺が、信長の京での宿舎になっていた。

尚子のことについて知らせる者があった。近侍の橋田七郎が、その者を信長の前に連れて来た。

その男は貧乏公卿の一人だった。信長に褒美をもらいたくて来たのだ。

「上さまのおいでにならないときには、尚子さま、若い公卿を五、六人も集めて、酒宴を張っておいでになります」

「ふむっ」

と息をついて、目を光らせた。信長がこういう目つきをするときは、ただでは収まらないと

きである。

「そのほうは、なぜ酒宴のことを知っておる」

「わたしも、酒宴に加わった一人です」

「なるほど、それだけか」

「尚子さま、公卿の方々とまぐわうこともあるとか」

「そのほうは尚子を抱いたのか」

「いいえ、そのようなことは」

「七郎、この者を斬れ」

公卿はびっくり仰天した。そんなつもりではなかった。褒美をせしめようと思って来たのだ。その根性がいやしかった。

あるいは、尚子のもとに集まる公卿たちに仲間外れにされたのだろう。それで信長のところに密告に来た。

「お助け」

と叫んで逃げ出した。この男は信長がどういう男かを知らなかったのだ。

男の前に立ったのは源五郎丸十蔵だった。十蔵は信長を見た。信長は頷く。十蔵は左足を後ろに引くと、抜き討ちに男の首根を斬った。男は目を剝いた。そのときには死んでいた。



血が噴き出した。左の首筋から斜めに刀は一尺も斬り裂いていた。裏切り者だったのだ。信長は裏切り者が嫌いだった。

武将の家臣が裏切って信長に密告して来る。その者が役立つ者であれば恩賞を与える。役に立たないと思えば斬る。

「どうなされますか」

「酒をのんでいるのか」

貧乏公卿に酒をのむ金があるわけはない。尚子が自分で酒を買って、公卿たちを呼ぶのだろう。

若い公卿はよろこんで集まって来る。信長が尚子に与えた金である。公卿の中の何人かが尚子を抱いていたのだろう。

「今宵、何人集まるのか見張っておれ」

「わかりました」

去っていく。廊下から去ろうとして、信長は足を止めた。

「十蔵、女は欲しいか」

「はい、男ですから」

「よい、お尚をおまえにやろう。よい女だ」

「もったいのうございます」
「お尚はいらんか」
「いえ、いただきます」
「知らせがあったら、お尚の家に行ってみる。そのほうもついて来い」
「わかりました」
尚子というのは、もともとそういう女だったのかもしれない。亭主一人では足りずに、他の男まで求めていた。
それで離縁されたのか。尚子は信長を裏切っている。女が亭主以外の男とまぐわうのはよい。だが、尚子は信長に買われた女である。それで尚子の両親も潤おっておる。もっとも、京ではおのれの娘で食っている男は多い。
信長は、武田信玄の動きに神経を尖らせていた。将軍・足利義昭が、反信長勢を作っている。浅井長政、朝倉義景、石山本願寺などが反信長勢になっている。だが、武田信玄はまだ動かない。
そういうときに尚子の問題が出た。小さなことである。だが、信長はカチンときた。貧乏公卿たちに酒をのませるために尚子を囲っているのではない。
尚子は信長を待ってひっそりしていなければならないのだ。それなのに尚子は、公卿たちと



酒宴を張り、その上に肌淋しさから、公卿を名指して抱かれているという。
信長は寛大な男ではなかった。
「いま、五人の公卿が集まっております。まだ集まるかもしれません」
と近侍が知らせてくる。
「出かけよう」
と言った。五人の近侍と十蔵がついて来る。信長は尚子を抱くときには、先に使いを出しておく。風呂の用意などあるからだ。それで尚子も安心している。使いが来なければ、信長は来ないのだ。そのことは公卿たちも知っている。だから心おきなく呑めるのだ。
二条通りへ出て町を歩く。尚子の妾宅は四条通りにあった。庭つきの家である。尚子の世話をさせるために二人の女も置いてある。この女たちも、尚子のやっていることを信長に知らせようとしない。尚子に言われるままに公卿の酒の用意をしている。
この女二人も許せない。信長は酒をのまない。だから妾宅には酒はないはずだった。家の中に酒徳利がいくつかあったのを思い出した。そのときには気にもしなかった。いま、それが公卿たちに呑ませる酒だったことがわかった。
おのれ、と激怒することはない。静かに怒るのだ。目が細くなる。その細い瞼の中の目玉は光っていた。

尚子も公卿も、信長という男を知らなかった。知っていれば、酒宴を張ることなどしなかったろう。尚子も公卿たちに抱かれることはなかった。彼女は自由奔放な女だったのだ。奔放さゆえに婚家を追われたのだろう。

むつみ合うにはこんな女のほうが面白い。だが、尚子は自分が買った女だ。自分のためだけに奉仕する女でなければならなかった。

信長は土足のまま、妾宅に入った。七人の公卿が輪になって酒を呑み、高い声で語り合っていた。信長の姿には気付かない。気付くまで信長は黙って立っていた。

尚子は輪の一端に坐って、公卿の酌を受けて酒を呑んでいる。お姫さま気取りだ。

「おい、おまえは何者だ。土足で上がるとは礼を知らぬ者め」

気付いた公卿が叫んだ。

「わしは上総介だ」

「信長さま」

と尚子が声をあげた。

信長さまと聞いて、公卿たちはあわてた。

「この方たちには、いま帰ってもらいます」

公卿たちは、こそこそと逃げ出す。信長はそれを止めようとはしなかった。もっとも逃げら



れるわけはない。表には五人の近侍と十蔵がいる。

「酒を呑んで悪いことではないでしょう。あの方たちは、わたしの友だちです。何もやましいことはしておりません」

「おまえたちのことを密告して来た男がいた。おまえは、夜、男を換えて楽しんでいるそうだな」

「そのようなことはございません。中傷でございます」

「その男はおまえたちの仲間であった。褒美が欲しかったのであろうが斬り捨てた」

「わたしは淋しかったのです。あなたさまがあまりにおいでにならないものだから」

「それは、はじめに言っておいた。わしは忙しい体だとな」

「わたしは生きているのでございます。生身の体です。あなたさまにとやかく言われることはございませぬ」

尚子は開き直っていた。まさか殺されることはあるまい、と思っている。

お払い箱になれば、それでもいいと覚悟しているのだ。

七人の公卿たちは逃げ去った。それで安心もしたのだろう。

「お暇をいただきます」

それで済むと思っている。ただの男ならばそれですんでいたかもしれない。

あるいは尚子に未練があれば、男は、許す、と言うだろう。尚子はそのつもりであった。

「そういうわけにはいかん」

「なぜでございます。わたしの体を欲しがる男は、あなたさまだけではございません」

「なかなかの自信だな」

「去らせていただきます」

尚子は信長のそばをすり抜けて家を出ようとする。その襟首を摑んで引きもどした。尚子は転んだ。白い足をさらした。

「何をなされます」

と叫んだ。

「十蔵」

と声をあげた。とたんに障子が開けられた。庭に七人の公卿が縛りあげられていたのだ。尚子が逃げたと思った公卿たちである。

「アッ」

と尚子は声をあげた。だが、まだ信長の意図がわかっていない。公卿たちもせいぜい叩かれるくらいだろうと思っている。だから、ふてくされている。

「十蔵やれ」



と信長が言う。はっ、と十蔵は庭にとび降りると刀を抜いた。公卿たちがハッとなる。十蔵は刀を振り上げた。そして手近の公卿の首あたりを一閃した。

尚子は目を剝いた。公卿の白い首筋に赤い糸が浮いた。その糸が少しずつ太くなっていく。尚子も公卿たちも、息をつめて、それをじっと見ていた。

首が動いた。右へ左へと、どちらへ転がり落ちようかと迷っている様子だった。首筋から、一気に血が噴き出した。

「キャーッ」

と尚子が叫んだ。首は一転二転してそこに収まった。

「お、お助け」

と公卿が叫んだ。ふてくされた顔はなかった。みな青ざめ、顔をこわばらせていた。まさか首を刎ねられるとは思っていない。それを十蔵は無造作に斬った。腕は冴えていた。刀もよく切れた。

首を失った首根から、ふつふつと煮えるように血が湧き出している。噴出したのは一瞬だった。

首を失っても心臓はまだ動いていたのだ。

残った公卿たちは、叫び声をあげて逃げ出した。縛られているのは両腕だけだ。立ち上がっ

て走る。その足を払われて転がる。近侍に殴られてひっくり返る。
「わらわは、殺されるような悪いことはしておりません」
「よいか、おまえたちは、わしの酒を盗んで呑んだ。泥棒だ。またわしの女を抱いた。これも泥棒だな。泥棒は処罰しなければならん。まだ尚子を抱いていない者がおれば、運が悪かった、というしかないな。罪というのはな一蓮托生(いちれんたくしょう)だ」
信長が顎をしゃくった。
十蔵が二人目の公卿の首を刎(は)ねた。その首は三間ほども飛んだ。首をとばす斬り方というのもあるのだ。
「ヒーッ」
と尚子が叫んだ。一呼吸あって首筋から血が噴き上がった。一噴きして、血は流れ出す。
お助け、お助け、と公卿たちが叫ぶ。
「お止め下され、お願いでございます」
と尚子は信長の足にしがみつく。
「わたしが悪うございました。お許し下さいませ」
と叫び声をあげる。
十蔵は三人目を斬った。逃げようとした。そのためか、刀は首には入らなかった。左耳上から斜めに斬った。顔が半分滑り落ちた。鼻と唇が残った。両眼をつけた顔の上半分が地面に転がった。髷を地面につけていた。



血は噴き出さなかった。動脈はないのだ。血はチロチロと流れ出す。心臓は頭半分を失ったことを知らない。心臓はまだ働いているのだ。
二人の女中は抱き合って震えていた。
「お許し下さいませ。お許し下さいませ」
と尚子は叫ぶ。信長の怖ろしさを知ったのだ。知るのが遅かった。
十蔵は、片膝ついて四人目を雁金に斬り下げた。公卿の体がぶるぶると震えた。左肩から腹まで一尺四、五寸も斬り下げた。
左肩が、左腕の重さで開いた。左肩が急に広くなったように見えた。着物の肩がめくれた。白い肌をさらした。その肌がパックリロを開いていた。肌よりも白い肉が見えた。
鎖骨が白い豆粒のように見えた。肉は裂かれると収縮する、骨は縮まないから突き出てくるわけだ。次に肋骨が一つ、二つと出てくる。空洞があった。肺である。
五人目は立ち上がった。その胴を薙いだ。公卿の顔は強ばる。上半身がぐらりと揺れた。上半身が傾き、頭から地面に落ちた。上半身と下半身を両断したのだ。腹の中からぞろりと腸(はらわた)が流れ出した。白い腸が血に染まるのはそれから一呼吸あった。

六人目は頭を薙いだ。髷をつけた鉢が皿となって飛んだのだ。とんだ皿は立木にペタリと貼りついた。残った頭に湯豆腐のようなものが動いた。公卿がよろめく。湯豆腐がぞろりと動き、ぞろりとぶら下がった。公卿はそのまま、前にドウと倒れた。

五人の近侍たちは眉をひそめて公卿たちを見ていた。

尚子は着物を脱いで裸になった。狂ったのだ。美しい裸身だった。ケラケラと笑いだした。このようなむごい光景は見たことがない。尚子は狂うしかなかったのだ。七人目を斬った十蔵は座敷に上がって来た。

「それがしにいただけるとはこの女でござるか」

「好きにいたせ」

十蔵は、裸の尚子を庭に引っぱり出すと、無造作に首を刎ねた。首は転がった。顔は口を開いて笑っていた。

「もったいないことを」

信長は笑った。尚子のためには首を刎ねてやるのが一番よかったのだ。



# 八章　側妾お鍋

## 一

信長は岐阜城にいた。岐阜城は長良川の清流を足下にして、濃尾平野をのぞむ位置にある。

この岐阜城に女と男がやって来た。男は女の家来だった。女は信長に目通りを願った。女はやつれ汚れていた。

女は八尾城主小倉右京亮実澄の妻と名乗った。小倉実澄は、信長に味方した。そのために蒲生に攻められて落城し、実澄は自害し、二人の子供は日野城に連れ去られてしまった。その二人の子供を助けてくれ、と言うのだ。

やつれてはいるが、その顔の美しさを信長は見逃さなかった。

「そなたが右京どののご内室であったか。今度は、右京にもそなたにも相すまぬことをしたな。許せよ」

と優しい声をかけた。女はその言葉にがっくり肩を落とした。信長の噂は聞いている。京で

七人の公卿と女を斬ったことは知られていた。むごい男なのだ。女は緊張していた。その緊張が解けて、体から力が抜けたのだろう。

「ご子息は助け出そう。疲れているとみえる。ゆっくりと休むがよい」

信長は、この女にお鍋と名をつけた。もちろん、名はあったのだろうが、記録にその名はない。

お鍋は、近江国野洲郡北里村の郷士、高畑源十郎の四女として生まれた。

お鍋の婚家小倉家は、鎌倉時代から近江愛智(えち)郡の八風街道沿いに勢力を張る豪族であった。実澄はその本家の当主として山上村に八尾城を構えた。

彼女は実澄との間に、甚五郎、松千代の二人の子供を産んだ。

秋たけなわのころ、信長は、尾張、美濃、北伊勢、それに徳川家康の軍を加えた総勢六万の兵をひきいて近江攻略へと向かった。

このとき六角は逃亡したが、多くの諸将が信長に下った。そのとき蒲生賢秀もいた。賢秀は、十三歳になる嫡男氏郷を人質として岐阜城に送った。このときお鍋の息子二人も救出されたのである。

信長は岐阜へはもどらず上洛する。このときに高野の地に舘を建ててお鍋に与えた。ここに実澄の家臣たちも集まった。奥政景、山田蔵人、山田中務、林縫之助、図書越後などである。



岐阜城にお鍋についていったのは、図書越後だった。小倉家は再興できたのである。二人の子供も信長の家臣となり、一人は本能寺の変で死ぬことになる。

奥政景は、信長に仕えて侍大将になっている。政景はお鍋に、信長の側室になるようにすすめた。

お鍋の生きる道としては、信長の側室になることが最良だったのである。

お鍋は岐阜城の城下の舘に住み、二人の息子は高野の館に残された。

お鍋は、信長の一妻六妾といわれる六妾の中の一人である。一番目の側妾は生駒吉乃である。お鍋はその次の妾になる。吉乃は三人目の五徳姫を産み、産後のひだちが悪く他界した。

そのあとに寵されたお鍋は本能寺以後も生きていて、豊臣秀吉に仕えている。

お鍋は秀吉の側室であったという。まだ色香を保っていたのだろう。秀吉の好みは、高貴で若い美女だった。特に手入らず（処女）の女を好んだ。

秀吉がお鍋を側室にしたのは、信長の側室だったからだろう。

お鍋は子供を二人産んだ未亡人としては若かった。若いが、子供二人を産んでいるのである。

信長は岐阜城に帰って来た。お鍋のことが楽しみでもあった。生駒吉乃は死んでいる。公卿の娘尚子は気に入らずに斬った。吉乃のあとを埋める女がいない。

信長は帰蝶のあと、妻はめとらなかった。妻とは一体何なのか。斎藤道三は信長を認めてい

たが、帰蝶は信長を認めていなかった。女にはなりきれなかったのだ。

城下のお鍋の舘に足を運んだ。十蔵と五人の近侍が同行する。前もって連絡してあったので、お鍋は風呂をわかして待っていた。

お鍋にしてみれば、信長は二人目の男になる。一人目はもと亭主の小倉実澄である。仲むつまじかったという。

信長が自分を求めているという。二人の子供を助けてくれた恩人でもある。信長が特に好きだったというのではない。当時の女たちはたいていは男のものであった。

だから当時の女には名前がなかった。ただだれそれの女である。名のある女人たちだけに名前があった。妙な言い方だが、そう言うしかない。

信長は湯殿に入った。湯を浴び湯船に入る。お鍋は出て来なかった。侍女が背中を流した。こうしてゆっくりと風呂にひたるのも久しぶりのことだった。

湯殿の外には十蔵がひかえている。いつもそばを離れない。信長を護衛することだけが仕事だった。岐阜城下だと言っても安心はできないのだ。

暗殺団は城内までだって入ってくる。舘は防備の薄いところである。もっとも、信長が作らせた舘である。仕掛けはあちこちに作ってあった。

寝間もまた特別の作りになっていた。三方が壁である。一方にくぐる場所が作られている。



寝室に入ってしまえば、そこからしか出入りができない。一カ所を守れば、敵は入れない。敵を持つ武将たちの寝所はたいていこんなものであった。隙間がなければ蒸れてしまう。もちろん風通しの隙間は作られてあった。

寝間に入る。お鍋は夜具のそばに坐っていた。油灯の灯りがゆれていた。麻の湯帷子を着ていた。

「こちらへ参れ」

お鍋は小さくなっていた。二人の子を産んでも、彼女にははじめての男である。知っている男といえば実澄一人である。

夜具の上にあがらせておいて、抱き寄せた。そして背中を撫でる。快い肉付きであった。

「ありがとうございました」

「何のお礼だ」

「二人の子供を助けていただきました」

そのお礼に抱かれるのだ、と言いたいらしい。自分にそのように弁解しているのだ。

衿から手を入れて、乳房を手に包み込んだ。お鍋は生娘のように体を堅くしていた。乳房は量感があり、柔らかだった。手に乳首が触れた。子供たちの口に吸われた乳首だろう。

乳房を揉み上げる。

「あーっ」

と熱い息を吐いた。しばらく揉んでいると乳首がしこってきた。感じてはいるのだ。乳首を指に摘んでひねる。アッ、と声をあげる。

夫実澄が死んでからかなりの時間が経っている。肌に男の手が触れてくるのは久しぶりのことである。

従妹のお市を近江の浅井長政の嫁にやっていた。信長の妹としてである。その淋しさもあった。お市は美しかった。もったいないと思ったが、いつまでも自分のそばに置いておくわけにはいかなかったのだ。

また、浅井長政を味方にしておきたかった。そのためにお市をやったのだ。

お鍋の体を仰向けにすると、衿を開いた。まだ若いのに、乳房は外へ崩れた。弾力がなくなっているのだ。小倉実澄との仲がむつまじかったことがよくわかる。二人の子が吸った乳でもある。

乳房を揉み上げる。帷子の腰紐を解いた。そして前を開いた。白い肌があらわになった。充分に美しいが、お市には及ばなかった。お市の肌は透き通るようであった。

お市にのめり込みすぎると、戦ができなくなる。美しすぎるというのはよくないことだった。男心を迷わす。もちろん、女に迷うような信長ではなかったのだが。



お鍋の体を眺めながら肌を撫でる。なにもお市や生駒吉乃と比べているわけではなかった。腰を撫でる。腿に手を這わせる。お鍋の体を横にして尻に手をのばした。あまり横に拡がらない尻である。

「恥ずかしい」

と言った。腰が動いた。そのさまが妖しい。信長はお鍋の手をとって股間に押しつけた。そのまま手はじっと動かなかった。一物は手の下でひくひくとしている。お鍋はついに一物を握った。指を這わせる。一物に触れるのは久しぶりのはずだった。一物を手にしてまた、

「恥ずかしい」

と言った。一物の感触が恥ずかしいのか。腿の間に膝をねじ込んだ。その膝を腿が閉めつけてくる。はざまに手を滑り込ませる。女のはざまの感触はよいものだ。たいして変わらないのだろうに、女によって違うような気がするのだ。

男にとっては違って欲しいのだ。同じものではつまらない。はざまを上下に撫でる。のっぺりと何もないのが不思議な気がする。

切れ込みを指で開く。アッ、と声をあげた。腿を閉じようとするが、男の膝がじゃまで閉じられない。そこは薄く潤んでいた。そこに指を這わせる。腰が動いた。

指を壺の中に押し込む。そこでも声をあげた。指を躍らせる。腰がくねる。壺口をなぞる。

声をあげて更に腰をくねらせる。

次第に露がにじみ出てくる。その気になってきたのだ。

腿を開いたり閉じたりする。しきりにせつながる。指の動きがよくなる。腰を弾ませる。

露に濡れた指を切れ込みに這わせ、肉の芽を撫であげる。ヒーッと声をあげた。信長は体を起こし、開かれた腿の間に腰を割り込ませる。

お鍋は手にした一物を壺口に当てる。そこで手を放す。一物は壺の中に一気に埋まった。

「ヒーッ」

と声をあげてしがみついてくる。そして腰の動きを早くする。しっかりしがみついてきて息を荒げる。一物はしっかりと襞に捕えられ、うねっていた。

「気がいきます」

と声をあげた。腰の動きが早くなる。体が堅くなってこきざみに震える。信長はお鍋の顔を見ていた。ゆがむ。気をやった。全身の力が抜けていき、手足をのばした。無防備である。

## 二

元亀三年（一五七二）十一月――。



武田信玄が動き出した。信長にとっては大敵である。今川義元も大敵だった。それを運よく義元の首を取った。

信玄に降るつもりはない、となれば戦うしかない。勝てる相手ではない。だが信長は天下をめざしている。

信玄は相模の北条氏政と同盟を結んでいた。怒濤のごとく遠江（とおとうみ）に侵入した。

浅井長政、朝倉義景、そして石山本願寺と連携した作戦である。

信長は、信玄の宿敵上杉謙信に連絡して向かわせようとする。だが、謙信は、北越一向宗徒に当たらねばならない。この一向宗徒は、本願寺の命令で動いていた。

信玄の大軍は一気に西をめざしている。このとき信長は、浅井長政の江北小谷城を攻めていた。

長政にはお市を嫁としてやったのに朝倉方についたのだ。信長は怒った。だが当時の政略結婚などというものは、こんなものである。

信玄は三河に入ろうとしている。三河の徳川家康は、信長に援軍を求めた。だが信長は少ししか兵を出せない。救援として佐久間信盛を向かわせる。

信玄は、遠江・三方ケ原にて徳川・織田連合軍を破る。武田軍二万五千に対して、織田・徳川は七千だった。

家康は浜松城に逃げ込むのがせいいっぱいだった。

だが、信玄は三河から尾張へ向かう途中、発病し、死んでしまった。そのために西へ向かっていた武田軍は一転して北へ向かったのである。

「助かった」

と信長は胸を撫で下ろした。また、大敵が一人いなくなったのである。信玄はおのれの死を三年秘せ、と言って死んだという。だが、どこからか洩れるものだ。それでなくても、西へ向かっていた大軍が一転して北へ向かえば、信玄が死んだことはわかる。

「わしには運がある」

と信長は呟いた。信玄に京に行かれては、信長の天下取りはならなかった。足利義昭には不運だった。

義昭の勢力は、信玄の死で小さくなった。

信長は義昭を討ち取らねばならなかった。天下を取るには義昭は邪魔だったのだ。

足利将軍家を廃さなければ、天下は取れないのだ。だから、天皇家から副将軍になれと言われたときも拒否した。義昭の下に付くつもりはなかった。

信長は、浅井の小谷城を攻めきれずに、岐阜にもどって来た。だが胸のつかえは下りていた。信玄がいなくなった。それだけで気持ちが軽くなった。信長の天下取りの壁になっていたのが信玄だったのだ。



「信玄が死んだ」

と呟く。これまで武田信玄が肩に重くのしかかっていた。その重さがとれた。信玄は戦略家である。

軍を信玄と同じに集めてみても、勝目はないだろう。二倍の軍を集めなければならない。すると、浅井、朝倉軍が横から攻めてくる。

「信玄が死んだ」

また呟いた。天下は一歩近づいたことになる。もっともまだ敵は多い。ほんとうに天下を取れるのだろうか、と思ってみる。

元亀四年（一五七三）――。

この年、信長は四十歳になっている。足利将軍義昭の側近であった細川藤孝が信長に内通して来た。義昭はあくまでも信長を潰す気だ。武田信玄が死んでしまえば、義昭も怖ろしくはない。信玄だって義昭の下についたわけではない。ただ義昭を利用して京に入ろうと思っていたはずである。信玄が死ななければ、義昭は信玄に潰されていたはずである。信玄の死は義昭にも幸いしたはずである。

義昭は各地の大名に檄（げき）をとばした。打倒信長のためである。だが、大名たちは義昭の家来で

はない。信長に付くか義昭に付くかに迷っている大名も多い。

反信長の旗印をはっきりさせているのは、越前の朝倉、近江の浅井、そして石山本願寺である。本願寺には各地の一向宗徒がついている。これがいささか面倒ではあった。ただの農民だが、人数が多くなれば、邪魔になる。

信長は実子を人質として義昭に和睦を求めた。だが、義昭はその人質を送り返してきた。信長と絶交するという。

信長は岐阜を出陣した。細川藤孝、荒木村重は、近江逢坂に信長を迎えた。洛外に放火して義昭に和平を迫る。

義昭は信長の腹の中を知っていた。信長は本気で和平するつもりはない。和平と称して近づき、義昭を追放するつもりだ。

義昭は将軍だが、信長は家臣ではない。副将軍の職を与えて家来にしようとしたが、信長は受けなかった。いまは対等、それ以上である。

義昭は信長が憎い、だが信長を討つ力はなかった。足利将軍家は義昭で終わろうとしている。信長は上洛して知恩院に寄宿する。和平を申し込むが、義昭は応じない。二条より放火して、義昭の屋敷を囲む。一気に包み込んで潰せばいいのだが、大義名分がない。世の非難を浴びたくなかったのだ。



義昭が蜂起すればこれを討てる。正親町天皇は、信長に勅使をつかわし、義昭との和平をすすめる。信長は一度岐阜にもどった。

義昭との和議が成立した。そのころ、信長は長さ三十間の大船を近江で造らせていた。琵琶湖は、舟で渡るほうが京には近いのだ。

義昭と和睦はなった。だが、義昭はどこかで挙兵するはずである。そのときに叩けばいいのだ。

信長は、徳川家康を京にやった。義昭と会わせ、和議を整えさせる。

翌日、信長は岐阜城を出た。

義昭は屋敷を側近の三渕藤英らに守らせて、自らは青木島に立て籠り興兵した。信長はこれを待っていたのだ。

信長は新造船に乗って坂本に着岸し、上洛して妙覚寺に入る。義昭の屋敷を守っていた三渕は投降して立ち退く。義昭の軍が崩れるのはわかっていた。

青木島城に義昭を攻める。義昭は、自分の子義尋を人質にして城から逃げ出す。このとき、十五代続いた足利将軍家は滅亡したのである。

京に帰ると、村井貞勝を所司代に任じた。七月二十八日、元亀四年を天正元年と改元した。

義昭がいなくなった。あとは浅井長政と朝倉義景、それに石山本願寺である。

信長は一つ目的を果たして岐阜城にもどった。そして、お鍋と共に風呂に入る。女の体を抱いていたいのだ。体を重ねて放出したいわけではない。ただ女の裸身を抱いていたいのだ。もちろん、ついには放出することになる。

湯殿の外に異変が起こった。

「殿、そのままに」

と源五郎丸十蔵が叫んだ。五人の近侍もいる。もし敵が多ければ、信長はお鍋を抱いたまま死ぬことになる。

おそらくは義昭が放った刺客であろう。信長はお鍋の乳房を揉んだ。このところ、乳房は張りが強くなってきたようだ。

源五郎丸十蔵は、刀を抜いて叫んだ。

「曲者なるぞ、出合え」

五人の近侍が走って来た。それと同時に十蔵は敵に向かって走った。黒い十数人の集団が足を止めた。

先頭の一人が刀を振り上げた。十蔵は刀を左から右へ薙いだ。刀柄を摑んだ両腕が足もとに落ちた。曲者はおのれの刀を踏んづけた。

「あち」



と声をあげ、おのれの足を抱こうとして、おのれの両腕がないのに気付いた。

そのときには二人目を斬っていた。相手が刀を持っているのを無視して、左肩を雁金に斬り下げた。

雁金とは、肩胛骨のことをいう。平べったい骨だから貝骨という。貝骨が雁金になった。この貝骨まで裂くのを雁金という。ただ肩を斬っただけでは雁金とは言わない。

切先五、六寸が肩に食い込まなければ、貝骨は斬り裂けないのだ。人の体を雁金に斬ることは、剣の達人といわれる人でもむつかしい。

曲者は体をぶるると震わせて死んだ。心臓も脳もまだ生きている。衝撃死である。死んでもなお立っていた。

湯殿に回り込もうとする。だが、そこには五人の近侍がいる。信長の命を守らなければならないのだ。

三人目の太腿を切断した。曲者は転んだ。袴の中から右足が滑り落ちてきた。刀は投げ捨てていた。血が流れ出す。

腿には動脈がある。袴をびっしょりと濡らして這っていく。

四人目が湯殿に走る。十蔵も走る。左から右へと刀を薙いだ。うなじのあたりの皮が一枚だけ残った。首が背中にぶら下がった。荷を負って走っているように見えた。開いた首筋から血

が噴出する。

三間ほど走って、バタリと倒れた。噴出する血はすぐにやんだ。あとは流れ出すだけである。

五人目の右手首を切断した。手首が刀柄にぶら下がる。左手を使えそうだが、右手首の重さがある。その右手首を振り落とそうとしても落ちるものではない。

十蔵は曲者の腹を蹴りあげた。気絶するのに左手の刀をもぎ取り、曲者の下げ緒を解いて血止めをする。血はすぐに固まるものだが、動脈がある。血がふさがるまで放っておいたら血を失って死ぬ。

血止めをしておいて、曲者に活を入れた。キョロキョロとあたりを見回す。

「誰に頼まれた」

忍者ではなかった。忍者は人を殺さない。

殺しては、そのあとどこの武将に雇われるかわからない。敵を殺してはあとで困ることになる。

「誰に頼まれた。喋れば金を与えて逃がしてやる。片手だけでも生きられるぞ」

「生き長らえるつもりはない」

「そうか」

と十蔵はその曲者の首を無造作に刎ねた。首が転がって十蔵を睨みつけた。そして目に膜がかかる。

湯殿には一人も近づけなかった。

「殿、終わりましてございます」

と湯殿に声をかける。ご苦労、と信長の声がした。湯殿の中から女の呻き声がした。

十蔵は刀を拭った。歓喜しているのだ。女の裸身を見る思いがした。京で尚子の首を刎ねたときのことを思い出した。



## 三

浅井長政の部将・阿閉淡路守が、信長に内通して来た。長政を見限ったのである。この夜に、岐阜城を出陣した。

刺客に襲われてから、お鍋を城内に移した。曲者たちは信長を狙って失敗した。お鍋だけなら、いつでも殺せたのだ。もっともお鍋を殺しても、信長を哀しませる効果はあるとしても、敵には価値がないのだ。

源五郎丸十蔵は、二百石の扶持をもらっていた。それ以上の禄はことわっていた。十蔵はいつも信長のそばにくっついている。信長を守ることだけが十蔵の仕事だった。

十蔵はおのれの剣を磨きたかった。生駒の屋敷にいたときから、おのれの剣を錬っていた。そしてこれ以上上達するには、人を斬るより他にない、と考えた。信長のそばにいれば敵をいくらでも斬れる。人を斬ることだけが望みだ。

生きていくためだけだったら、二百石あれば充分だった。出世に望みはなかった。

人を斬るにもていねいに斬った。斬りようを確かめるように。

人を斬れば斬味ということがある。

雁金に斬れば、腹を裂いたら、どのように手ごたえがあるのか、その辺を試みてもいた。

京で、お尚という女の首を刎ねた。信長にいただいた女だからといって抱くわけにはいかない。一時は信長が寵した女である。斬るよりなかった。女を斬ったのははじめてのことだった。手ごたえは、あまり快いものではなかった。

女は斬るものではない。抱いて可愛がるものである。だが、十蔵はもう一度女を斬ることになる。

信長は、月ケ瀬城を攻略した。山田山に移陣して朝倉義景を攻める。義景の援軍を遮断する。丁度山を陥れ、義景は田上山に撤退して越前に走る。それを追撃する。義景の将、それに斎藤竜興らの首二千を討ち取る。義景は更に逃げた。

武田信玄の死んだあとは、信長に怖れるものはなかった。といって百戦百勝というわけにはいかなかった。



浅井長政に背後を突かれ、逃げたこともあった。このときしんがりを務めたのは、羽柴秀吉だった。

首二千というと怖ろしい量である。首は恩賞のもとになるのだ。越前敦賀に移陣する。更に府中龍門寺に移陣する。一乗谷城を攻める。

義景は一乗谷城を逃げ出し、山田荘賢松寺に隠れ、すでに逃れられぬと知って自刃した。その首を京へ送る。

八月二十七日、浅井長政の小谷城を攻める。浅井長政は城内で自殺する。

長政の妻であったお市は三人の娘と共に逃れて来た。

この浅井の領地を羽柴秀吉に与える。信長は岐阜城に帰って来た。共に帰って来た信長は、お市に目通りを許す。夫長政が自殺したのは信長に抗したのだから仕方なかった。

「お市、美しくなったよのう」

このときお市は二十七歳である。女の盛りだった。長政とはむつまじかったという。

「おなつかしゅうございます」

と言った。長政は、お市と娘三人を逃したのである。共に死ぬには惜しかった。

「久しぶりに、お市の美しい顔を見た。長政に嫁がせて悪かった。長政はわしの役には立って

くれなんだ」

と言って信長は笑った。

朝倉義景と浅井長政が自殺した。武田信玄はその前に病死している。もっとも武田家は潰れたわけではない。息子の勝頼がいる。

だが、当面の敵ではない。残るは石山本願寺だ。一向宗の農民たちも馬鹿にならない。

信長は褥にお市を呼んだ。お市は浅井に嫁ぐ前は、信長の女だった。妹ではない、従妹だった。

二十七歳になっている。信長は四十歳だ。お市とは十三歳違った。お鍋も美女だが、お市とは比べものにならない。

お市は夜具のそばに両手をついた。十年前に比べると肉付きもよくなっている。お市は首が長く白かった。首の長いのは美人の条件である。いかに美しい顔をしていても首が短ければ美人のうちには入らない。逆に、美人は首が長いと決まっている。

「長政は優しかったか」

はい、という。

「せっかくお市をやったのに、どうしてわしに反抗したのかな。だったらお市をやることはなかった」



お市が膝をにじらせて夜具の上にあがって来た。それを横抱きにする。そして衿の間から手を入れる。乳房を手にした。大きくなっていた。三人の娘に乳をやったのだろう。

乳房を揉みしだく。揉み甲斐のある乳房だ。

「あーっ」

と声をあげた。体も敏感になっているのだ。手にいくらか余る豊かな乳房だ。乳首も大きくなり、しこっていた。すでにその気になっているのだ。

「お舘さまは、天下をお取りになるつもりですか」

「そのつもりだが、それはわからんな。天下を取る前に死ぬかもしれんな」

「不吉な」

「なんの、人の寿命というのはどうしようもないものだ。そのときになってあわてても仕方がない。長政もおそらくはそうであったろう。さむらいはな、これまで、と思えば死ぬ覚悟はできるものだ」

三人の娘には、信長は父の仇ということになる。これが世の中でもある。

信長は湯帷子の上から腿を撫でた。むっちりと肉付いている。

「わしに抱かれるのがいやではないのか。亭主の仇だぞ」

「いいえ、わたしははじめからお舘さまのものでした」

「そばに置いておくわけにはいかなかった。そなたがいれば戦に身が入らなくなる。戦は命賭けだ。心をよそに向いてはたたかえぬ」

「ようわかっております」

信長には独占欲というものはなかった。京の尚子を殺したのは憎かったからではない。勝手な真似をしたからだ。

「お舘さまが欲しゅうございました」

「そうか」

湯帷子の中に手を入れた。腿に触れる。撫でまわす。女の脂がのってなめらかだ。十年前は青白い肌をしていた。

お市を仰向けにさせると湯帷子の前を開いた。首筋から足の先まであらわになった。美しかった。腿はしっかりと閉じられていた。恥骨には申しわけ程度に毛が生えている。

「きれいだ」

「はい、きれいでございます」

お市がまだ子供のころ、きれいでいろよ、と言った。その言葉をお市は守っていたのだ。いつも信長のためにきれいでいようと思っている。

信長はお市の乳首を吸いながら、肌を撫でまわす。熱い息を吐く。自分から膝を折り立てた。



信長の手がはざまに入ってくる。膝を開き閉じる。

お市は、枕をとって膝の間に挟んだ。腿を閉じては信長の手が動かなくなる。だが、女の股はすぐ閉じたくなるものだ。そのために枕を挟んだ。

信長の手がはざまを上下になぞる。一指だけ切れ込みの中に入ってきた。そこは潤んでいて指がすべる。

「あーっ、お舘さま」

と声をあげる。指が肉の芽をなぞりあげた。ヒーッと声をあげる。だが、いやがらなかった。刺激は強すぎるかもしれぬ。腰がくねった。半透明の肌である。腰が妖しくくねる。二指を揃えて壺の中に送り込む。また声をあげた。

両踵と両肩で体を支えて、尻を浮かし回す。腿を大きく開いた。膝の間に挟んでおいた枕が落ちる。股を開いたり閉じたりする。

壺の中も熱い露でいっぱいだった。三人の子供を産んで感じやすくなっている。はじめは生娘だった。膜を破ったのは信長である。信長一生のうち、生娘を抱いたのは帰蝶を除くとお市ただ一人だったのだ。

「お舘さま、お情けを」

と声をあげた。しきりに尻を振る。その動きが妖しく美しかった。お市は手をのばしてきて、

信長の股間を探った。そして一物を手にした。

「これを」

と声を出した。これを欲しかったのだ、と言いたかったのだろう。はじめて知った男の一物である。はじめてこれを受け入れたとき、そのあと、そこに一物がまだ半分残っているような気がした。四、五日は続いた。そこに信長を感じていることがうれしかったのを覚えている。

お市は体を起こし、股間に顔を埋めた。すぐには口にしなかった。一物を眺める。男の一物はどうしてこんな形をしているのだろうかと思う。尖端と胴は別ものである。胴は堅くなる。だが尖端はなめらかで弾力がある。胴が堅くなっても尖端だけは弾力がある。

その尖端に唇を押しつけた。唇の間から舌を出して舐める。舌を這わせる。なめらかになってきたところで根元まで呑み込むのだ。はじめは味などというものはわからなかった。いまは男の味がわかるのだ。

切れ込みはひくひくと伸縮している。それがわかるのだ。そこにこの一物を埋めて欲しいと思う。だが急ぐことはないのだ。いずれは入ってくる。

お市は長政に抱かれながら、信長を思い出していた。目を閉じると信長の顔が浮かんでくるのだ。お市は信長を慕っていた。その慕っていた男に抱かれたのだ。はじめての男だった。それだけの思いがある。



お市は頭を上下させる。唇の間を出入りする。それも快いのだ。お市は一物を手にして体を持ち上げた。

「上になります」

と言って信長の腰をまたぐ。そして尖端を肉の芽に当てた。アーッ、と声をあげて体を反らし、腰を振る。この尖端の感触がたまらないのだ。

それから壺口に当てた。そして声をあげながら腰を沈めていく。一物が襞をかき分けて入ってくる。それがうれしかった。恋しい男である。長政とは違っていた。

# 九章　女城主

## 一

美濃国恵那郡は、美濃東端の山間部にあり、東は信濃、北は飛騨、南は三河に接し、それらの国に、さらには尾張国へ放射線状に街道がのびている要地であった。

信長は、武田との境目の地として重要視し、この地に織田家の女二人を嫁がせた。一人は恵那郡苗木の遠山勘太郎直兼に嫁いだ信長の妹。一人は恵那郡岩村の遠山左衛門尉景任（かげおみ）に嫁いだ。

この遠山景任に嫁いだ女が信長の叔母に当たるお高である。お高は信長の祖父信定が若い女に産ませた女である。

祖父信定は戦国時代にしては長生きした人である。老いても女に子を産ませる能力があったのだ。

叔母といってもお高は信長よりも七つも年下だった。織田家には美男美女の血が流れている。お高もまた美人であった。お市ほどではなかったにしてもだ。お高は一時期、信長の女だっ



た。側室ではないが、ときおりお高の寝所に通った。

豊満な美人で肉付きがよく、その肉が異様に柔らかだった。

その肉の柔らかさに信長はのめり込んだ。まだ若いころである。お高は更に若かった。肉の柔らかさはお市も及ばなかった。

お高は年上の甥である信長が怖ろしかった。残酷な男である。気に入らなければすぐに殺してしまう。疳の強い武将だった。

お高は信長を拒めなかったのだ。もっとも怖ろしい男だが、嫌いというのではない。抱かれているうちにいとしい男になってくる。女は強い男が好きである。悪党でもである。お高は信長によって女になった。男の味を知ってしまった。抱かれると体が応えてしまう。自然に寝所に信長が現われるのを待つような気持ちになっていた。

そのお高が、岩村城の遠山景任に嫁した。好きでも嫌いでもなかったというが、当時としてはごく当たり前のことである。好き合った同士が夫婦になることのほうが珍しかった。

人には添うてみよ、馬には乗ってみよ、という言葉がある。嫌いな男でも共に暮らしていれば好きになるということだ。

景任が嫌いな男ではなかっただけでも、お高は運がよかったということになる。

だが、お高の不満は景任の体が弱かったことである。お高は信長によって女にされていた。

お高の体は男を求めて疼く。景任はお高が満足するほどには抱いてくれなかった。といって男を求めるわけにはいかない。この点ではお高は不幸であった。

その景任が病死したのである。これを聞いた信長はびっくりした。岩村城がなくなっては困るのだ。

その前に、武田信玄の武将、秋山信友が三千の兵をひきいて、高遠を出発、岩村の隣村上村において、遠山七党の連合軍と激しく戦った。遠山七党の軍は五千、だが三千の信友にはかなわなかった。

このころはまだ武田信玄は生きていて西上していたのである。岩村を信玄が攻めたのは京へ向かうには、この街道が必要だったからである。

兵三千では岩村城は落とせないと考えた信友は、さっと三河に進軍した。三河には徳川家康がいる。

この間に、お高は信長に援軍を求めた。

城主のいない城はいつ落ちるかもしれないのだ。

岩村城主の遠山景任が病死してしまった。

もともと体の弱い男だった。妻のお高は困った。岩村城は武田軍に狙われている。城主がいないでは家臣たちも防ぎようがない。



信長はこれを聞いて驚いた。信長にとっても岩村城は東美濃の重要な拠点である。それで五男の御坊丸を与えた。だが、御坊丸は八歳、合戦などできるわけはない。それに織田家から来た家臣と遠山の家臣はうまくいっていない。

両方にすすめられて、お高が城主となった。武田の部将秋山信友は再び攻めて来るだろう。その戦闘に備えなければならない。

お高はかいがいしく、備えを家臣たちに命ずる。岩村城は峻城である。そう簡単には落ちない。

遠山七党といわれる遠山一族は、秋山軍に負けた。岩村を除く遠山は六人の将がいる。六人の命令が統一できなかった。船頭多くして船山に登るである。

岩村城は孤立している。他で戦っている信長は援軍をよこせないのだ。

お高は、秋山信友という男は知っていた。まだ織田家と武田家との往来があったころ、そのときに何度か会っている。信友は美男で逞しかった。お高は淡い思いを信友に寄せていた。

その信友と戦わなければならないとは皮肉である。

お高は体を疼かせていた。お高の体をこのようにしたのは信長である。信長さえいなければ、遠山景任に嫁しても、夫婦のまじわりとはこんなものだと思えただろう。

だが、お高は体の疼きを晴らそうと景任を求めた。求めないと何カ月も放っておかれる。信

長に男の味を覚えさせられたお高は、月に一度くらいでは体がもたなかった。

はしたなくも景任を求めた。立てて、立てて、と声をあげ一物を手でしごき、そして口に咥えた。

その結果ではあるまいが、景任は死んでしまった。お高は男を求める自分の体がいまわしい。景任のような男に嫁したのも不運だった。景任はお高の顔を見るとき怯えたような目をした。お高に求められるのがかなわなかったのだ。

もちろん側室はいなかった。お高との間にも子はなかった。

お高は男に抱かれて思いきり悶えたかった。男を求めるのは生まれつきの体だろう、と思う。信長に女にされただけではない。

秋山信友が岩村城攻撃にかかったのは、天正元年の二月だった。岩村城の守りは固かった。食糧も兵器もある。岩村城は天然の要塞である。籠城する兵は二千、秋山勢は三千である。城は落ちない。だが、信長の援軍は来ない。籠城二カ月が経った。兵の士気は衰えていった。兵糧も少なくなってくる。そんなとき信友は和議を申し入れて来た。それと同時に信友は恋文をお高によこしたのである。

信友はむかしのお高を覚えていたのである。お高は苦悩することになる。信友と和議をする。反面、信長がこわい。



だが、このまま囲まれていては城兵は餓死してしまう。食糧を運び入れていた間道もふさがれてしまった。

信友に抱かれたいと体は疼く。敵将とむつみ合っては信長が許すまい。だが疼きには勝てそうにもなかった。

信友に抱かれたい、と思っても、お高だけの思いではどうにもならない。家臣団がいるのだ。信友の書状に、重臣たちはあきれたり、怒ったり、

「降参して城より出よと申しているわけではない。わしを新しい城主として受け入れてくれればよい。家臣は望めば城内にとどまってもよい。ただ一つ条件がある。お高の方をわしの室として申し受けたい」

このような内容の書状であった。女城主を自分の妻にしたい。こんな申し出など例がない。お高もたてまえとしては怒った。怒ってみせなければならない。もちろん遠山の臣と、織田の臣では受け取り方が違う。遠山七党の六党は信友に下っているのだ。

時が経つと、家臣たちの考えにも変化が出てきた。遠山の家臣たちは、それもいい考えかもしれない、と思いはじめた。

岩村城の遠山家は、以前は独立していた。それが信長に従い、お高が景任の妻となって織田方になった。ここで、武田方に変わってもおかしいことではない。

お高が信友の妻になれば、うまく収まる。よけいな合戦をしなくてすむ。

遠山七党の六党までいまは信友に従っているのだ。

だが織田方の家臣たちはそうはいかない。岩村城は織田の城である。武田の信友には渡すわけにはいかない。だが信長の家臣は少なかった。

和議は成立した。遠山の重臣たちがお高を口説いたのだ。織田の家臣たちは城を出ることになった。御坊丸を連れてである。

城内では、祝言の酒宴が華やかにくり広げられた。お高は口説かれて納得したのである。お高の胸は熱く高鳴っていた。

いずれは信長に殺されることになる。信長が許すはずはないのだ。

だが、どれくらいの間かわからないが、信友に抱かれようと思った。あるいは信友に欺されているのかもしれない。お高には賭けだった。

たとえ一年でも倖せな時期があれば、女は納得できるものである。お高は哀しかった。女であることが。男ならばはなばなしく戦って死ぬものをと思う。

城内には三千の信友の軍が入って来た。騒々しい。城はやがて信友の軍に乗っとられる。遠山の家臣たちも、やがては城から追われることになるのだ。

新床である。



お高は白絹の湯帷子を着て、枕席に待っていた。胸はドキドキしている。すでに体は疼いていた。はざまは露をためている。それがよくわかっていた。

女であることの哀しさである。

信友が入って来た。美丈夫である。

「お高どのと、このようになろうとは思いもしなかった。織田殿の城に使いとしてうかがったとき、そなたは隅のほうにいて美しかった。憧れてもいた」

甘い言葉を掛けられて、お高は信友にしがみついた。

「思いはわたしも同じでした」

男の手が背中を這う。信友はおのれを満足させてくれるだろうという思いがある。景任のようなことはあるまいと。

これを聞いた信長は烈火の如く怒った。岩村の城主が敵将の妻になるとは。信友は無血入城したのだ。城主が女であるだけに、まんまとしてやられた。

## 二

天正二年（一五七四）正月――。

岐阜城の新年の宴に馬廻衆の前に奇妙な盃が置かれた。馬廻衆は信長の旗本である。合戦のときには信長の身辺を守る。

この盃は金泥、銀泥の漆で塗り固められた半球形のものである。この三個の盃は、朝倉義景、浅井久政、長政の髑髏であった。馬廻衆にこの盃で酒をのませた。酒ののめぬ信長は、盃で茶をのんだ。

この三人は、信長にうるさく抵抗した。特に長政はお市を妻にしながら裏切った。そのことが憎かったのだろう。

お市はこの城にいる。前夫長政の髑髏があるとは思わなかろう。

三月には、信長は勅使を立ち合わせて東大寺正倉院の宝物、名香蘭奢待を切り取る。日本最高の伽羅である。かつて足利義政が一度拝領しただけである。

蘭奢待には東大寺の文字が入っている。字を見つめてみればわかる。のちに明治天皇が切り取られている。

蘭奢待を切り取ったのは、この三人だけである。豊臣秀吉も徳川家康もこの香木には手が出せなかった。この香木はいまも東大寺正倉院にある。値はつけられない。現代の日本の国家予算の十年分だと言われている。

信長がこの香木を切り取ったのは、天下におのれの威を示すためだったという。この香木は



二千年も前に淡路島に流れついたものだ。

この年の八月から、伊勢長島の一向一揆を攻めた。嫡男信忠が二万、佐久間信盛・柴田勝家が三万、二男信雄がひきいる九鬼嘉隆の水軍が八千の兵をもって、一揆の二千を攻めこれを斬り、大半を餓死させ、更に二万の男女を焼き殺している。

信長は忍部氏出身の神徒である。日本に勢力を張る仏教徒が嫌いだった。仏徒たちは仏教のためには都も投げ出すというそういう思いが嫌いだった。

もちろん仏徒たちは信長に反抗した。いかに殺されてもである。仏教は外来宗教である。神道は日本が生まれたときからあったものである。死をも怖れぬ仏徒たちが憎かった。死をも怖れぬように説く仏教そのものを憎んでいた。

各地に一向宗徒が立つ。信長はこれを次々に殺してきた。農民というのはもともと弱いものである。農業で生計を立てていく存在である。体の中に流れている血からして違っていた。武力には適さない体質である。生まれながらにして違っている。

それなのに農民が武器を手にして武士に挑む。そのもとにあるのが仏教である。仏教が農民を強くした。武士の前には怯えていた農民たちが、武士に抵抗して、武士よりもいさぎよく死んでいく。そういう仏教を信長は憎んだ。

殺し合いをするのは武士だけでいいのだ。それなのに本願寺の命令で立ち上がり、武士に抵

抗して死んでいく。災いは仏教にあり。

仏教のために戦って死ねば極楽に行けると教える。そのために仏教徒は何も怖れずに死んでいく。

武士もこういう仏教徒をあなどれない。死ねる者は農民でも強くなる。農民が武器をとって合戦してはならないのだ。のちに徳川家康は、本願寺派の仏教徒が力を持つのを怖れて、東西に分けた。京を基点として東を東本願寺派、京より西を西本願寺とした。勢力を削ぐためである。現代も京都に西本願寺と東本願寺が、左右に並んでいる。

信長は、お鍋に一物を舐めさせていた。これが一番楽でよい。おのれは何もしないでよい。だから疲れもしない。女を抱いて疲れるようでは、女を抱く意味がないのだ。

天井を見ていた。燭台の炎がチラチラと天井に映っていた。信長は額に青筋立てて怒っていたのだ。

お鍋は信長が怒っていることを知っている。短気で残忍な男だということは聞いて知っている。その怒りがおのれに向けられるのではないかとヒヤヒヤしていた。

女を抱いているときに怒るのは珍しかった。

優しい女の体で怒りは静められるものである。信長もそのつもりでお鍋を抱いたのだろう。だが、怒りは去らなかった。



遠山岩村城は、武田方の部将・秋山信友によって落城した。それも無血入城だった。信友が女城主お高を口説いて口説き落としたのだ。そしてお高は信友の妻となった。

岩村城は、戦略的にも信長には重要な城だった。それが色恋沙汰で敵に渡ってしまったのだ。信長が怒るのも無理はなかった。

お高は信長の叔母になる。叔母といっても信長より七つ年下である。信長はこのお高を抱いている。むかしのことだが。

そう思ってみれば、お高は女っぽい女だった。女の優しさ、女らしさ、女の柔らかさを持った女だった。

お高を岩村城主の遠山景任に嫁がせたのは信長だった。景任などにくれてやるのは惜しい女だった。その景任が病死した。

信長はおのれの幼い御坊丸を岩村城にやった。だが、城主になるには子供すぎた。それでお高が城主になった。

武田信玄の部将・秋山信友が岩村城を囲んだ。だが攻めても岩村城は落ちない。それでお高を口説き、口説かれたお高は、信友に城を開いた。

信友は城に入って夫婦になったのだ。女であっても、その前に城主でなければならなかった。それが女が前に出たのだ。

お高は以前から美男である信友に憧れていた。信長も以前から信友のことは知っている。戦国武将の中ではとび抜けて美男だった。

色仕掛けで、城を乗っとった武将は、信友がはじめてだろう。

信長は、まずお高を怒った。次に信友を怒った。

色仕掛けで城を落とすなど、男のやることではなかった。お高もまた、合戦して城を落とされたのならまだしも、男に口説かれて城を開くなど、考えられないことだった。

お高が城主でも、城は信長のものだったのだ。

武田信玄が病死したからまだよかったものの、そうでなければ信長は危ないところだった。

信長は下から突き上げた。

「果てる」

と言った。お鍋は一物の根元を押えた。そうしないと咽を突かれてしまう。お鍋は頭を上下させる。唇の間を一物が出入りする。頭を上下させながら、尖端に舌を絡ませる。

信長は一気に放出させる。一物は痙攣しながら、三度に亘って噴出させた。

それをお鍋は唾液とまるめて呑む。一物は小さくなっていく。舐め上げてから放した。

お鍋は一物を指で摘んだまま、信長の胸に頬を押しつけた。

お高は、敵将に城を開き、体まで開いたのだ。許せるわけがなかった。信長をなめたやり方



だった。

三河・鳳来寺山の南麓、長篠城は徳川家康の城である。天正三年五月、武田勝頼の一万五千の軍に攻められた。家康は信長に援軍をたのんだ。

信長は、石山本願寺を攻撃していたが、設楽ケ原に駆けつける。信長・家康連合軍は四万である。陣の前に木柵を作り、三千の鉄砲隊を配した。

なだれをうって寄せる武田騎馬軍団を柵の近くまで引きつけておいて、鉄砲の三隊が交互に前に出て一斉に射撃を浴びせかける。

かつてない戦法だった。騎馬隊は柵を乗り越えられず、弾丸を浴びて壊滅した。勝頼はむなしく甲斐に帰っていく。

次に、信長は越前の一向一揆を討つために出陣する。その間に岐阜城にもどった。城にはお市もいる。だがお鍋を寝所に呼んだ。

合戦に次ぐ合戦で女の柔肌に触れる機会も少ない。合戦で体力を消耗する。このとき信長は四十二歳である。疲れやすくなっている。女に精力を使いたくなかった。女を抱いてどれくらい力を回復できるかである。

おのれから女にのしかかっていくような、そんな気力もなかった。お鍋は一物を指でいじり回している。一物は反応しはじめ、むくむくと立ち上がってくる。

お鍋は、体を起こしてまた一物を口にする。しばらく頭を上下させておいて、信長の腰をまたいでくるのだ。そして尖端をおのれの肉の芽に当てる。芽に尖端をこすりつける。

「あ、あーっ」

と声をあげて腰を振り、背中を反り返らせる。女は、芽に尖端が触れるのが最も心地よいようだ。女たちは尖端のなめらかさ柔らかさを口で知っている。

腰をくねらせ、尖端を壺口に押し当てて、手を放す。一物は壺の中に吸い込まれていく。壺の中が一物でいっぱいになる。襞が一物に絡みついていく。

お鍋は腰を回す。息が乱れてくる。腰を回して上下させる。思わず尻を上げると、一物がはずれる。お鍋はあわてて一物を壺の中に押し込む。

信長は、岩村城のお高に腹を立てていた。八ツ裂きにしてやる、と怒る。信長は合戦に次ぐ合戦を続けている。だが、女は違うのだろう。

信長の岩村城を敵に渡してしまった。そのことがどういうことか、お高にはわかっていない。信長は天下をめざしている。それもおのれとは関りのないことのように思えたのだろう。

信長は両手でお鍋の尻を摑んだ。柔らかい弾力のある尻だ。お鍋は尻を回す。そして尻をしゃくり上げる。あーっ、と声をあげる。このとき、女は何も考えていないのに違いない。男は女の体の中に一物を埋めても、考えている。越前の一向一揆を討たなければならない。



一向一揆の農民たちは、死ぬことを何とも考えていない。一向宗のために死ねば極楽へ行けると教える。農民たちは極楽へ行けると思い込む。

信長にとっては、意外にこれが面倒なのだ。

お鍋は仰向けになり信長を迎える。一度は女の上にならなければならない。お鍋はしがみついて、次々に気をやる。悶え狂うのだ。

「お舘さま、お舘さま」

と声をあげて身を揉む。襞がしっかりと一物に絡みついている。とめどもなく気をやる。そしてついに失神した。

## 三

お高は信長に怯えていた。信長の残忍さを知っている。信長の城である岩村城を敵将に渡してしまった。その上に秋山信友の妻になった。女城主をやめて、ただの女になった。

もちろん、ただの女のほうが生きやすい。倖せでもあった。信友の妻として生きていけるのであれば、これほど倖せなことはない。

それも短い間であることを知っていた。やがて信長はこの岩村城に攻めてくるだろう。復讐

の執念を持って。信長は決して許してくれはしない。それを知っていて信友に口説かれた。女は刹那的というのではない。ほんのしばらくの間でも、女として生きたかったのだ。一生の間にほんのわずかの間でも、女として生きられれば、それで満足だった。

お高は、はじめから死を覚悟していた。覚悟しなければできないことだった。信長は、越前の一向一揆の宗徒を殺した。女子供までも、三万とも四万とも言われている。徹底的に殺した。降伏しても許さなかった。

そのむごさはお高も聞いている。おのれに逆らう者は許さなかった。お高も信長に逆らった一人である。

お高は、信友に抱かれていた。

女としてこれ以上ないほどに倖せであった。秋山信友は、この城を乗っ取るために恋文をよこしたと思っていた。それでもよいと思ったので、城を開いた。だが信友は優しかった。

お高は男の優しさに飢えていた。お高は信長によって女にされた。お高に歓喜を与えてくれたが、優しくはなかった。

夫の遠山景任は、優しくもなかった。女の体というものは、精汁を注ぎ込むだけの道具と思っているらしかった。それに病弱のために、あまりお高を求めなかった。

お高は信長に女にされているので、歓喜が欲しかった。たまに求めてきても、すぐに没入させてきて、すぐに放出させた。感じる暇もなかった。あとで体が疼いた。どうしようもなくなり、おのれの指を使った。お高はおのれを不幸な女だと思った。女でありたいのに、女の悦びが得られなかったのだ。



「そなたが愛しい」

と信友は言う。

「うれしゅうございます」

と言ってお高は抱きつく。

信友は岩村城を欲しいだけではなかった。ほんとはお高が欲しかったのだ。お高の体にのめり込んでくる。

「そなたは、わしが思っていた以上によい女だった」

信友のそういう言葉がうれしかった。はじめて女としてあつかわれたのだ。死んでもいいと思った。

信長は許さないだろう。だが、いまは信長も怖ろしくはなかった。殺されても悔いはない。いま、女として花が咲いているのだ。咲いた花はやがて萎むものである。萎む前に信長によって摘み取られるだろう。それでもよかった。

お高が秋山信友の妻となったのは、天正元年の春だった。天正三年の秋までの二年数カ月、

お高は女として倖せな時を過ごした。

三年六月。岩村城を信長の嫡子信忠が三万の大軍をもって囲んだ。岩村城は簡単には攻めとれない。それで兵糧攻めということになった。

天正三年の五月に、武田勝頼が織田・徳川軍に大敗した。それがなければお高の倖せな時間も長くなっていたはずである。だが、お高は満足だった。

二年数カ月は、短いようでいて、充分に長い時間であったのだ。はじめから信長に殺されると思いながら信友の妻になった。二年間はたっぷりとした時間だったのだ。

水晶山への抜け道が断たれた。食糧が入ってこなくなった。籠城し餓死するしかなかった。それとも討って出るか。

十一月まで耐えた。信長からの和議の申し入れがあった。

「叔母御の城なれば、悪いようにはせぬ。城内の女子供は好むところに落ちていくがよい」

お高は、信長のこの言葉を信じなかった。そんな優しい信長であるわけはない。信長の無残さは聞いている。だが、信友はこれを信じようとした。

信友は助かるまい。だがお高だけは助けたいと思ったのだ。

「信友どのと共に死にとうございます」

「お高どのは助かるかもしれぬ」



「そんな信長ではございませぬ」

信友は降伏する。その前夜、二人は抱き合っていた。

「この二年間、わたしは倖せでした。思い残すことはございません。お礼を申しておきます。ありがとうございました」

「他人行儀なことを言うな。わしもそなたを妻として迎え、男冥利につきる」

お高は信友をおのれの上に乗せていた。壺の中には一物が入っていた。信友の思うようにさせてやりたかった。信友は先に死んでいく。すると、お高がどうなるかはわからない。信友はお高は助かるかもしれんと思いながら死んでいく。それがお高の信友に対する思いやりだった。

あーっ、と声をあげて信友にしがみついた。腰が激しく回っている。このまま死んでしまいたいと思う。

気がいく、続けざまに気がいくのだ。信友は耐えていてくれた。もっともっとと思う。いくらでも気がいきそうな気がした。背骨を閃光が走って脳天から突き抜けていった。

失神した。壺の中で一物が動いた。わっ、とまたしがみつく。そして思いきり一物を締めつける。ズキンと体が疼く。

信友は城を出て行った。信友をはじめ部将たちは、長良川の河原で首を討たれた。

城を出た女子供たちは木の実峠で一人残らず虐殺された。信長のやり方である。家臣たちも

よく知っている。

お高は信長の前に出た。あでやかな衣装だった。

「秋山信友の妻じゃ。早よう首を討て」

「女は気楽でよい」

と信長は呟くように言った。

信長はただではお高の首を刎ねなかった。

「逆吊りにせよ」

と命じた。足首に縄を結びつけられ、吊り上げられた。着物の裾がめくれた。白い腿から尻があらわになった。腿から腰のあたりの肉付きが美しかった。



# 十章　乳母お慈（ちか）

## 一

越前の一向宗徒、四万人を殺し、京へもどった信長は、従三位権大納言（じゅさんみごんだいなごん）と右近衛大将（うこのえ）に任ぜられる。公家となった。

秋十月、二条衣棚妙覚寺に入った。京での信長の宿舎である。

この日、茶会が行われた。信長はいつのころか茶器に興味を持ちはじめた。この茶会は、岩村城の秋山信友を討つ一カ月前である。

二年前に三千石で召し抱えた千宗易（そうえき）（利休）が、はじめて茶頭（さどう）をつとめた。

この茶会に集まったのは、堺の豪商茶人、津田宗及（そうきゅう）、今井宗久、天王寺屋道叱（どうしつ）、松井有閑（ゆうかん）などである。これらの茶人たちが嫌っていた奉行所を堺に置いた。

堺の今井宗久たちは、自由を好んだ。誰の支配も受けたくなかった。だが、信長はそれを許さなかった。

堀を作り、浪人を集めて、信長と一戦しようとしたが、信長に負ければ女子供までも殺されてしまう。堺は消えてしまう。

また、信長に勝てる軍など作れるわけはなかった。それで信長の支配を受けることになった。堺に奉行所ができた。

この戦国の世に自由に生きられる土地などなかったのだ。茶人たちは、表むきはとにかく、腹の中では信長を憎んでいた。これが本能寺の変に関ってくることになる。

これまでにも、信長は多くの人に憎悪されていた。特に仏教徒は、信長を鬼・悪魔とののしった。それらの敵を信長はあまり気にしていなかったようだ。

このころ、信長がよく行ったのが、茶会と鷹狩りだった。この年も終わるころ、信長は嫡男信忠に岐阜城を、家督と共にゆずった。岐阜城は京に遠いし、いまの信長には小さくなっていた。

それで、近江に安土城を築いていた。

天正四年、二月二十五日に信長は安土城に入る。祝賀の大名たちが次々と訪れる。安土の城は、中山道、北国、伊勢などの道への交叉点にあり、京へは船を走らせて坂本から志賀越えの道で半日で行ける。また、京と東国をにらむ山に、かつてない城を築いたのだ。

そして、四月一日に天守閣を作った。だが、安土城に落ちつく暇はなかった。六角氏は信長に抵抗をつづけて衰亡していった。

瀬戸内を渡って来た毛利輝元の水軍に織田水軍が敗れた。それで本願寺攻めは長びいていた。紀伊の雑賀・根来の一揆を討ち、本願寺側に寝返っていた松永弾正久秀を討伐した。

信長は安土城にお市とお鍋を連れて来た。それにいま一人の側室を連れて来た。お慈という。お慈は、嫡子信忠の乳母だった女である。信忠に乳をのませているときの、その乳房に信長が興味を持ったという。

彼女は信長の部将滝川一益の親族と伝えられている。お慈の産んだ娘は、豊臣秀吉の側室となり三の丸殿とよばれた。

本能寺の変で信忠が死ぬと、のちに慈徳院と称して、信忠を弔うために妙心寺に大雲院を建立した。

お慈はお鍋よりは若かった。信長はお慈の乳房を寵した。それほど大きいというほどではないがよい形をしていた。信長の子に乳をのませたせいか、乳首は大きかった。丸く根元でくびれ、色も濃かった。

その乳首が興奮してくると、鮮紅色に染まってくる。白い肌にその紅色がよく合った。乳房の膨らみもまた信長の気に入っていた。

乳母というのは手がつけやすい立場の女だ。信秀も信長の乳母に手をつけている。

嫡子の信忠に乳をやる。お慈は乳が出たのだ。

亭主がいて子を産んだばかりだったのだろう。そうでなければ、乳は出ない。あるいは夫は戦死していたのかもしれない。

信長は若後家が好きだったことから考えると、後家になったので乳母になったのだろう。その辺のことは一切わからない。

天正四年、信長はまだ女たちに子を産ませている。その子の一人の乳母だったのだろう。信長の手がついたのが、二十三歳のころだった。いまは二十五になっている。

信長はお慈の衿の中に手を入れて、乳房を摑んで揉むのが好きだった。四十三歳になっても、胸の底に母の乳房恋しさがあったのかもしれない。

信長は幼児のときから、母とは離れた。母は弟の信行だけを可愛がった。母の乳房の恋しいときに、その乳房を与えられなかった。だから、四十三になっても母の乳房願望というのがある。その母の乳房をお慈に求めたのか。

信長の子たちの乳母の中では、お慈が最も美しかった。お慈の乳房が気に入ったのだから、乳房も白く美しかった。

信長は、ちょくちょくお慈の乳房に触れた。本気で抱く気がないときでも、衿から手を入れて乳房に触れてくる。それでお慈は帯もゆるめに締めていた。信長がその気になったとき衿を



開かねばならないからである。

天正四年のこのころは、しきりに安土城と京を往復していた。まだ石山本願寺が落ちないのだ。信長の部将たちも攻めきれない。

毛利の将・児玉就英が、織田の水軍を破り、本願寺に食糧を運び込む。それでますます本願寺は落ちない。

京から安土にもどって来て、お慈を寝間に呼んだ。乳房を揉むだけでは、お慈の体ももつまい、と考えたのだ。

夜具に体を横たえて、衿を開く。

「美しい乳だ」

「光栄でございます」

と言う。乳房を揉んでいると乳首が充実してくる。乳首を摑んでひねる。あーっ、と声をあげる。

「赤子に乳首を吸われても、心地よさを覚えるのか」

信長にはそのことがよくわからなかった。

「はい、覚えまする。心地よさを覚えるから、赤子に乳を吸わせるのだと思います」

「心地よさを覚えてどうなる」

「どうにもなりません。それだけでもよいのです」
「乳を吸われて、はざまは潤むのか」
「はい、潤んでまいります」
「すると男が欲しくなるであろうが」
「はい、でも」
とお慈が言った。赤ん坊に乳を吸わせながら、男と交わるわけにはいかない。交わってもよいのだろうが、そういうときには男はそばにいないのだ。
乳首は大きかった。口に咥えると、咥えているという気がする。もちろん乳は出ない。吸ってしゃぶる、そして歯で咬む。お慈は声をあげた。
乳房を揉む。すると腰がくねる。声をあげる。もちろんはざまは濡れていることだろう。湯帷子をはね、肌に手を這わせる。腰から腿にかけて、たっぷりと肉をつけていた。
お慈を仰臥させ、腰紐を解き、湯帷子の前を開いた。乳房から太腿があらわになった。信長はそれを眺めていた。燭台を四方においていた。
お慈の素肌を眺めるためである。信長は四十三歳になっている。いきなり女に抱きつくようなことはしなかった。
女の体はまず目でたのしむものである。一物を没入させて精汁を放出させるのは最後でよかった。おのれがその気になるのを待つのである。



信長はまだ勃起してはいなかった。顔に似ず、お慈の肌はきれいだった。御坊丸に乳を吸わせていたその乳房に惚れたのだ。
乳房を眺め、腰を眺め、そして腿に目を遊ばせた。美女という点では、お市やお鍋のほうが美しかった。豊臣秀吉は信長の死後、お鍋を側妾の一人にしている。
お市が柴田勝家と再嫁したのは、信長の死後である。秀吉はこのお市までも狙っていた。お市は秀吉が嫌いだった。
秀吉はのちに勝家を攻め滅ぼす。そのときお市は自害して果てる。秀吉の女になるのがいやだったのだ。
信長はお慈の素肌を撫でまわす。特に手触りがいいように思えた。そしてまた改めて乳房を摑む。そして揉みあげ、乳首を摘み、引っぱり、ひねる。
「あーっ」
とお慈は声をあげ、腰をくねらせる。そのさまが妖しい。恥丘には黒々とした茂りがあった。肌の白さが、茂りの黒さをきわ立たせていた。
お慈はすでに切れ込みを潤ませていた。熱く潤んでいることはわかる。御坊丸に乳を吸わせているときも同じだった。乳首を男に吸われているときも、赤ン坊に吸わせているときも同じ

なのだ。

腰のあたりが甘くなってくる。そして壺の中からじわりじわりと露がにじんでいるのがわかるのだ。壺はしきりに収縮する。しきりに一物を求めているのだ。

あるいはその快感が女の倖せなのかもしれない。母親が子供に乳首を吸わせるのはその快感があるからだ。

乳を吸わせた御坊丸は、遠山景任が死んだために、岩村城にやられた。あまり幼すぎるために、景任の妻だったお高が城主になった。

そのお高が、武田勝頼の武将・秋山信友に口説かれ開城した。信友は御坊丸を人質として甲斐の武田家に送らせた。いま御坊丸はまだ甲斐にいる。

お慈の胸も痛んだ。乳を吸わせたので、おのれの子のように思えるのだ。

信長は武田勝頼を叩き潰すつもりである。御坊丸は勝頼に殺されるかもしれない。御坊丸が人質にとられているからと言って、勝頼を攻めないということはない。

浅井長政は、お市を妻にしていながら、信長に反抗して潰れた。政略結婚もたいして意味がない。同盟の要（かなめ）にはならない。

信長は内腿に手を入れた。そして撫でる。内腿の感触もまた信長を楽しませる。

手ははざまに触れた。お慈は腿を折り立てた。そのほうが男の手は動きやすいのだ。



男の指が切れ込みを分けた。アッ、と声をあげる。恥ずかしい瞬間でもある。指が切れ込みの中で遊ぶ。それから撫であげてくる。

指先が肉の芽に触れ、声をあげ腰をゆすった。腰のあたりがズキンと疼く。

「あーっ、お舘さま」

とお慈は声をあげて、腰を回した。信長の指は壺の中にあった。壺の中でしきりに動いている。

やはり、指では気はいかなかった。もちろん快感はある。快感があるから露が出てくるのだ。快感があるのは壺の入口である。もちろん中にも快感がないわけではない。だから切れ込みを男の手に押しつける。できるだけ壺の入口を刺激されたいのだ。

「お舘さま、お情けを」

と声をあげる。せつなくなってくる。手をのばして信長の股間をさぐる。一物は膨張していた。

このころは、二度も三度も女の体の中に放出することはない。たいていは一度で足りる。だからその一度の放出をできるだけ先にのばそうとする。

齢（とし）なのだ、と思う。若いころは三度も五度も放出した。それだけ気力も続いたのだ。

いまは一度の放出で足りる。再度という気にはならない。

もっとも合戦に出れば、女の肌に触れられない。そのせいか、女の肌が新鮮に思えてくる。城にばかりいて、女ばかりを抱いていたら女もいやになるのだろうが。

指を壺の中に遊ばせる。それで女が悶える。それもまた妙であった。

信長は体を起こし、腰を女の股の間にはさみ込む。女の内腿が開いたり閉じたりしている。尖端を壺口に当てる。壺口は一物が欲しくて伸縮している。尖端がつるんと滑り込んだ。

「あっ」

と声をあげた。そして信長に腕を回し、しがみついてくる。体をゆする。腰を回す。一気に絶頂にたどりついていた。脳の中に閃光が走った。脳の中が白くなり、失神する。ほんの一呼吸の間だが、

「恥ずかしい」

と口走りしがみつくのだ。お慈は壺の中にある一物をいとしいと思った。

## 二

このころ、信長は安土城と京をしきりに往来している。京の宿舎は二条衣棚妙覚寺である。妙覚寺が気に入っていたようだ。



小姓衆十人を連れて山に入り放鷹をする。鷹狩りである。このころ、鷹狩りもまた趣味になっていた。

茶会も趣味である。堺の今井宗久たちが、高価な茶器を献上するのだ。堺の豪商たちはしきりに信長の顔色をうかがっているのだ。

鷹を手首に乗せて放つ。鷹が青空に舞い上がる。近くにいた農民たち十数人が少しずつ信長に近づいて来るのに気付かなかった。ただ一人、源五郎丸十蔵が気付いていた。

農民は一向宗徒である。農民が信長を暗殺しようというのだ。もっとも、農民は命を捨てている。武芸を知らなくても、馬鹿にできない。

鷹が空を舞い信長の腕にもどって来る。小姓衆十人も鷹にみとれていて、農民には気付かなかった。

気がついたときには農民に囲まれていた。鋤、鍬、そして鎌を手に打って来る。

その前に出たのは十蔵だった。十蔵は刀を抜き、農民の首を刎ねる。腰車に掛ける。

胴が両断された。それでも目を赤く怒らせて迫ってくる。

「みな殺しにせよ」

信長は叫ぶ。驚いて鷹が飛び立つ。信長も刀を抜いた。十人の小姓たちも刀を抜く。農民たちはそれでも突き進んでくる。

「悪魔を殺せ」
「仏敵じゃ」
すると、周りから三十人ほどの農民がわき出ていた。ただの野良仕事をする農民だと思っていた。だから気にもしなかったのだ。
どこかに隠してあったらしい竹槍を持って突き進んで来る。
信長も幼いころから武芸はたしなんできた。敵と渡り合える。だが、鎧を着ていれば竹槍は刺さらないが、素肌では刺さるのだ。腹を刺されれば、それで命は終わることになる。
十蔵は竹槍を摑んで引き寄せて斬る。頭を裂く。頭の鉢が皿になって飛ぶ。
竹槍を斜めに切り裂いて、それを農民の胸に突き刺す。
農民は倒れて竹の筒の中に、血をほとばしらせる。死ぬことを何とも思っていないのだ。
「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」
と経をとなえながら、突き進んで来る。
いかにむごく斬っても応えない。
竹を叩いたり払ったりすると刀が折れる。十蔵は脇差を抜いた。これは鎧通しのように作られている。重ねが厚く、刀幅が広い。これだと受けられるのだ。
刀を払いながら、雁金に斬り、腹を裂く。首が転がり落ち、腕が肩のつけ根から斬り放され



る。斬りながら信長を見ていた。
信長に走り寄ろうとする者の首を刎ねる。
「ナムアミダブツ」
もちろん、小姓十人も斬り合う。命を捨てているのだから強い。
信長は、一向宗徒を何万と殺している。女子供も全員焼き殺したりもしている。農民たちが恨むのも当然だった。
「仏敵退散、仏敵退散」
と念仏のように唱える。
十蔵は脇差を投げた。農民の胸に音をたてて突き刺さる。次の男を片手斬りにする。竹槍に頭上を突かせておいて腿のあたりを薙ぐ。足が転がり出る。だが、なおも槍で突こうとしている。信長の前に立った。
「お舘さま」と声をあげた。
「仏敵退散、仏敵退散」
「ナムアミダブツ」
と唱えながら、一向宗徒は突き進んで来る。斬られても斬られても突き進んで来る。十蔵は体を開き躱しておいて斬る。

十蔵は疲れを知らなかった。もっとも三、四人ではたかがしれている。これが百人、二百人となれば、いささか面倒だ。おのれ一人ならいざ知らず、信長を守らねばならない。

十兵衛は小姓三人を呼び、信長を守らせておいて農民に斬り込む。同じ所にはいない。一人、二人と斬って体を移動させる。

農民は一人になっても突き進んで来るのだ。最後の一人を袈裟掛けに斬った。これで立っている者はいない。

信長は床几に坐っていた。二人小姓が竹槍に腹を突かれていた。腹では手当ての方法はない。あとはただ死んでいくばかりだ。

「十蔵、首を刎ねてやれ」

信長の思いやりである。十蔵は小姓の二人の首を刎ねた。残った小姓八人もシュンとなった。

「十蔵、むごく斬るものだな」

倒れた農民の中にはまだ死にきれない者もいる。信長は、小姓たちにとどめを刺させた。

「お舘さまには及びませぬ」

と言って十蔵はシマッタと思った。言いすぎだった。一向一揆には十蔵も参戦している。信長は殺せと命じる。女子供もだ。一カ所に集めては火をつける。

「わしはむごいか」



「申しわけありません、言いすぎました」

「言いすぎはせん、十蔵の言うとおりだ。わしがむごくなるのには理由がある。まず、わしは神道の信徒だ。仏教徒と神道はむかしから争ってきた。仏教は外から来た宗教だ。それがのさばる。神道としてはこれを討たねばならん」

「はっ、わかります」

「そう簡単にわかってもらっては困るがな。武田信玄は坊主である。仏徒である。上杉謙信はわしと同じ神徒である。だから川中島で戦った。意味のない合戦である。仏徒と神徒だから戦った。戦って勝ったとしても、たいして得るものはない。仏徒は野良仕事をして米を作っていればいいものを、坊主にそそのかされて、われわれに戦いを挑んでくる」

「そのとおりでございますな」

「黙って米を作っている農民を殺そうとは思わん。むしろ大事にしてやりたい。一揆の者たちは、われわれ武士に挑んでくる。これは討たねばならん。女子供には罪はないではないかと思うた。だが、この者たちも一揆に協力した者たちであり、わしを仏敵と思っている。三つ子の魂百までも、という。たとえ子供でも親に教えられて、わしを恨む。そして十年経てば敵になる。わかるか」

「わかります」

「そして、もう一つ。仏教界は腐乱しているのだ。高僧たちは自分の利権だけを考える。そして仏教の武将たちを集めてわしを討とうとする。その僧たちに説教されて農民たちは命を捨てるのだ」

わかりはするが、信長は激しすぎる。

生まれつきの神道派だからだ。仏教徒は敵になる。これは生まれつきのものである。

信長は宗教戦争をしているつもりなのだ。もっとも自分から仏教徒を殺すというのではない。一揆として抵抗してくる。それに腹を立てて叩き潰す。

当時、信長は諸国の忍者群に命を狙われていた。その忍者に狙われて生き抜いてきたのだから、相当に運がよかったのだろう。

源五郎丸十蔵がついてはいるが、一人だけで信長を守りきれるものではない。

城を陥す。すると武将や兵たちはもちろん女子供までも殺す。その残忍さに、忍者たちは怒っていた。

「わしが信長を殺す」

忍者たちは、それぞれにそう言っていた。

丹波国西波多野郡の氷上城主、波多野宗長の忍者群も信長暗殺一本にしぼった。宗長は秀治を本家とする丹波波多野一族で、信長の命を受けた明智光秀の攻撃に、次第に追いつめられて



いた。

氷上波多野忍者の竜野善太郎、熊谷采女、桜町十郎、鞆六郎兵衛、雑賀五郎兵衛、菅五郎左衛門らは、死を決して安土城に忍び込んだ。

竜野善太郎は表具師に、雑賀五郎兵衛は墨売りに、ほかの者もそれぞれ商人や芸人となって安土城に入り機会を狙った。

忍装束で城に入り信長を狙うというやり方ではない。安土城にはさまざまな者が出入りする。信長が姿を現わせば、走り寄って刺す。もちろん、おのれは城兵によって殺される。

それが忍者のやり方である。だが、雇われ忍者は人を殺さない。またいつか、殺したほうの将に依頼されるかもしれないからだ。

だが、竜野善太郎たちは波多野忍者である。波多野宗長の臣である。敵将を殺すのも作戦の一つなのだ。

その機会がなかなかやってこない。氷上城は明智光秀に攻められて危ない。信長さえ殺せば、明智勢は引くだろう。竜野善太郎は焦っていた。

ある日、廊下を歩いて来る信長らしい人物を見た。竜野はこれは機会とばかりに走った。そして鎧通しを抜いて信長に体当たりした。鎧通しは信長の腹に刺さった。

「おのれ」

と叫ぶ。侍たちが走ってくる。竜野は庭に逃れた。だが追いつめられ、斬られて果てた。竜野は信長を討ったのだと信じ、よろこんで死んでいった。

だが、腹を刺されて死んだのは信長ではなかった。あるいは安土城には、信長の影武者が何人かいたのかもしれない。

信長自身も何度か忍者たちに襲われているが、その度に助かっている。運がいいのだろう。そうするうちに、氷上城は落ち、氷上波多野は滅んでしまい、安土城に忍び込んでいた忍者たちは去ってしまった。忍者たちは信長に会ったことはない。信長の顔は知らなかった。

武芸者・源五郎丸十蔵は、信長のそばを離れなかった。十蔵は、信長が加増しようと言っても、はじめにもらった二百石だけで、あとは断わった。

「十蔵、おまえも不思議な男だな、将となって戦い手柄を立てれば、一国一城の主になれるかもしれないのに」

と信長は言う。

「それがしはただの武芸者です。一国一城の主になるのぞみはございません。ただ、お舘さまのそばにいれれば、それで満足です」

十蔵は、何度か信長を救っている。十蔵が救ったのではなく、信長にそういう運があったのだろう。今川義元を討った。武田信玄が病死した。みな信長の運である。



源五郎丸十蔵は、いつも信長のそばにくっついていた。信長が寝所にいれば、その床下で眠った。どこででも眠れる男だった。武芸者だから、気配には敏感である。そして暇さえあれば、刀を振っていた。跳躍力もある。刀を振り回しながらそのまま木に走り登る。

戦国時代、庶民は武芸者のことを稲妻使いと言った。稲妻は手妻、手品のことである。それほど武芸者の技が不思議に見えたのだろう。

そのころ武芸者は、武芸十八般という。ただ刀を振るだけではなかった。忍者たちの技と比べて遜色はなかった。忍者をしのいでいたのは刀術である。忍者は刀術をそれほど重要視しなかった。忍術の能力と刀術の能力は違っていたのだ。

十蔵には出世欲というものがなかった。羽柴秀吉は、十蔵と同じころに信長の前に現われている。秀吉はすでに一国一城の主となっている。たしかにめざましい働きであった。秀吉は農民の倅である。出世するのが目的だった。

この秀吉にも、信長と同じような運があった。十蔵には運がなかったというのではない。十蔵はどこまで信長を守りきれるかに賭けていた。それが十蔵の人生だったのだ。

伊賀音羽に城戸弥左衛門という忍者がいた。伊賀国は雑賀党と同じに信長に攻められて多くの者が殺された。雑賀・伊賀は一向宗徒と手を握った。そのために信長に攻められたのだ。

城戸弥左衛門も、信長を憎んでいた忍者の一人だった。憎んでいたが、信長の陣舎に出入り

していた。甲賀の忍者たちも、手柄を立て召し抱えられていたために、陣を借りていた。

弥左衛門は、仲間と共に信長の陣舎に大鉄砲を射ち込んだ。だが弾丸は外れた。その翌日、弥左衛門はのこのこと信長の陣舎に行った。

合戦の最中でもあり、信長は弥左衛門に面会を許した。

「わしの陣に鉄砲を射ち込んだのは、わしに恨みを持つ伊賀・甲賀のものたちのしわざだ。そのほうはわしに身を寄せているわけだから、すぐに探索して討ち取れ」

と命じた。

弥左衛門は困った。探索して討ち取らなければ、信長の陣に出入りできなくなる。まさか自分の仲間である忍者たちを突き出すわけにはいかない。

探索するふりをしながら、信長暗殺を狙ったが、隙がない。忍者と称しながら、忍者にはたいした技はなかったようだ。

そのうちに、別の探索隊によって、陣舎に鉄砲を射ち込んだのは弥左衛門とその仲間たちとわかって捕えられた。明朝首を討つということになった。

もちろん城戸弥左衛門は拷問された。その背後には誰もいなかった。弥左衛門の独断だった。

その夜、弥左衛門は、牢を破って逃げ出そうとした。その伊賀忍者の前に立ちはだかったのは十蔵だった。



逃げようとする弥左衛門の首を刎ねた。

仲間の数人も、十蔵が斬り捨てた。このころの忍者の技というのは、この程度のものだった。

十蔵からは逃げられなかった。たとえ武器はなくても、逃げる術くらいはなければならなかった。術はあったが、十蔵の前からは逃げられなかったということか。

# 十一章　遊女お遊

## 一

天正六年（一五七八）一月――。

安土城に諸国の大名、武将が集まって祝賀を述べる。年末に鷹狩りで捕えていた鶴を天皇に献上した。その返礼の勅使もやって来た。信長は正二位右大臣となった。

信長には、こんな位などどうでもよかった。位で天下を支配することはできない。天下人となるには力しかない。信長は天下を支配しようとしていた。

上杉謙信に贈り物をしたが関係は悪化した。この年の春謙信が急死した。それで北からの不安は除かれた。信長は運のいい男である。武田信玄も上杉謙信も戦わずに死んでくれたのだ。

この年に、信長は四十五歳になっている。まだ老いてはいなかった。信玄も謙信もすでに老いていたのだ。

あと残るは、西の毛利と石山本願寺である。この二つを制すれば、ほぼ天下はおのれのものになる。



信長は茶会を開いた。岐阜城主・織田信忠、宿老・林通勝、近江坂本城主・明智光秀、近江佐和山城主・丹羽長秀、伊勢長島城主・滝川一益、山城勝竜寺城主・細川藤孝、摂津有岡城主・荒木村重などが出席した。

茶器が並んでいた。堺の豪商たちが持ち込んだ名器ばかりである。それを大功のあった武将たちに与える。

また、金倉には一万枚の黄金があった。それを武将たちに見せてやる。信長はおのれの権力を見せつけたのである。信長に次ぐ権力は徳川家康である。家康は、信長に狙われるのを怖れていた。

信長は、九鬼嘉隆に鉄船を造ることを命じた。紀伊雑賀党など、船による合戦を得意とする。これに勝たなければならないのだ。海もまた制覇しなければならない。

羽柴秀吉は播磨に侵入する。東や北は征服した。あとは西である。このころ信長は、鷹狩りと相撲の興行を見物している。徳川家康は信長に馬を献上している。

武将たちは妙に信長をこわがっていた。信長の武将であっても、気に入らぬことがあれば、いつ追放されるかもしれないのだ。武将たちの頭の中には、そういう恐怖が生まれつつあった。

大坂湾で九鬼水軍が、一向宗徒の船を撃破し、本願寺の補給路を断ってしまった。本願寺も

しつっこく抵抗する。これに信長は腹を立てていた。

信頼していた武将の一人、荒木村重が本願寺と毛利輝元と組んで信長にそむいた。こういうことには信長はカッとする。

信長は、村重の部将、高槻城主・高山右近を味方にしようとする。右近はキリシタンであった。それで宣教師のオルガンティーノを高槻へやった。

「右近を村重の陣から外させよ。降伏させるのじゃ。さすればそなたたちの将来も安泰じゃ。神の国も栄えよう。だが、右近が城を開け渡さないときには、そなたたちの首は刎ねることになる」

信長はそう命令した。オルガンティーノは必死で高山右近を説得する。右近は城門を開ける。村重は、右近の妹と子、長男の妻である光秀の娘を送り返してきた。

籠城一年ののち、村重は西へ逃げる。残された村重の妻子、一族数百人は斬られ、はりつけにされた。村重が逃げたからである。逃げなくても同じだったのかもしれない。

信長は京の宿舎妙覚寺にいた。

お遊という美女を老婆が連れて来た。越前で買って来たという。お遊を買わんか、ということだ。



お遊は異様に肌が白かった。越前あたりの港では、むかしからオロシャとの交易があった。そのオロシャの船乗りたちが、港の女と遊んでいく。女たちが子を孕む。生まれた女児たちは美女になった。色が白いのはオロシャの血が混じっているからという。

信長はお遊を買った。だが、寺の中に置いておくわけにもいかないので、洛中に家を買って与えた。十数年前、公卿の娘を囲ったときのようにだ。その娘は信長の意にそわなかったので斬り捨てた。

お遊を連れて来た老婆はお澄と言った。美女を買って来ては武将に売りつける。それをなりわいとしていた。美女たちを獲って来たわけではない。その女と話し合いで連れて来たのだ、女のほうも納得している。

越前にいてもいい暮らしはできない。京に出て来て信長に買われればお澄ももうかるし、お遊の親たちも楽な暮らしができるのだ。

これを信長の〝美女狩り〟と考えた者がいる。柴田勝家がその一人である。勝家は堅物で通っていた。

そういう噂が流れては困る、とお澄を捕まえ湖の中に沈めて殺した。信長は眉をひそめた。よけいなことをしおってと。だが、勝家を怒るわけにはいかない。

美女狩りなどではなかった。信長が命じて美女を探させたわけではない。お澄はそれで生計

を立てていたのだ。当時はよく女買いというのは行われていた。禁じられていたわけではない。お遊だって買われるために来たのだ。それで信長から金をもらえれば、国の両親に送ることができる。

お澄はお遊一人を信長に売ったために殺された。悪事を働いたわけではないのだ。

信長は、源五郎丸十蔵だけを連れてお遊の家へ行く、目立たないほうがいいのだ。それとわからないように近侍が離れてついていく。妙覚寺からさほど遠くない所である。

信長が部屋に入る。遊び女だったが礼は心得ていた。それに信長のことは知っていた。天下の覇者であることも。

「わたしのような女でよろしいのですか」

「気にするな、お遊を抱くときのわしは、ただの男だ、堅くなっていたのでは、女の色香が出ぬ」

だが、信長が怖ろしい。信長の殺戮は聞いている。残念ながら信長は酒はのまない。酒をのめば、むつまじくなるのも楽なのだ。

お遊の世話をする女を二人置いている。湯に入り、夜具の仕度をさせる。

「可愛がって下さいませ」

と両手をつく。力を抜け、と言ってもはじめは仕方がない。そのうちに馴れるだろう。抱き



寄せて、衿から手を入れて、乳房を探る。遊女だったのだから、男のあつかいには馴れている。だが信長は別だった。

乳房は柔らかだった。乳首も大きい。衿を開いて胸を見た。たしかに異様に白かった。これまでの肌の白い女たちの白さとは異なっていた。

「この色の白さは、生まれつきであろうな」

「はい、母がわたしと同じでした」

乳房を揉む。はじめての女だ、その気になるまでには時間がかかる。信長は女に対してはせっかちにはならない。鳴くまで待つのだ。腿をさらした。その白い腿を撫でる。

信長の残忍さは聞いていた。お遊は信長が怖ろしかった。荒木村重のことは、お澄から聞いて知っていた。

村重は信長の部将の一人だった。それなのにもとの将軍・足利義昭、石山本願寺と組んで反逆した。なぜだったのか。信長が人を殺しすぎるからか。

信長に反逆すれば殺される。いかに足利義昭、本願寺と組んでも、信長に勝てるわけはない。それがわかっていながら、謀叛した。どこかに勝目を見ていたのだろうか。信長のやり方についていけない、と思ったのか。

城を攻められた。守りきれなくなる。そして侍何人かと城を逃げ出す。妻や側室、子供たち

もいたはずである。殺されるとわかっていても一緒に連れてはいけない。

城が落ち、村重の一族、女子供たちが捕えられた。そのみんなを殺した。もちろん、みな覚悟の上だったのだろうが。

お遊の心は冷えた。怖ろしかった。裏切った者に対しては、容赦がなかった。信長の性格がよくわかる。

信長の手が乳房を揉んでいる。乳首は大きくなっているが、まだ桜色だった。桜といっても八重桜など、色の赤いほうだった。多くの男に抱かれ吸われていれば、色は濃くならなければならない。それが美しい色をしている。現代風に言えばメラニン色素が少ないのだ。それで色がつかない。

乳房を揉む信長の手は温かかった。武骨な指でもなかった。お遊を夜具の上に仰臥させる。そして湯帷子の前を開く。胸から腿まで白い肌だった。茂りもまた申しわけ程度に生えているだけだ。

「白い、白いのはいい、白いのは美しい」

信長の手が肌を撫でまわす。もちろん、それがいやだというのではない。信長の心の中が怖ろしいのだ。お遊の胸は冷えていた。

信長は裸になれと命じた。湯帷子を脱いで裸になる。うつ伏せにされた。そして温かい手が



尻を撫でる。

「よい尻をしている。そなたはわしの女たちに比べても遜色がない。それに手触りもよい。よい女だ」

「ありがとうございます」

「だが、少し気がのらないようだな」

「そのようなことはございません。ただ、お舘さまに馴れないだけでございます」

お遊はギクッとなった。腹の中を読まれているのだ。お遊が信長をこわがっているのを感じたのだ。ただの男でなかった。信長が怖ろしいのだとは言えない。

「そのうちに馴れます。しばらくご容赦を」

「わしがこわいのだな。いろいろと噂を聞いているようだな。わしに逆らわないものは殺さない。わしは神道の信者だ。仏教の信者を殺すというのではない。わしに敵対してくる。それを殺す」

「はい、わかっております」

「そなたが仏教の信者でもかまわぬ。わしに害意がなければな。そなたは美しい。美しい女はよき女だ」

「そのようなことではございません」

「よい、そのうちに馴れてこよう。わしはそれほどに焦りはしない」

信長は尻の溝を分けた。そこから手をのばしてくる。切れ込みはまだ潤んでいなかった。怖れていては濡れてくるわけはないのだ。信長はそこから手を放して、お遊の手を股間に誘わせた。一物を口でしゃぶれば、切れ込みも潤んでくる。これが信長の優しさかと思う。

信長は、お遊の体が潤んでいないことを知っている。愛撫されても潤んでこないのだ。それを知って信長はおのれの一物を与えた。一物を口にすることによって、女の体は潤んでくることを知っている。

信長の思いやりだろう。買った女がはじめから潤まないからと言って叱るわけにもいかない。お遊は信長の一物を押しいただいて舌を這わせた。舌で舐めまわす。そして尖端を口に咥えて、一物を回すようにする。唇が一物によって擦られる。唇にも性感はあるのだ。

わたしは信長公の一物を舐めている。そう思うことよって、おのれの気分を高めようとする。おのれは恵まれた幸運な女だと。

一物を咽まで咥えた。咽に押し当てる。そして咽の粘膜に擦りつける。浅く咥えてはしゃぶる。

それほど濡れる体質ではなかった。客を迎えてもそこは濡れてこない。それで唾液を使うこともしばしばだった。客にはそこはいじらせない。ただ客の一物を入れさせるだけである。



好きな男がいなかったわけではない。好きな男に抱かれるときには、そこは充分に潤おったのだ。そして男が入ってくると、声をあげしがみついて気をやった。

女の体というのはおかしなものである。商売で買った男には、ほとんど感じない。感じないまま入れさせて放出させる。濡れていないから、客はかえって刺激が強すぎてすぐに放出する。かえってそのほうが体は楽だった。

信長にも買われた身である。お遊を買った客とたいして変わりはしなかったのだ。だが、唾でごまかすわけにはいかなかった。

「まるで小娘のようだな」

と信長は言った。

お遊は、しばらくの間はおのれから濡れようとはしなかった。

「もっと気を楽にせよ。ただの男と思え、ただの男では、体は潤おってこないか。お遊はいい女だ。美しい。手放しはしないぞ」

「うれしゅうございます」

と一物を口から放して言った。

信長を客と同じだと思ってはいけないのだ。顔を上下させる。唇の間を一物が出入りする。そして咽深く呑み込む。そうしていれば体は潤むはずである。

神経を股間に集中させる。熱くなってはこないのだ。お遊は焦った。早く濡れて欲しかった。信長は思いやりのある男だ、と思い込む。だが情は湧いてこない。客をとっている身だからか。だが、好きな男に抱かれるときには、たしかに潤んだ。濡れた。潤まない体ではないはずだ。

信長に腰を引き寄せられた、裾がめくられ尻がむき出しになった。温かい手が尻を撫でまわす。客に対しても、好きな男に対しても、このような姿勢になったことはない。恥ずかしいと思う。

信長の指が溝に這ってくる。指は切れ込みにのびてくる。その指がいきなり茶色い小菊に突き刺った。お遊は、アッと声をあげた。

指が中に入ってくる。お遊はあわてて、信長の指を引き抜くと、その指を舐めた。

「いやか」

「はじめてでございます」

臭いをかがれたくなかった。指をしゃぶった。

その間にもう一方の信長の手が股間に入っていた。



## 二

天正七年（一五七九）――。

一月五日、水軍の九鬼嘉隆が安土城に祝賀に来る。毛利水軍に勝てるだけの鉄船を用意している。

一月十一日に堺の豪商茶人・津田宗及に安土天守閣を案内して見物させる。

二月に、東山に放鷹する。

四月十日、播磨攻略中の羽柴秀吉の援軍として明智光秀を送る。

七月十六日、徳川家康、信長に馬を献上。

八月九日、柴田勝家、加賀侵入をはじめる。

十月二十四日、明智光秀、安土城に至り、丹波・丹後両国を平定したことを報告する。

信長は多忙であった。天下を平定するといっても、敵はあちこちにいる。石山本願寺もまだ抵抗している。毛利輝元も残っている。いま少しと言っても、平定には手間がかかる。

徳川家康は三河にあって、しきりに信長に怯えていた。家康は信長の家臣ではない。同盟しているといっても、そんなものすぐに崩れる。

家康は、信長の娘徳姫を嫡子信康の妻にした。もちろん、それくらいでは安心できない。信康は猛将だった。いずれは徳川家を背負って立つ男だ。

家康は信康があまり表に出るのを好まなかった。信長に目をつけられるのがこわい。信康と名を付けたのは信長の信の字をもらって付けた。だが信長はそんなことぐらいではごまかされない。

いずれは、信長によって徳川家は潰されるだろう。信長に抗しては、一気に踏み潰されてしまう。いまや信長の力は甚大である。どうすればよいのか。ずっと考えていた。

堺の豪商たちも、信長を怖れている。信長は堺に対して二万貫の軍資金を出せと言った。それだけならまだよかった。堺に奉行所を置くと言ったのだ。

つまり信長の支配下になるということだ。浪人たちを集め、堀を掘って抵抗しようとした。信長に攻撃されれば堺など一たまりもない。更に信長は堺の人をみな殺すと言っている。信長のことだからみな殺しにするだろう。

堺の豪商たちは、信長に屈伏した。そして奉行所を置き、信長の支配下になった。信長の機嫌を取るために、高価な茶器などを贈る。

堺の商人たちも信長を怖れている。家康は堺に遊び、商人たちと会う。

そういうことは、信長は全く知らなかったし、考えてもみなかった。



九月に信長は安土城に帰って来る。

まだまだ敵はいる。天下平定は先のことになりそうだ。

西の毛利は石山本願寺と組んでいる。武田家は信玄が死んでも、まだ勝頼がいる。だが問題は本願寺だろう。これはしつこい。

徳川家康のことも気になる。同盟者であって家臣ではないのだ。

ここまでくると同盟者などいらぬ。すべて家臣でなければならないのだ。

信長は神道である。神道だから仏教徒が憎い。本願寺光佐は、農民をけしかける。農民は戦うようには生きていない。それなのに光佐に命じられて、命を捨てて信長の軍に挑んでくる。

農民は殺しても、殺しても、次から次へと湧いてくるのだ。農民にとって光佐は、仏の権化である。その権化さまが命令される。農民は命など惜しくはないのだ。

田畑を耕しておればよいものを、と思う。抵抗しなければ殺しはせぬ。農民の抵抗に、信長は腹を立てていた。

# 十二章　後家のお市

## 一

正親町天皇に頼んで、石山本願寺に勅使を下した。信長は、本願寺に覚書を送った。石山籠城中のすべての信者を許し、加賀国二郡を返すと。

天正八年三月十七日のことである。二十日に本願寺光佐は、大坂退城を約し、和議が成った。もちろん、まだ本願寺はある。光寿が守っている。次々と崩していかなければならない。

信長は、二条衣棚の妙覚寺にいた。安土城と京は近い。船に乗って琵琶湖を渡れば、その日のうちに京に着く。

信長は近臣を連れて、琵琶湖に浮かぶ竹生島に参詣に出かけた。気晴らしである。船上でも片道六里はある。

その日のうちに帰るまいと、奥女中十二人が遊びに出た。男に会いに出かけたのもいた。あるいは桑実寺まで羽根をのばしていた。この中には信長の手のついた女もいた。主人のいない



間の命の洗濯である。

ところが、信長は意外に早く帰って来た。

女中たちが遊びに出ていると知って、信長は激怒した。女たちに裏切られたような気になったのだ。遊びに出てよい、と許したわけではない。

庭にかがり火を焚き、信長は縁に坐って、女たちが帰ってくるのを待った。

信長帰城と知らせを受けて、女たちはあわてて帰ってくる。

その女たちを庭に坐らせた。そばには源五郎丸十蔵が坐っている。女たちは青ざめて坐っている。十二人が揃った。

「みな揃ったか、主人がいないのをよいことに、遊びに出るとはけしからん。この者たちの首を討て」

近侍が立ち上がり、刀を抜く。女たちはびっくり仰天、悲鳴をあげて逃げまどう。

近侍たちが襲いかかる。誰一人止める者がいなかった。止められる者がいなかったのだ。

十蔵は五人の女を斬った。他は近侍に斬られた。十二人の女が斬られていくのを、信長は顔色も変えずに見ていた。十蔵は人を斬るために信長に仕えている。女は斬りたくはないが斬らねばならない。侍の一人が、

「桑実寺の和尚が、お詫びにと来ておりますが」

「ここへ通せ」
と言った。
和尚がおそるおそる出て来て庭に両膝をつき、両手をついた。
「おのれ」
と叫んで、信長は刀を抜いた。刀を振り上げたときには、和尚の首は転がり落ちていた。十蔵が斬ったのだ。
「お手を汚されてはなりませぬ」
うむっ、と唸って信長は刀を鞘に収めた。
女中たちの中には、男に抱かれた女中が四、五人いた。それに信長はより腹を立てた。家人たちが死体を運ぶ。信長は足音荒く居間に入った。
許しもないのに女たちが勝手な真似をする。城内これではしめしがつかないのだ。居間にもどってきた。信長はむかむかしていた。
信長は奥へ入る。廊下を歩いていた女中の襟首を摑んで部屋の中に引きずり込んだ。そして押し倒す。
「いやでございます。お許し下さい」
と暴れる。



「何がいやじゃ」
と顔を殴った。裾をめくり上げる。肉付きのいい腿があらわになった。色は白くない。女としての肉はつけている。十二人の女中が斬られた。もちろん、この女も知っている。いや、と言われてカッとなった。おのれの前でいやと言える女はいないはずだった。
女は逃げようとする。女の腰を蹴った。ひっくり返る。
「着物を脱いで裸になれ」
なおも逃げようとする。本能的に信長に恐怖したのだろう。襟を摑んで力まかせに引っぱる。女は転んで裾を乱した。裾を踏みつけた。更に逃げようとする。着物がずれて尻をむき出しにした。股間は黒々としていた。

信長は、安土城に徳川家康を呼び出した。
「築山殿を斬れ」
と命じた。
築山殿は家康の正室である。家康は動揺はしなかった。いずれはそういうことになろうかと思っていた。築山殿は、信長が桶狭間で討った今川義元の姪であった。
家康は、若いころは義元の人質となっていた。義元の姪を妻にしてもおかしくはなかった。

「武田勝頼と内通していると告げる者があった」
「わかりました」
と家康は言った。信長には逆らえないのだ。逆らえば徳川家が危うくなる。信長と同盟はしているが、軍力は信長のほうが十倍もある。
義元の姪だから、武田に通じていずれは牙をむくと考えたのだ。いまは武田勝頼に攻められても怖ろしくない。だが、これも事実ならば、信長への裏切りになる。内通は信長の思い過ごしだろう。内通の証拠があるわけではなかった。その証(あかし)をお示し下され、とは言えなかった。
家康は、仕方なく家来に築山殿を斬らせた。世間では、築山殿は悪女だったと言う。だから家康が斬らせたのだと。だが悪女だったわけではない。ただ、今川義元の姪だった。そのことだけで斬られたのである。
だが、それだけではすまなかった。二カ月後、信長は、信康にも腹を切らせよ、と言った。家康は眉をひそめた。信康は嫡子である。勇猛である。もちろん、家康は信康に家督をゆずるつもりだった。信長の信の字は信長の一字をもらったものであり、信長の娘五徳を正妻にしていた。いかに信長でもと思っていた。
だが、信康は築山殿の産んだ子だった。信長にはいつかは信康が仇をはらすと思えた。築山殿を殺さなければ信康を殺すことはなかった。だが、築山殿を殺したからには信康も死んでもらわなければならない。



家康は、信康の命が惜しかった。嫡子としては力を備えていた。智力もあった。だが、信長の命令にそむくわけにはいかない。
信長に謀叛しても勝てる見込みは全くない。信長と戦えば、徳川家はつぶれてしまう。難題だが従わなければならない。
「徳川家のためだ、死んでくれ」
と信康に言った。父家康の立場もわかっている。おのれが生きていたのでは徳川家が危ない。
信康はあっさりと自刃(じじん)して果てた。家康は涙を流したという。
あるいは信長は徳川家を潰すつもりだったのかもしれない。築山殿を殺せと言えば、謀叛するのではないか、信康に自刃させろと言えば、家康が反抗するのではないかと。
信長はそれを待っていた。だが家康は、築山殿を殺し、信康に自刃させた。
家康はこの日から何かと考えはじめた。信長は怖ろしい男だ。信長と戦って勝てるものはない。
息子の仇を討ってやる、と思ったわけではない。すべては徳川家のためだった。家康はじっと考えた。
いずれは信長が将軍になる。そうなると徳川家は潰される。信長は少数の近侍と共に妙覚寺

に、そして新しく改築した本能寺にいることが多い。これを討つのは簡単だ。だが信長の諸将はこれを許さない。信長の仇討ちとばかりに襲いかかってくる。これでは徳川家は潰れてしまうのだ。

## 二

お市に信長から声がかかった。信長から忘れられたのか、と思っていた。声がかかって心が妙に浮き立つ。お市は子供のころから信長を慕っていた。

お市にとってははじめての男も信長だった。女にしてくれたのも信長だった。いつも信長のそばにいたかった。

だが、信長の妹として、近江の浅井長政に嫁にやらされた。政略結婚だったのだ。だが幸いにして長政はいやな男ではなかった。長政とは仲むつまじかった。信長を慕いながら、長政と一生を共にしてもよい、と思った。

それほど長政は優しかったし、神経のこまやかな男だった。長政の子を三人も産んだ。みな女の子ばかりだった。

だが、長政は信長にそむいた。朝倉義景と同盟していたからでもある。長政にとって妻子よ



りも義景との同盟のほうが重かった。

長政の小谷城は信長に攻められ、落城する前に、お市と子供たちを城の外へ出した。そして長政は自刃して果てた。

お市は子供三人を連れて安土城にもどって来たのだ。長政は信長を裏切った。自刃したと聞いても心が傷むことはなかった。三人の子の父親ではあるけれど、いまは長政を思い出したりはしない。

信長を裏切った男なのだという思いがある。いとしいのは信長である。どのように残酷であってもよかった。

信長は、留守の間に遊びに出たということで十二人の女中を斬殺した。我の強い信長はおのれの意に添わないと殺す。

徳川家康の正室築山殿を斬らせ、その子信康をも自刃させた。そのことも耳に入っていた。だが、お市には関りのないことだった。

お市は体を清め、枕席にはべった。寝間に信長が入って来た。

「ずいぶん、お待たせになりました」

「ほう、それほど待ったか、長政を攻め殺したわしを恨んでいるのかと思うておった」

「わたしの男は、お舘さまだけでございます」

「そうか、それは知らなかった。そうと知っていれば、もっと早く声をかけるべきだったな」
「わたしは、お声がかかるのを首を長ごうして待っておりました」
「それでなくてもお市の首は長い」
信長はお市の肩を抱いた。
「体がよい匂いがするな」
「香をたいております」
「香とな、そういう心掛けはよい。香の香りが気持ちを落ちつかせてくれる。だが、お市の匂いもよい」
とお市の衿を開いて胸もとに鼻を押しつける。
「そうか、待っておったか」
湯帷子の上から乳房を押えた。豊かな膨らみがあった。それにひどく柔らかい。
「少し肉がついたか」
「もう、三十四になります」
「三十四か、だが、まだ充分に美しい」
「ありがとうございます」
三十四になったか、と思う。それだけ信長も年をとった。四十八になっている。あと二年で



五十歳なのだ。
衿から手を入れて乳房を手に包み込んだ。たっぷりとした乳房である。三人の子に吸わせた乳房だ。もっとも乳母はいたのだろうが、乳房が手に重い。
その乳房を揉みあげる。あーっと哀しげな声をあげた。
お市は乳房を揉まれてズキンときた。信長に抱かれるということで体は潤んでいた。潤んでいたというよりも燃えていたと言うべきか。乳首を指の股に挟まれて、アッ、と声をあげた。それほど体が敏感になっているのだ。
お市は自分で衿を拡げた。白い胸もとだった。タマゴの剝き身の白さである。肌はしっとりとしていた。
「女盛りだな」
「いいえ、盛りは過ぎました」
「並の女ならば過ぎていようが、お市は別だ」
その乳房を男の手が包み込んでいる。乳首はすでに充実して、鮮紅色に染まっている。色が白いだけに、濃く色に染まることはない。
信長は、指の股に挟み込んで、指の間に出た乳首の頂きを舌で舐めた。お市は、あーっと声をあげて腰をにじらせた。壺の中が熱くなっている。露がにじみ出てくるようだ。露が出てく

ると、そこがむず痒くなる。

何年ぶりかのことで、体はとうに燃えている。乳首を舐められただけで、もう信長を受け入れたくなっていた。

腰が自然に動く。せつなくなっているのだ。

「お舘さま」

と声をあげる。

乳首が咥えられた。手が肌を這う。紐は解かれ、前は拡げられ、肌をさらしている。脂が乗っていて光沢があった。腰と腿には、たっぷりと三十女の肉をつけていた。

好きな男の手が触れてくると快さを覚える。声をあげて信長に抱きついた。思わず声が洩れる。肌を男にこすりつける。男の手は尻を撫でていた。

乳首が吸われ、咬まれる。全身が甘くなっている。男の足を腿の間にたぐり寄せる。そして男の腿を思いきり閉める。おそらく壺口も締まっていることだろう。せつなくなって声をあげる。

浅井長政も優しかった。自分だけ足りればいいというようなまぐわい方ではなかった。お市の体を手で指で、そして口で愛撫してくれた。長政の腕の中で悶え狂った。

男によって愛撫の律動が違う。お市の体は長政の律動に馴れていた。信長の律動は長政とは



違っていた。もっともお市は長政と信長の二人しか知らない。

もっとも長政に抱かれる前に、お市は信長によって女になっていた。だから、長政にもすぐ馴れていった。

信長の手がはざまに入ってきた。はざまを上下に撫でる。そこは肉がついてぷっくり膨らんでいた。切れ込みを分けたのではない。指にわずかに力を加える。すると指が滑り込んできたのだ。

「あっ」

と声をあげた。そこはとろとろと露がたまっている。指が躍った。指の腹が肉の芽を撫であげる。

「ヒッ」

と声をあげて、腰をゆさぶる。体は甘いもので充ち充ちていた。じっとしていられない。手をのばして男の股間を探る。一物に触れた。一物を握る。それは怒張していた。

それをしっかり握る。堅いのがうれしかった。男の一物はいつも堅いとは限らない。その点女とは違っていた。

「口取りさせて」

と言った。一物を口にしたいのも女の本能である。一物を口の中で感じるのも、女の倖せの

一つである。体を起こした。そして一物を眺める。それは神々しくもあった。

信長は、佐久間信盛父子を追放した。石山城を攻撃しきれなかった、その戦いぶりを責めたのである。信盛父子は三十年来の重臣であった。

また、老臣の林通勝をも追放した。かつて弟の信行が謀叛したとき、林は信行についた。柴田勝家と林は信行の家臣だった。そのときは許した。

それなのに、いま、どうしてということになる。林通勝はいまや不用になったのか。勝家はまだ使いようがあったのだろう。

これには、信長の家臣たちはびっくりした。家臣団は膨れ上がっている。少し整理したかったのだろう。あるいは部将たちの気持ちを引きしめたかったのか。

それにしても、石山本願寺攻めに功がなかったと言って、それだけで追放するのはおかしい。あるいは、信盛は敵の農兵を殺したくなかったということを信長に見抜かれてしまったのか。

林通勝にしても同じだ。あまり昔のことで信行のことは忘れていた。信行についたことが罪ならば、そのときに追放すればよかったのだ。だがそのときには通勝が必要だった。だから許した。いまは必要ではなくなった。だから追放するという。

信長の部将たちの間で動揺が起こった。対岸の火事ではなかった。いつ自分の身に降りかかってくるかしれないのだ。信盛の次は自分と思う者も多かった。



それを強く感じたのは、徳川家康である。正室と嫡子を信長に殺されたのだ。次は自分だろうと思った。

信長は部将が動揺していることは全く知らなかったし、考えもしなかった。部将たちの気持ちを引き締める効果はなかった。何かで失敗すると、すぐに追放される。そういう怖れをいだかせただけだった。だが、誰も何もできないのだ。信長は大きくなりすぎた。

お市は信長の一物を口にしていた。咽に押し当て頭を振る。一物を口から出して、

「お出しなさりませ」

と言う。

「それほど早くはない」

と答える。お市は口で信長の精汁を受けたかったのだ。

「口でお受けしとうございます」

「あとのことだ」

お市は再び咥えて頭を上下させる。一物は唇の間を出入りする。口でしながら、腰をくねらせる。自然に動くのだ。

「上になります」

と言った。体を起こし、男の腰を跨ぐ。腿を大きく開かなければならない。それが恥ずかし

くもある。切れ込みも開くのだ。

一物を手にして男の腰を跨いだ。尖端を切れ込みに押しつける。そして肉の芽に当てた。

「あーっ」

と声が出る。背中をのけ反らせ、腰を振る。一物を振る、回す。尖端は弾力があってなめらかだ。それが快く芽にこすりつけられる。

尖端を壺口に当てる。一物が壺の中に滑り込んでいく。また声をあげる。思わず腰を振る。男の両手が尻をかかえる。

やっと一物が壺に収まったのだ。一物が襞に触れている。それがうれしかった。壺はいっぱいになっている。

「いっぱいです」

と声をあげた。腰の動きが早くなる。だがこの姿勢では気がいかない。気がいかなくても悦びはある。

徳川家康は、岡崎城にあって、このところ浮かない顔をしていた。

正室の築山殿を、信長に命ぜられて斬殺した。更には嫡子の信康を自刃させた。築山殿はとにかく、信康を死なせたのは惜しかった。



徳川幕府ができてからも、家康は信康のことは忘れられなかったという。何かある毎に信康が生きていればと考えた。

築山殿は、正室でありながら、家康に寵されなかった。そのために、寝室に男を引き入れて、その男に淫らに抱きついた。淫乱であったと言われている。

築山殿は、美男の医師・減敬にうつつを抜かした。毎夜、寝間に誘い込み悶え狂った。この減敬は、武田の回し者であったという。

その減敬を通じて、武田勝頼に情報を送っていたという。それで信長の命令で斬られたという。だが、これは後世の作り話のようだ。

信長が築山殿を斬らせたのは、今川義元の姪であったからである。信長は桶狭間で義元の首をとった。だから、築山殿は信長を恨んでいる。

信長もそれを気にしたのだろう。築山殿を殺せと家康に命じた。彼女は家康の肌にも触れられず、悶々としていた。それで他の男を求めた。ものの本には築山殿を悪女としている。

信長は、築山殿のあとに信康に自刃させよと、家康に命じた。信康を死なせるのは耐えられなかった。だが、信長の命にそむくわけにはいかなかった。

そむけば、徳川家は潰れてしまう。信康が築山殿の産んだ子というだけである。

「作左、どうしたものかのう」

と重臣の本多作左衛門に言った。信長を討つことは、さしてむつかしいことではない。信長は近侍の五、六人を連れて出歩くことがある。

京の妙覚寺の近くにお遊という女を囲っている。京にいるときにはよくお遊のもとに遊びに行く。そのことは調べていた。

そのときに討ちとれば簡単なことだ。だが、そのあとに信長の部将たちがどっと押し寄せて来る。主君信長の仇として。そうなれば徳川家はあっという間に潰れてしまうだろう。

このままにしておいても、信長は家康を潰す気でいるようだ。

信長は、佐久間信盛と林通勝を追放した。たいした理由もないのに、三十年も信長に仕えてきた部将たちである。加えて、安土城の女中十二人の首を刎ねたことも家康の耳に入ってきている。

「信長公の部将たちも、みな怖れております」

と作左衛門が言う。

「次は我が身かと」

「だが、信長公が討たれれば、一団となって部将たちが襲いかかってくる。ひとたまりもあるまい」

「誰か信長公を討ってくれればよろしいのですが」



「誰かとは誰だ、と聞いても作左には答えようもないな」

家康は信長の味方のようなふりをしていて、誰かに信長を討たせる。それしかない。だが、その誰かは思い当たらない。

「作左、その誰かを探せ」

「難題でござりまするな」

「徳川家のためじゃ。内密にな」

「心得ました」

堺の商人たちは、信長の死を願っている。だが、商人たちには金はあっても兵力がない。誰に信長を討たせるかだ。

# 十三章　豪商の娘

## 一

堺の豪商、今井宗久がおのれの娘お良を信長に献上した。

そのころ、宗久と徳川家康の密議が行われていた。信長暗殺の方法である。堺の豪商たちは宗久を加えて信長に恐怖を覚えていた。

堺は自由な港町であったが、いまは信長の支配下にある。堺には奉行所がある。豪商たちは見張られているのだ。

家康は、信長の命令で正室の築山殿を殺した。築山殿が今川義元の姪であったためであり、武田に通じているという理由だった。

更に、嫡子の信康に自刃を命じた。信康は築山殿の生んだ子だった。築山殿を殺せば、信康も死なせなければならない。信長は母の仇になるわけだからだ。

家康は涙をのんで信康に自刃を命じた。それを拒めば、徳川家は潰される。家康は何とか徳



川家を守っていきたい。それだけですんだわけではなかった。

信長は徳川家を潰すつもりかもしれない。信長はそのようなことを平気でやってのける男だ。信長のこれまでのやり方を見るとわかる。

そのあとに、三十年来の重臣である佐久間信盛父子を追放した。石山本願寺を攻撃しきれなかったという理由である。

老臣の林通勝をも追放した。むかし、信長の弟信行とともに謀叛したという理由である。柴田勝家も林と共に謀叛した。もっとも柴田は信行の家臣だった。

この二つの出来事で、部将たちは信長に怯えた。いつ追放になるかわからないのだ。柴田勝家は、次は自分だと怯えていた。

これまで信長のために働いてきた。佐久間信盛だって、林通勝だって同じだ。織田家にとって大事にしなければならない部将たちである。

信長の気分次第では、いつどうなるかわからないのだ、と言って信長に謀叛するわけにはいかない。

家康は信長の家臣ではない。同盟者なのだ。信長が天下をとれば、同盟者は不要になる。不要なものは切り捨てるということになる。そうなってからでは遅いのだ。

「いまのうちに何とかしなければならん」

「左様でございますな」

宗久とはいままでにも話し合ってきた。信長が何を考えているのかわからない。それが怖ろしいのだ。

これまで、宗久とは腹のさぐり合いをしてきて、気持ちが同じであることがわかった。あとはどうして暗殺するかだ。家康が兵を出すわけにはいかない。宗久には兵はない。

信長は京に来ると本能寺を宿舎にしている。これまでは衣棚(ころもだな)の妙覚寺だったが、手入れをして本能寺に移った。ときどき、本能寺で茶会をやっている。

「どなたか、おいでになりませんかな」

宗久は疑われないために、娘のお良を側妾としてさし出した。

信長が本能寺にいるときなら、四、五十人の近侍がいるだけである。討つのは簡単だ。信長の部将たちは外に出ている。

京には誰もいない。

「明智どのの部将、斎藤内蔵助どのとは親しくしてもらってはおりますが」

だが、簡単に打ち明けるわけにはいかない。

信長に知れれば滅亡を覚悟しなければならないのだ。

「わたしが、斎藤さまの腹の中を探ってみましょう」と言った。



今井宗久が、斎藤内蔵助に白羽の矢を立てたのには理由がある。内蔵助は敬虔(けいけん)な仏教の信者である。信長は激しい神道派である。

内蔵助と信長は対立する立場にある。もっとも内蔵助は、仏教徒であることを隠してきた。

信長にとって仏教は敵である。これまでにも十万に近い仏教徒を殺してきた。

信長に高野山に追放された佐久間信盛は、仏教徒ではないが、石山城にこもる仏教徒たちを殺すにしのびなかった。そのために攻撃の手が鈍ったのだ。

内蔵助も主人である明智光秀とともに、いずれは追放されることになる。信盛が追放になったときに、内蔵助はそれを感じていたはずである。

内蔵助ならば、信長暗殺に協力してくれるのではないかと考えたのだ。信長は仏教の敵であり、悪魔なのだ。

宗久は京に来ている内蔵助に会った。家康が内蔵助に会うわけにはいかない。家康は信長暗殺には関りないという顔をしていなければならない。

宗久は茶碗のことで内蔵助に会った。極秘の交渉である。露見すれば首がとぶ。宗久も必死である。

宗久は高価な茶碗を庭石に落として割ってしまった。

「高価な茶碗も、手が滑っただけで割れるものでございます」

内蔵助はじっと宗久の目を覗き込んだ。
「本気か」
「はい、本気でございます。命を賭けております」
宗久もじっと内蔵助の目をみつめた。
「部将はいくらもいる。どうしてわしに目をつけた」
「徳川さまも、斎藤さまならばと申されました」
「家康どのがか」
「はい、立場は斎藤さまも徳川さまも同じです」
「そうか、家康どのもか。これまではわし一人ではどうにもならなかった。いずれはわしも首を討たれるであろうと思っていた」
信長に怯えていないのは、羽柴秀吉くらいのものだろう。他の部将たちは、おそるおそる信長の顔色をうかがっている。謀叛したいのだが、たとえ信長を討っても、そのあと、部将たちが襲いかかってくる。
信長に怯えていた部将たちも、主君が討たれれば、いやでも主君の仇は討たなければならなくなる。
「わかった。わしが引き受けよう。そのように家康どのに申し上げてくれ」



「有難うございます」
と宗久は頭を下げた。
内蔵助は、明智光秀から一万石をもらっている部将である。光秀も仏教の信者である。だが、このことを光秀に告げるつもりはなかった。
おのれ一人でやるつもりでいる。内蔵助だって一千人の兵を動かすことはできる。おのれ一人が犠牲になれば、一向宗徒、本願寺の恨みを晴らすことができるのだ。
「宗久どの、徳川家康どの、そしてそれがしの三人が知っているだけにしてもらいたい。どこから洩れるかわからない」
「わかっております。徳川さまも必死でございます。三人だけにしておきましょう」
たのむぞ、と内蔵助は言った。

## 二

今井宗久の娘お良は可愛い女だった。目に張りがあった。いかなる美女も目に張りがないと魅力がない。そういう女を駄目という。
信長はお良を本能寺に入れた。安土城にもどれば何人もの女たちがいる。京にはお遊を別に

住まわせているだけである。お遊は越前の遊女だった。

女たちは、信長の気持ちを和やかにする。天下を取るには女たちは欠かせない。美女たちがいたから、信長もここまでやってこれた。

お良は白無垢姿で枕席に両手をついていた。お良にとって信長は怖ろしい男だった。抗うと女子供までも殺す。比叡山の僧たちも、一向宗徒の農民たちも、まとめて、何千人という人が殺されたのだ。

父宗久は堺では、権力を持っている。だがその父までが信長を怖れている。すでに信長は天下を掌中にしている。残るは、西の毛利だけだ。武田勝頼も、むかしの力はない。

「ここへ来い」

と信長はおのれの膝をたたいた。怖ろしくて体が震えている。

「どうした。ここへ来い。わしがいやならば帰ってよいぞ、わしは女には不自由しておらん」

そうですか、と帰ってしまえば、父宗久の首がとぶことになる。もちろん、宗久は娘の気持ちは聞いている。無理に信長のところへやったのではない。

お良は立とうとして足がよろめいた。ようやく信長の膝の上に尻を乗せた。お良は小柄な女である。だが痩せているというのではない。女としての肉はつけていた。

「どうした。震えているではないか、わしが怖ろしいか。わしはいやがる女を抱こうとは思わ



ん」

いいえ、と激しく頭を振った。

「まさか、手入らずではあるまいな」

信長にとっては生娘は帰蝶とお市だけだった。お良は頭を振った。

「どっちなのだ。好きな男はいたのか」

はい、と小さな声で言った。男の手が入っているのかどうかは、抱いてみればわかることだ。お良は十九歳になっている。男を知らないわけはない。堺は自由な町である。父宗久も男と女のことについては厳しくなかった。

信長は衿を開いて乳房をあらわにした。乳房は小さくはなかった。体に似合った膨らみだった。碗を伏せたように丸い。その乳房を信長の手が包み込む。

揉みあげる。乳房を揉まれて、やっと震えが止まった。乳首が桃色をしている。乳暈もぷっくり膨れ上がっている。

多くの男を知っているわけではない。ほんの三人である。男にのめり込もうとはしなかった。男に求められて体を開いた。男はのしかかってくる。そしてすぐに果てた。

遊びだった。男に抱かれることにこだわらなかった。壺に入ってきて男はすぐに放出する。まぐわいとはこんなものだと思っていた。そして、少しずつまぐわいのことを知ってきた。

信長は湯帷子の前を開いた。とくに肉付きのいい腿である。男の手が腿を撫でる。その手の動きを見ていた。

すぐに腿が開かれるのかと思っていた。男の手は腿を撫で、そして尻に向かう。男の手に肌を撫でられるというのは悪くない。このように余裕のある男はいなかった。切れ込みをいじってすぐに一物をさし込もうとする。

お良は、裸になり、うつ伏せになっていた。信長は腰から尻のあたりを撫でまわしていた。

「きれいだな、若いということはいいことだ。肌もよく張っている」

よく張っていて弾力がある。撫でまわし、肉を摑む。そしてまた撫でる。そうされることがお良はいやではなかった。撫でられていると、少しずつ感じてくるのだ。

少しずつというのがよかった。若い男にいきなり切れ込みをいじられるのは好きではなかった。いじってそこが潤みはじめると、すぐに没入させてくる。

まだ少ししか潤んでいないのに没入してくる。だから刺激が強すぎて、すぐに放出させてしまう。いまではそれでも感じるようになってはいるが、はじめのころはほとんど快感がなかった。放出すると男は納得してしまう。

男は正常にもどる。お良はまだ感じはじめたばかりである。そのときが妙に恥ずかしかった。あわててさらしていた肌を繕ったものである。



「きれいな尻だ。女はこうでなくてはならん」

信長への怖ろしさは消えていた。思ったよりも優しい。女に接するときだけ優しくなるのかもしれない。女にとってはそれでもよかった。

腰と尻を撫でられただけで、体は甘くなっていた。仰向けになれという。裸のまま仰向けになるのはいやだった。湯帷子を着て仰向けになる。前を左右にはねられる。男の手は内腿にかかる。そして撫であげていく。

はざまにたどり着く。はざまに手が上下する。指が切れ込みを分けた。そこは指がなめらかに動くくらいは潤んでいた。そこに指が躍る。腰が動いた。自然に動いたのだ。

このまま入ってきてもらってもいい、と思う。こんなに甘い気持ちになったのははじめてだ。子壺の奥のほうに、白い玉が生じたような気がした。それがくるくると回りはじめるような気になる。

くるくる回りながら少しずつ溶けていく。子壺の口から、露が流れ出すようだ。それが壺の中にあふれ、壺口からにじみ出てくるような気がする。

「あーっ」

と思わず声が出た。そして腰が動く。指が肉の芽に触れてきて、思わず声をあげた。指の動きも優しかった。若い男だと、芽を無理に擦ったりする。そうすれば女がよろこぶと思ってい

るのだ。

芽にはしつこく触れてこなかった。指が壺の中に入ってくる。お良は呻いて尻を浮かした。そして腰を回した。腰のあたりが妙に痺れたようになる。

「口取りができるのか」

と言う。口取りせよというのではない。お良は、ハイ、と言った。そして体を起こす。信長は仰向けになった。湯帷子の前を開いた。

一物はそこにあった。膨らんでいるが怒張しているのではない。一物を手にする。そして握ると弾力がある。若い男たちの一物は堅かった。堅くてひくひくとしていた。

信長は四十八歳になっている。女体への興味が薄くなったわけではない。もっとも、いざとなればシャンとなる。お良は尖端に舌を当てた。その舌を這わせる。乾いていた尖端をなめらかにする。そして尖端だけを咥える。舌を躍らせる。若い男は入れてくると、すぐに放出する。だからはじめの一度は口で取ってやることもある。二度目からだといくらか長くなるのだ。

お良は、仰向けで腿を大きく開いた。双眸はしっかり閉じられている。男の目が切れ込みを見ている。

そこは露が流れ出すほどに潤んでいた。

こんな甘い気持ちになったのははじめてである。体が溶けていきそうな気持ちだ。脳の中まで潤んでいるような気分になる。



信長が腿の間に入ってくる。一物が入ってくるのだと思った。切れ込みは開きかげんになっている。指で切れ込みが拡げられた。

体の奥の奥まで拡げられたような気になる。

「あっ」

と声をあげた。目を開いて見た。信長が股間に顔を埋めていた。切れ込みを舐められたのだ。舌がそこに躍る。お良は声をあげて、尻をゆすった。

「お情けを」

と口走っていた。

「そこをいっぱいにして」

二度三度と舐めあげる。壺口がしきりに伸縮しているのがわかる。喘いでいるのだ。舌で肉の芽を舐め上げられて、ヒッ、と声をあげる。尻をゆする。

子壺の奥の白い玉が回転を早める。腰のあたりがせつない。

「早く」

と声をあげた。

ようやく信長は顔を上げた。そして腰を進めてくる。尖端が壺口に当てられた。

お良は息をのんだ。尖端が壺口を開いて滑り込んできた。
声をあげて尻を突き上げる。一物は一気に入ってきた。根元まで入ってきた。
お良は男の腰にしがみついた。壺の中が一物でいっぱいになっていた。しきりに腰が回っている。
せつなくなって、腰を弾ませる。壺の中の一物をしっかりと捉えたかった。しっかりと壺口を締めつける。
「好きです、好きです」
と言って悶える。しきりに腰を回す。頭の中が白っぽくなった。体がこきざみに震える。
体が強直した。閃光が頭のてっぺんから突き抜けていった、と思った。
ほんの一呼吸だろうが、失神した。そして手足から力が抜けていく。ふと目をさました。自分がどうなっているのかわからない。
「恥ずかしい」
と言って、男の体にしがみつく。気をやったのははじめてだった。こんなにいいものだったのかと思う。
そこまで体ができていたのだ。ただ、若い男たちが早すぎたので、絶頂まで達しなかっただけなのだ。男たちがもう少し待っていてくれれば気をやれたのかもしれない。



一物はまだ壺の中にあった。それが不思議にさえ思った。
お良は信長が動かなかったことに気付いた。お良が勝手に動いて気をやったのだ。
「お舘さまは、どうなのですか。わたしの体ではいけませんか」
「じっと耐えている」
「どうして耐えているのですか」
「出してしまうのがもったいない」
もったいない、という考え方もあるのだ。
とはじめて知った。若い男はあっさりと放出してしまう。
壺の中で一物が動いた。とたんに声をあげて腰を振る。回す。
「また、よくなってきます」
と口走った。まぐわいというのは、こんなによかったものかと思う。
信長は、徳川家康、堺の今井宗久、そして明智光秀の部将、斎藤内蔵助の三人が企んでいることを全く知らなかったし、思ってもみなかった。
自分のやり方に、部将たちが怖れ、怯えているとは思ってもいなかった。佐久間信盛と林通勝を追放したのにはわけがあった。部将たちの気を引き締めるためでもあった。
佐久間信盛は、石山本願寺、農民たちに優しすぎた。攻めないで信長の考えに反抗したので

ある。

信長は仏教徒をみんな殺してしまいたかった。僧たちも信者たちも信長に反抗した。

信長が一向宗と戦ったのは、仏教と神道の戦争だったのだ。川中島で武田信玄と上杉謙信が戦ったようにである。

信長は無惨に僧や農民を殺したわけではない。戦争となれば相手を殺すのは当たり前のことだ。

足利将軍家は、源頼朝の流れで神道であったはずである。それがいつの間にか仏徒になっていた。武田信玄に協力を求め、石山本願寺と手を握った。だから、義昭を追討したのだ。

仏教に対して佐久間が同情したのが許せなかったのだ。信長には、佐久間信盛、林通勝に対しては正当な理由があった。

だから、部将たちがおのれを怖れていたとは思わない。信長の部将として働いていればいいのだ。そういう部将たちを追放しようとは思わない。

徳川家の正室築山殿を殺させたのは、いま少し考えるべきであった。武田に通じていたとしても、たいした情報があるわけではない。放っておけばよかった。

築山殿は淫乱だった。家康のあつかいがよくなかった。それに今川義元の姪として信長を恨んでいた。それで家康に殺させた。



築山殿を殺して、その嫡子である信康をも殺さねばならない、と思ったのはそのあとだった。

信康は当然、信長を恨むことになる。

徳川家康に謀叛を起こされても困る。それで信康には自刃するように求めた。あるいは家康が反旗をひるがえすことになるかもしれないという思いはあった。

信長は、膝の上にお良を跨がらせていた。壺の中に一物は入っている。両手でお良の尻を抱いていた。

このところ、信長はお良が気に入っていた。若いし、好きものだった。信長によってはじめて女にされたのだ。お良のほうから信長を求めてくる。それでつい応えてしまう。

お良の体はそれほど痩せてはいないのに軽かった。抱き上げた尻の感触もよい。武家の娘ではない。奔放だった。

はじめは信長を怖れて震えていたのにである。お良はそのまま仰向けになった。信長の両膝はお良の尻の下にある。

お良は肌のほとんどを信長の目にさらしていた。乳房から白い腹、そしてはざまでもさらしていた。眼下には申しわけ程度の黒い茂りがあった。

信長はお良が可愛かった。安土城にいる女たちが可愛くないわけではなかったが、乳房も腿も、そして尻も可愛かった。どこもかしこも気に入っていた。そのお良の父宗久が、信長暗殺

を考えていようとは思ってもいないのだ。

はざまとはざまがぴたりと合わさっている。お良が尻を回す。はざまが擦れ合う。尻を弾ませる。露が音を発していた。

## 三

天正十年（一五八二）——。

正月、安土城は参賀の部将たちで沸き返った。この年に信長は四十九歳になっていた。信長は得意の絶頂にあった。

朝廷は信長を征夷大将軍にすることを決めていた。だが、信長は受けていなかった。そのような位などどうでもよかったのだ。

三月——。

信長は甲斐を侵攻する。嫡子信忠は大軍をひきいて、駿府から甲府に乱入する。

武田勝頼は、天目山に逃れ、近臣と共に自刃する。これで武田氏は滅亡した。

武田氏をここまで追って滅亡させたのは、仏教徒だったからである。

仏教徒は信長の敵だった。



その前に塩山恵林寺（えんざんえりんじ）の僧百人を山門とともに焼き殺した。快川（かいせん）和尚は、心頭滅却すれば火もまた涼し、と言って火の中に入った。

これで、大きな敵は中国の毛利だけである。その毛利を羽柴秀吉が攻めている。

近く結着するはずである。

信長が安土城にもどったのは四月末だった。裏で徳川家康が密議をしていることは知らなかった。信長はどういう幕府を作るかを考えていた。

足利幕府が神道からどうして仏教に転じたのかを考えていた。足利将軍家は兵を持たなかった。全国に声をかけるだけで、各地の武将たちが集まって味方するものだと考えていた。

義昭は、武田信玄、浅井、朝倉に檄をとばして反信長軍を編成した。信玄は病死し、朝倉は信長に負けた。将軍義昭は京を逃げて、石山本願寺と手を結んだ。

義昭の頭の中には、足利家が神道であることを忘れてしまっていた。

天下を握ってしまうと仏教に移ってしまう。神道は常に荒々しい。その荒々しさに疲れてしまい、穏やかな仏教に転じてしまうものらしい。

信長は、おのれの幕府をそのようなものにはしたくなかった。仏教に転じるもの許さず、と思った。

仏教徒になると、合戦がいやになる。軍兵を必要としなくなる。将軍家の力は弱くなる。義

昭の兄義輝は兵を持たないために、松永弾正久秀に殺されてしまった。

将軍家はいつも戦えるように兵を維持しておかなければならないのだ。

義輝が討たれたとき、義昭は寺で僧になっていた。それが還俗して将軍になった。信長ははじめから仏教徒将軍に仕える気はなかったのだ。

安土城を将軍の城とする。その城の周りに信用できる部将を配する。部将たちが国元に帰ったとしても、半分ずつ交代で、城を守らせる。

もちろん、織田家の兵も安土城の周りに住まわせる。構想はいろいろあった。

織田将軍家を何代も、何百年も続けていくだけの構想は練っておかなければならない。

五月、信長は、森蘭丸など小姓衆、近侍を連れて京の宿舎、四条西洞院・本能寺に入った。もちろん、護衛の剣客・源五郎丸十蔵もついて来ていた。茶会を開くためである。その茶会を勧めたのは今井宗久であった。

毛利の備中・高松城を羽柴秀吉が囲んでいる。秀吉を助けるために明智光秀に出陣を命じてある。茶会がすんだら、信長も西へ向かうつもりでいる。

いま、敵は毛利だけである。一気に押し潰してしまう。それからのことを考えていた。織田幕府のことである。

足利の轍を踏まないようにすることだ。



信長は天井を見ていた。

天下はおのれのものになった。あとは仕上げに毛利を討つだけだ。日本中に敵はいなくなった。

尾張半国の織田家が天下を取るまでになった。力だけではなかった。多くの運があった。桶狭間の戦いがそのはじめだった。それも運だった。

待って運が向いてきたのではない。運を摑み取ってきたのだ。強敵が戦いもせずに死んでくれた。

多くの合戦に負けて逃げ出した。命からがらであったこともある。合戦は常勝というわけにはいかない。負けたと思ったときにはさっさと逃げることだ。逃げれば再起できる。

敵対する者を殺すのにためらいはなかった。ためらっていてはおのれが殺される。佐久間信盛には石山本願寺を攻めるのにためらいがあった。慈悲心があった。合戦にそのような心があってはならない。だから信盛を追放した。

信盛の慈悲心は他の部将にも伝染する。すると軍隊ではなくなってくる。おのれに厳しくならなければならない。

運、鈍、根、感、厳という。感は勘である。勘がなければ、武将は生き残れない。合戦にも勝てない。厳はおのれに厳しいことだ。おのれに甘えると、甘えるのに馴れてくる。おのれに

甘えては生きられなくなってくる。

## 四

六月一日――。

本能寺表書院で茶会が行われた。堂上公家、僧侶、豪商ら数十人である。茶頭は今井宗久だった。

斎藤内蔵助の兵は動き出していた。明智光秀は知らないことだった。今日流に言うと、光秀のアリバイはあったのだそうだ。つまり本能寺には行かなかった。

この日、徳川家康は堺に遊んでいた。これもアリバイを作るためである。

茶会は盛会だった。信長も満足気であった。茶会が終わって、出席した者が帰っていく。今井宗久の仕事はそこまでだった。

あとは斎藤内蔵助が引き継ぐことになる。茶会のあと、信長は湯に入った。湯殿は特別に作らせた桧風呂だった。湯は外でわかして注ぎ込む式の湯槽だった。湯に入って体をのばす。

敵は毛利だけ。天下は取った。だが、内に敵がいることには気付かなかった。いまは家臣のほとんどが敵だった。



羽柴秀吉だけは別である。

信長は驕っていた。誰もおのれに敵する者はいないと思っていた。

お良が裸になって入って来た。そう命じてあったのだ。お良はそのまま裸だった。股間も隠すようなことはしない。信長はその裸身を眺めていた。

湯を浴びて湯槽の中に入ってくる。魅力的な裸である。小柄だが女そのものである。そのお良を抱き寄せた。お良は背からすっぽりと信長の胸の中に入ってきた。

肌はすべすべとしてなめらかである。食ってしまいたいほど愛しかった。乳房を手で包む。はじめのころよりも膨らみが大きくなったような気がする。乳房を揉む。揉むと弾力が手に伝わってくる。それが手に快い。乳房の摑み心地というのは女によって異なるものだ。乳首もいくらか大きく色づいてきたような気もする。

「そなたは、可愛い」

「いつまでも、可愛がって下さいませ」

湯槽から流しに出る。信長は腰掛けに坐る。お良が指で擦る。背中から腰のあたりまで擦り、前に回る。

信長は目を細めてお良の動きを見ていた。指で擦って湯をかける。信長の一物は勃起していた。その一物を手にしていた。股のつけ根やふぐりを洗う。

お良はそこに這うようにして一物を口にした。信長の目には白い背中と尻が見えていた。優しく女らしい尻である。

体を起こし、膝にまたがってこようとする。

手ではざまを押えた。そこは露で濡れていた。切れ込みの中に指を躍らせる。お良は声をあげ腰を回す。そのさまがひどく色っぽいものに見えた。

明智光秀の軍一万三千は、その日の夕方になって居城の丹波亀山を出発した。粂野についたのが六月二日の真夜中だった。

またがってこようとするお良の体をくるりと回した。そして尻のほうから一物をさし入れた。背座位である。股がいっぱいに開かれた。お良は声をあげた。恥ずかしい形である。だが恥ずかしさも歓喜の一因である。

すでに六月二日になっていた。明智光秀の一万三千の兵は、老の坂を越えた。そのとき部将の斎藤内蔵助利三は、光秀に別行動をとらせてくれ、と言った。

光秀には何のことかわからない。一生に一度の我がまま、と言った。利三の二千の軍は、隊列を離れていった。不審に思った光秀は、利三の一行のあとを尾行させた。

信長は夜具の中にあってお良を抱いていた。抱き寄せて尻を撫でる。冷めたい尻が手に心地よかった。



尻を撫で腿に這う。その手を内腿に入れる。内腿の感触を味わいながらはざまにたどりつく。切れ込みを指で開くと、そこは湯で洗い流したばかりなのに、潤んでいた。そこに指を躍らせる。声をあげて腰をくねらせる。それがひどく淫らだった。

お良の手は一物を握っていた。一物は怒張していた。お良にはその怒張がうれしかった。男の指先が肉の芽を撫であげ、そして摘む。濡れているのでつるんと滑る。

その度に声をあげて腰をゆする。

「お情けを」

と泣くような声で言った。湯殿では気をやらなかった。だからいきたいのだ。指が壺の中に入ってきて掻き回す。そこは潤みでいっぱいになっていた。

お良ははざまを手に押しつける。気がいきそうでいかないのだ。しきりに腰を回し、しゃくりあげる。

「お舘さま」

と声をあげる。ようやく信長は体を起こした。そして腿の間に腰を割り込んでくる。

「早く、早く」

と口走る。そして一物を手にする。それを引き寄せて壺口に当てる。つるんと滑り込んで手を放した。信長の腰にしがみつく。

はざまを押しつけて尻を回す。そして、

「いきます」

と声をあげた。体がこきざみに震え硬直する。体の中を何かが回転し、全身が痺れた。気をやったのだ。ゆっくりと歓喜が薄れていく。

体から力が抜けた。信長が動いた。ズキンと疼きが走った。あわててしがみつく。一物はまだ壺の中にあった。腰を回す。痺れが拡がっていく。

「また」

と声をあげる。体が震えるのだ。信長がゆっくり腰を回した。一気に快感が突き抜ける。体から力を抜いている余裕はなかった。

またまたである。信長が抜き差しをはじめた。腰が回る。一物をねじり込むように入れてくる。そしてひょいと抜く。うっ、と声をあげる。

「狂います」

口走る。たしかに狂っていた。どうなっているのかわからない。体がバラバラになってしまいそうだ。体が浮き上がっていきそうで、しっかりとしがみつく。

続けざまに絶頂感が襲ってくる。信長の抜き差しが早くなる。そして、どどっ、と噴出されるのがわかった。精汁を壺に受けて、また悶えた。壺の中で一物が萎縮していくのがわかる。



それがぬけないようにはざまを押しつけた。

廊下を走る足音を聞いて、信長は目をさました。そばではお良が眠っていた。

部屋の前で足音が止まった。

「殿」

「誰だ」

「蘭丸にござります」

「何があった」

「この寺、兵で囲まれております」

「なにっ、何者だ」

信長は起き上がって、お良も起こした。そして下帯からつけはじめる。お良は騒がなかった。

別の近侍が走って来た。

「桔梗の旗印にございます。明智どのの手勢と思われます」

「光秀か、光秀にはそのような勇気はないはずだ」

「しかし」

「よい、いまさら何を言ってもはじまるまい」

合戦の仕度をせよ、と言っても小姓、近侍四十人足らずではどうしようもない。
このときはじめて、信長は身内に敵がいたことを知った。
「敵の数は三千ほどだと思われます」
「わかった」
と言って、信長は障子を開いた。覚悟を決めなければならない。一人も逃がさぬように寺を囲んでいる。
「これまでだな、このようなところで死ぬとは思わなかったな」
隅に、源五郎丸十蔵がうずくまっていた。
「十蔵、そのほうだけは斬り抜けよ」
「無理でございましょう」
「一人で行けねば、お良を連れ出してくれ」
「それも無理かと思います。斬り抜けられるのなら、まず殿をお連れします」
「わたしは、お舘さまと一緒に死にます」
とお良が言った。
パン、パン、パン、と何かはじける音がした。鉄砲だ。
「火をつけられました」



と小姓が走って来て叫ぶように言った。
ワーッ、
と兵たちのときの声を聞いた。
寺には、城のような抜け道はない。
「それぞれに斬り合って死んでくれ」
と言って信長は障子を閉めた。
これまで何万という人を殺してきた。
だから死の覚悟はできている。四十九年を生きてきた。その間に何度の合戦をやったことか。死ぬのにためらいはなかった。
だが、天下を取るのにいま一歩というところで死ぬのは未練があった。
お良も商人の娘である。死なすことはなかった。だが方法はない。
火が回ってきた。部屋がまっ赤に染まる。
信長は脇差を抜いた。
その翌日、源五郎丸十蔵は京の町を歩いていた。十蔵は、本能寺が焼け落ちるのを見ていた。
これまで十数年、信長を守ってきた。だが、守りきれないときがやって来たのだ。
本能寺を襲ったのは誰なのかを探索しようと思った。信長が死んだということは全国を走り

抜けるだろう。

信長は光秀にはそんな度胸はない、と言った。その後ろに誰がいるのかだ。

この作品は一九九二年に東京スポーツに連載された「信長と女たち」を一部削除し、まとめたものです。

# 解説

磯貝勝太郎

日本の歴史上の三大英雄は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康である。かれらの性格は三者三様で、まったく異なっていたように、女好みもちがっていた。

秀吉は上淫好みなのに対して家康は下淫好みだった。上淫とは身分の貴い女を犯すことであり、下淫とはその反対である。秀吉の正妻、寧々は、それほど貴い身分の生まれではないが、それでも結婚当時においては、秀吉よりはるかに身分の高い家の娘であった。彼の妾たちは、有名な淀君が信長の従妹と浅井長政の間に生まれた娘、加賀殿が前田利家の娘、三の丸殿が蒲生氏郷の妹、松の丸殿が京極高吉の娘、いずれも高貴な家の出身だ。秀吉のこの上淫好みは、彼のロマンチストの性格によるというよりも、卑しい生まれによる劣等感の裏返しだといえよう。身分の高い女性に対する秀吉のあこがれは、彼の権力が増大するにつれて、征服慾となってあらわれてきたのである。

秀吉とは対照的に家康は下淫好みの典型だ。正妻、築山殿をのぞいては、彼の愛した女たち



は一人として上流階級の出身者はいなかった。下級武士や身分の低い神職の娘、あるいは百姓の娘など、下層階級の生まれで名前すらわからない。しかも、いったん嫁いで後家となった女性ばかりである。いかにも現実主義者である家康にふさわしいともいえるのだ。正妻の築山殿は、今川義元のいとこであった。家康は幼少年時代から二十歳ごろまで、義元の人質となっていたので、彼にとって義元はもっともこわい人だった。したがって、築山殿も家康にはおそれつつしまねばならない煙たい存在の女であった。しかも、年上で気が強く嫉妬深い女性だったので、家康は築山殿に苦しめられた。それゆえに、義元が信長によって亡ぼされるや、別居して夫婦関係を絶ってしまった。夫婦の道を絶ったのち、彼女は姦通したり、叛逆をくわだてたり、ついには長男の信康を非業の死にいたらしめたので、「身分の高い女などを妻や妾にするものではない。身分の低い生まれの女が無難だ。それも後家のほうが当り障りがなくて安全だ」と、考えるようになったのは、きわめて自然のことである。

信長の女好みについては、峰隆一郎の『織田信長　一妻六妾伝』に作者独自の艶やかな筆使いで、おもしろく描かれている。彼の女好みは、両親、とくに母親の影響を受けているということである。母親のるいは、信長の弟の信行を偏愛し、信長を嫌った。彼が幼いころから奇行の多い餓鬼だったので、一緒に住まなかった。母親の愛情に飢え、母性にあこがれて育った信長は、六歳年上の後家で、しっかりした女らしい女の吉乃を、もっとも愛した。二人の間には、

ごく普通の意味での幸福な関係があった。信長を芳醇な母性で包みこみ、やすらぎの時をあたえてくれたのは吉乃であった。信行に織田家をつがせたい母親のるいは、信行の後で糸を引き、彼をそそのかして画策するので、信長は、るいを憎むようになる。母の情を知らず、母の乳をのんだことのない信長は、三人の乳母の乳首を咬み切っている。疳が強いので、その乳首が母親のものでないことを知っていたからだ。母の乳房の恋しい時期に、その乳房をあたえられなかった。だから、四十三歳になっても母の乳房を側室のお慈に求めたのだ。いわゆる母の乳房願望である。お慈は信長の嫡子である信忠の乳母だった。信忠に彼女の白くて美しい乳房をふくませているときの、その乳房に信長は魅せられたのである。

信長の女好みは、家康のそれに似ている。二人とも後家好みだからである。だが、後家でも年齢がちがう。信長は、吉乃は例外として、直子、お稲、尚子など、いずれも若後家だが、家康は、三十、四十のまぐわいに馴れた後家である。秀吉の好みは、高貴で若い美女だった。とくに手入らず（処女）の女性を好んだ。信長は生娘のお市を愛し、セックスの開眼をさせているが、お市は幼いころから信長をしたっており、強敵の今川義元との合戦で信長がたたかえば、生還は期しがたいので、お市のほうから抱いてほしいと願い出て、女になったのである。信長が生娘とまぐわったのは、生涯でお市一人である。献上される美女がいても、生娘と聞くと首を振った。女は楽しみに抱くもので、生娘では楽しめないから嫌ったのだ。秀吉が生娘を好んだのは、彼がその女のはじめての男になりたかったからである。



信長と彼の正妻、帰蝶との関係は、家康とその正妻、築山殿との関係にいささか似ているといえよう。信長は斎藤道三の娘の帰蝶を本妻としたが、彼女は夫を愛していなかったので、夫婦のセックスに潤を欠き、二人の関係はよくなかった。道三が死ぬや、信長の帰蝶に対する関心は急速に失なわれてゆく。彼女は自分から父親の密偵役を引き受けていたのだから結婚生活が不幸に終わったのも、いわば自業自得である。家康と築山殿の夫婦関係もよくなかったので、いとこの今川義元が死ぬや、家康は彼女と別居し、夫婦の道を絶っている。しかも、築山殿が武田勝頼と内通していたと信長に疑われた結果、家康は彼女を殺さざるをえなかったのである。

この長編小説は、織田家の家督をめぐる激烈な骨肉の争いを経たのち、桶狭間の戦い、長篠の合戦、美濃攻略後、天下統一の志の半ばにおいて、本能寺で倒れるにいたるまでの信長の生きざまをタテ糸に、信長をめぐる美しい側室たちとの官能的な関係をヨコ糸として、あやなした妖艶な作品で、時代小説作家、峰隆一郎の力量がいかんなく発揮されている。

（平成六年九月）

織田信長 一妻六妾伝

特選時代小説

著　者　峰　隆一郎
発行者　櫻井道弘
発行所　廣済堂出版
〒107　東京都港区赤坂6-17-5
電話　03(3584)7610(営業)
03(3584)6123(編集)
振替　00180-0-164137
印刷所　廣済堂印刷株式会社
〈編集担当〉谷口広寿

©1994　峰　隆一郎

Printed in Japan

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-331-60431-4 C0193